

# 同人誌 あごら agora 第2号

2024年12月8日 ヘルダーリン研究会発行



目次

創世LOGOS

小泉 友美

3

IDEA イデア

小泉 友美

8

エガレ 迷えるミステイク

小泉 友美

16

ジエラルディヌ

藤守 創

22

ヘルダリン覚書2

江尻 潔

26

『くりぶとむねじあ歌日記』抄

日守 麟伍(津城寛文)

30

詩令和哀傷歌

勝又公仁彦

42

水面は…

鎌田 東二

58

詩作するのは誰か

深澤 英隆

71

十字架のヨハネのあまり名高くない詩の私訳

鶴岡 賀雄

81

アイランドの「とりかえ子」(チェンジリング)

谷口 眞理子

97

2024夏 母を送る 〈日々の記録より抜粋〉

野々目 月泉

107

冬の星座

犬神

鎌田 東二

133

192

表紙絵(石絵)

小泉友美

編集後記

鶴岡賀雄・津城寛文・鎌田東二

193

執筆者紹介

195

奥付

付録 「災害学：災害社会支援者研修センター」

ほか チラシ・表紙

ふたりのおんな

贖罪の山羊

聖餐

救いと新生

真つ黒な闇に包まれた岩に降りたつたおんなは、あまりの産みの痛みに歯を食いしばって、その足元には半月が  
転がり、頭上には太陽が燦々と12の冠を戴く。

「ゆらゆら、さらさらと降りたまえ」

28回祈りを唱えると、4という世界の象徴、7という完全数の使命を覚えて、あらゆる悔い、悩み、後悔の念  
は素晴らしい閃きとして、贖って浄めてくれる。おんなの右手には、銀の凍てついた輝きに溢れかえる手鏡が握  
られて、今しがた産まれた女兒の臉が映されるまま。やわらかく、丁寧になめした仔羊の皮で身体を包みこむと、  
その児の額には、火の輪をくぐって得る忘我と法悦の印、高く盛りあがる波の向こう側にひろがる、その至福と  
休息が、姿のみえない父親へのおんなの忠実なる愛によって、その愛児の額に宿命として刻まれて、顕れている。  
はつとおんなは後ろを振り返ると、すでに成長した娘が腰まである長い髪を揺らして、つま先立ちながら、小指  
を唇にそつと押しあてて、舞う。葛の色づく弓矢を背に、剣を腰に当てて、こころの気涸れをはらいたまえ、ゆ  
らゆら、さらさらと。頭上の2本の巻き角を泣くように、両掌でおおいながら御座にくつろいで、これから繰り

広げられてゆく巻物を開いてゆく。やはりそこには、神秘の仔羊が描かれており、勇毅さと常生に敬して歌うのは、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、其の栄光は全地に満つ。」

この1000年は一瞬に過ぎず、永遠の果てには何も無い。娘はすでに成熟した時を迎えて、おんなとしてあらたに生まれ変わり、羊のやわらかなめし皮をかぶって、その左掌には7つの星型の血痕、オリブ色の楕円形のマンドラはなんと異なる複数色の円心円状の帯として重なり合う。中心に向かうにつれて、神聖な輝きがあふれ、その暗さは計り知れない。果てしなく透きとおる青色の天蓋から、滝のようなカーテンの襞に隙間風が揺れて、闇と光のコントラストが重なり合う。美しい布には、蝶とアラベスクの萌あがる繊細な模様で綴られて、アルファベットのYが何重にも重なって、古代の密やかな空気が、火、水、土という、祈りがつぶやかれる。テトラクティスの10の重なりは、音楽の無限なる宇宙へとひろがってゆき、折り重なる線は、まずゼロ次元、三次元という四面体、三点から作られる平面と変化してゆく。完全4度、完全5度、そしてオクターブの比率としての確かなるその音程は、10個の数字を4行に並べて形成される正三角形へと。自然界の原理、宇宙の調和、昇天、そして永遠の領域の神秘数を胸に留めて、アーモンドの種子の形で内包している。美しいおんなはふと天空の彼方へと、大きく瞳を見開き、大きく吐息をもらすと、この顛世のあきらめを覚悟して、ようやくこの放縦、魂の奔放へと通してゆくことができる。一刻一刻の祈りの時間に目を閉じれば、その花、咲き誇る虔心に、薫り高く、足元に散ってゆく。透きとおって、薄い桃色の空の彼方から紅くとどろいてくるのは、炎と血の洪水、その生温かく嵐の天空にひろがってゆく、複雑に混み入った大変動は底しれぬ海、それゆえに、もつと深淵なる啓示が必要なのだ。謙虚さゆえに、人間は自ずをありとあらゆるすべての被造物の下に身をゆだねて、その深淵へと飛びこんでゆこう。かつて一人であったおんなは、いまや二人のおんなとして、うとうとと微睡むままに、何も欲せず、何も望まず、何も識ることなく、ただひたすらにその驚異的な力によって視覚、音響は霊夢としてあ

らたに産み出されてゆく。このところに生まれる果てしない、それ以上の超越の体験とは、7つの頭と、10の角を緑龍は海底に潜み、真つ赤に大きく開いた口には王笏をくわえて、純金の7つの冠。地上におけるあまたの権威と力を象して、大地を揺らがす7つのトランベットの音、地上より燃えあがる竜巻の炎、雹と洪水。苦い水は黄緑色のニガモヨギのアブサンで、純水を加えると白濁するけれど、同じ水源であることの不思議。勢いよく四方から押し寄せてくる荒波を避けて駆けあがったシオンの丘は、足元から崩れてゆき、おんなもまたその爆流に呑み込まれてしまった。

遙かなる向こう側より声が聞こえて、またしても多くの水のとどろきや、激しい雷が轟くなか、気がつくくと、あらたに生まれ変わったおんなの婚礼の日が訪れ、花嫁は輝くばかりの衣装をまとっている。清い麻の衣に輝く、碧玉、サファイア、瑪瑙、エメラルド、赤緋めのう、かんらん石、緑柱石、黄玉、翡翠、青玉、紫水晶、真珠。命の樹が新しき川のほとりに植えられており、この新生の祝いの席を祝っている。

地面に激しく生い茂る草々に、どこかからか雪が舞い降る。ああ、この世の乱れや動揺がおよばない天上の典礼はいかに素晴らしいことか。これらの勝利と狂乱シーンは、ありとあらゆる災害のヴィジョンに対応するために、不可欠なことか。純白の花嫁の胸元には、ライラック色のぎざぎざの八重の薔薇が咲き誇り、極彩色の垂れ布は、あちらこちらの糸がほつれて、色があせて抜けてしまっている。

新生を道うこととは、万有の根拠、言が今刻々と自然宇宙を満たし尽くして、時に応じてその生命をその各々の位相に語りかけてくる。新しく、無から次々と生起する創造行為を通して、驚くべき一つの筋の運びがここを打ち、命名と祝福、生命的律動が勢いよくこちら側へ迸ってくる。

「光あれ！」

その賛美の所業は、大水の間の一つの天空が作られ、そしてこの2つの大水の間を分けて流れ出してくる泉の湧

出。

ようやくこの大水は一つの所に集まり、乾いた所に青草と種を生じて、芽を出して花が開き、果実が結び、種を結ぶ果樹が地上に生じてゆく。この美しいトーヴの息づかいは識られてゆき、果てしなく広がるカオスの上に凜然として昼と夜が分けられてゆき、太陽、月、星々が言との自由な出逢いに変容してゆく。円いという内的対話を交わして、人と人、人と自然調和の創成が集い、ようやく顔と顔を合わせる時が訪れる。

その世界の生成は丸い球形であり、もろもろの形角度のなかで最も美しく、最も収容力が大きく、働きやすい形であり、火、土、水と空気から生じて、正四面体、正六面体、正八面体と万物を包みこむ天の運動は迷うことなく、唯一の、しかも規則正しい運動であり、上昇と下降の点々で変化してゆき、惑星天が生まれる。生まれ、産み、創るその生のいとなみは、新しくおんなの鎮魂の祈りに繋がれてゆき、この生き生きとして、滅々とした再生の循環の、脈々緑々とした山の連なる展開、よせてはひいてゆく大海に飛びあがる銀の魚の群れ。

「今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。どうぞ、来てください。」

両脇をゆっくと閉じながら、最後の息をひきとりながら、この祈りを、あなたに！



# 「イデア」

小泉 友美

2つの水盤

星座の羅針盤

パンドラの箱

極彩色の数式

2つの白大理石からなる水盤の左の柱身には、目の閉じられたイルカと緑色の竜の斑点、右の柱身には、実りの無い花網が交互に彩られて、4匹の怪物の異なる足で支えられている。その太い足元には、まったく表情のない数人の男女が鎖でつながれ、丸い果実が熟れるままに。

水滴が迷る桃色の水盤には、セピア色のあこや貝殻と魚、棕櫚の葉、蛇をつかむ鷺が飾られて、この神聖な場所から生まれてくる愛の対話。もしも語り聴く言葉が分かり合えなければ、愛によって分かりあおう。一方は認識と出。

もう片方は、無知と忘却。

いばらのとげとげと、緑々と生い茂る葉の悦楽には、異わりのない事を識る。

もしも、この嘆きを増えるままにしてしまったら？

勿論、この愛もまた倍になるのであれば。

苦しみ。哀しみ。そして、苦痛の繰り返し。

どうして、こんなにも、記憶と目に映る世界の異わりの中で、気持ち揺らいでしまうのか？

密接に近づいては、遠のいて、まるでうまく混ざり合わない水と葡萄酒のように、二人の会話は合わさってゆく。水と温かさは、こうして繋ぎ合わされてゆく。

相手には、いきいきとした活動力があり、悲嘆から悲嘆が連帯しては、いたわってくれれば、それなりに嘆きは深まってしまう。

うとうとと眠りに堕ちて、うとうととまた微睡んでしまい、こうして深い眠りに惑わされないように、記憶から外されないように。ただ、ひたすらに泣くままに。

愛によって生かされ、

愛によって呼吸をして、

愛によって創られて、

愛によって養われて、

愛によって繋がり、

愛によって訪れて、

愛によってここを去り、

愛によって、また生まれれてゆく。

善きものを、永久に所有せんとする人間の欲求は、ついには、麗しきものを分泌する出産女神の役を成し、魂、肉体、そして、聖堂の音の感覚はとても重要であって、銀梅花の薫り高き花冠を頭上に頭上に飾ってあるキューピッドの背後には、火花が勢いよく跳ね上がる信仰があり、希望という偉大な存在にうつとりするまま、天上へとそのまま向けられる視線の彼方、その両掌いっぱいに掲げられた花籠、その華はのちに、実りをもたらすもの

としての明るさとして映る。

その脇には、天から祝別された仲睦まじい夫婦がおり、優しい夫婦がおり、優しい夫の両腕に抱きかかえられたままの妻の斜め越しの眼差しは、深く、実に、物憂く、メラニコリア。この世におけるすべての儂さは、キューピッドの額に巻かれた雉の羽に。

二度軽やかに瞼を閉じた妻の足元の脆く、か弱い硝子玉は、この世における不安と虚栄すべてであり、完全なる丸い球体は宇宙におけるハーモニア、苛立ちから果てしなく遠い。

死と宿命から、この顕世の人間達がどこにも

逃げられないことは、目隠しされたキューピッドの眼帯の、黄金、濃茶、赤茶、緋、そして碧のかかった濃緑色…。

まず太陽、彗星、そして流星群。

艶やかで大きな星は、まず東より西に流れ落ちてゆき、東の方の天空に赤き印ある。

陽はますます明るし。

こんな盲目的な愛は、地上のありとあらゆる感覚的な悦楽や、視覚的なものを頑なに拒んで受け入れず、最後には一切、愛という嬉々とした充実感は合理的な思考を追い出してしまった。

キューピッドの両翼は派手やかに目を惹き、近寄ってみると、その色彩は意外にも無色に近い、ほとんど灰色、純白、そして黄土色である。背中に生えた小さな翼は、軽やかなはち鳥のように鮮やかに輝き、この視覚的な美しさ、感覚的な喜び。

それゆえに、私達は女神にむかって、この盲目のキューピッドの目が冴え冴えと開くように、祈りを捧げよう。一気に放たれた愛の矢は、情熱の名にふさわしく、穏やかに円弧を描いては、無茶苦茶に飛んでゆく。人差し指と中指の二本線で、瞼をそつとなぞってゆけば、もういつ、この微睡みから覚めても悔いはない。

遠くから鹿のキューという鳴き声と、こんもりとした茂みから小さい昆虫達は、その象を見せては、さまざまなかたちの影を彩どってゆくようだ。

「なんじ、土より出でし者、

土に帰るべきものなることを思え。」

すきま風が、窓枠の歪みから睦むように流れては、その揺らぎに涙が溢れ出て来る。

ようやく心に留められることは、この一刻一刻と、紡がれる命という生の輝きのなか、残念ながら死の影が近づいていること。

1つ、どうか、その神性、正義、強欲。

2つ、なにか、偉大さ、天使、慎重。

3つ、なのに、天、勇敢と色欲。

4つ、どうして、人間、節約、傲慢。

5つ、どれだけ、想像力、信仰、怠惰。

6つ、なにか、感覚能力、希望、哲学。

7つ、いつ、生命力、博愛、傲慢。

8つ、どこ、元素力、忍耐、虚像。

9つ、どのように、サイコロ遊び、慈悲、軽兆。

そして10は、そのすべての隙間から導かれて、2つの端点で創られてゆく、解答という究極のパフォーマンス。パンドラ。

水と土で創られた女神の誕生。

すべての人々の恩恵(Omnium munis)  
すべてからの制約(Omnium minus)

すべてを与えることのできる地上の女神でありながら、すべてを贈られる女神ではない。

よく磨き、繊細に彫り込まれた水晶の寶石箱を右手に持ち、左手には、青麦と、聖なる啓示を象徴する、葉で詰まった籠を抱えている。

もくもくと煙が溢れかえるなか、あらたに希望の女性として生まれ変わったパンドラは、死と切り離された武器を地面へと落とし、つま先で真つ二つに折れた槍をへし折ってしまった。稲妻のようにジグザグにひびの入った大きな水瓶から、赤葡萄酒、オリブオイル、その他の高価な薔薇の精油、香料が豊かな土壌となるように、吸い込まれてゆく。

この大瓶の底に最後まで残った希望は、外へと逃げ出せないように固く蓋で閉じられている。ぶんぶん飛び交う蜜蜂の巣からは、木漏れ日のような黄金の蜜が流れ出し、パンドラがそろそろと箱を開けようとするしぐさは、けっして穏やかなものではない。

この非合理的な力、この非合理的な魂。この現し世のゆらぎは、ちらちらとまとわりついてくる光によって満たされるように。

パンドラは、その長く深い微睡みからゆっくりと目覚めて、両腕を伸ばして欠伸をして、光輝く庭園の中央に植えられた、八角形の生命の樹のたくましい根、迷路のように折り重なっている枝の発達を象徴している。

檸檬の樹、葡萄の樹、そして、ナツメヤシの樹の樹海の迷路。密やかに、足指を濡らしてくるのは、樹の向こう側にある川からのさざ波の誘い。川岸の堤防は、荒れ狂う水流をせき止めて、いよいよ水の勢いは、魂もこの水流と同じようなものであって、清められ、少しづつ完璧へと磨かれてゆく。

魂は、決して到着することなく、ただ流れの強くて速い大流へと、放出されるのみ。

舟もなく、すべての交通手段が断たれてしまえば、旅する人々はおろおろと立ちどまってしまい、全進することは出来ないであろう。

この川岸は深いように見えて、浅瀬であって、水中に漂う美しい光の反射。

深い水底に、朧げに消えてゆくその影、肉体ではなく、その魂が深く深く、暗い深淵へと沈んでゆく。なんと、おそろしいことか。

ようやく、川岸を乗り越えて、その丘を踏んでゆくと、精神と物質、無限と限度、無形と形式、感情と理性が、交差する柱としてそびえ立つ、色彩の変容と、光の強調性ある。

円柱の光景が見えてくる。

美は偉大であり、偉大なものは善であること。円を成して、配置と均整を探求して、差、合一、反は完全に一致することに。

おそらく、愛をすべてをくつがえす力そのもの。相差、障害のはじまり、途中、そして、終末へ。持続性と無窮性。

「どこに」行くの？

「いつ」来たの？

「どうして」一諸にいるつもり？

望むのであれば、「こつひめ」、「どいでも」。

朝焼けとともに目覚めて、はるかなる道を通り越えて、訪れる群衆にすれ違つては、いったい「どのように」、ここへ来たのか問いている。

「どうして」、「どのくらい前から」、あなたの心から愛する対象が思い出せないのかしら？ 忘れてしまうことの悲嘆や、涙にむせびながら、愛の扉の鍵は、欲望そして、敬意の情によってたかめられてゆき、とても難解で複雑な、悔悟の念、または充実感、視野、聴力によって形成して、記憶と忘却、生と死の天空とは、草木一本生えていない灼熱の道行きに過ぎない。

激しい雷鳴が轟いて、暴風と雨に大地が揺れ動いて、流星が交互しながら、天の川へと流れてゆくまで。魂はおそらく不死であつて、あらゆる悪をも忍び耐えることにあるので、いかに「死の旅路」であつても、希望は捨てられない。

この魂と愛の複雑な闘争を超越して、怯えていた私の元に訪れた運命的な美しい出逢いに、真紅の衣をまとして、こちらへと向かわさせる。この恩寵の極致をみた思いにさせる。

こうして、今しがた口よりつぶやいた祈りの言葉を「向こう側」のあなたとともに聞いてみたい。



## 「エガレ迷えるミステイク」

小泉 友美

序文：

「エガレ」(égare)とはフランス語で、「迷える、道に迷った」という意味である。

この書き物は、ルイーズ・ド・ネアン Louise de Bellère du Tronchay (Louise de Néant むなしのルイーズ 1639-1694)という通称で知られる、フランス女性神秘主義者の「書簡集・祈りの書」から着想を得た。

ルイーズは、西フランス・アンジェにゆかりのある女性神秘主義者で、幼少期に実の家族に虐待されたが美しく育ち、社交界の華となるが、こころを病んで病院暮らしとなり家族世間から見捨てられるという屈辱に苦しみなながらも、キリスト教信仰の元で、献身的に病人達を介護することで、救いと光の勝利を晩年得た。

本文：

胎を裂くような叫び声をわたしはこの身に、この魂に覚えて、よろめき、静けさも、やすらぎも失い、憩う事もできず、ただ戦慄くままに。

この仮借ない炎灼なる苦しみは、幼少期、思春期と続く36年の歲月からなり、「女」としての晴れ晴れとした、艶めかしく、美しい恩寵はすでに過ぎ、歩める歩はもつれにもつれ、いまや老いた皮膚はかさぶただらけ、涙も涸れはててしまった。

もうこんな苦しみはいや。

いつまでも生きていたくないの。

もう、わたしをほうっておいて。

熟れた肉体の犯ちをおかしたと、告解室を後にして、全体重をかけ折れ曲がって、つんつんとしたそのいびつな膝こぞうには、赤紫色の斑点、声ない悲嘆。

なんて、かなしいの。

両眼をつぶって、顕えない聴罪師の息のみ感じる木杵、見つめられる、そして声を聴く。ひそやかな、ささやき声からがらがら声のクレッシェンド。

1つのつぶやき声は、1つの確実なる言葉として発音されて、はらわたにしみるような、確実な叫びとなる。ああ、わけもわからず、罪のおんとなる自覚もなく、もしかしたらそんな女を演じてみたいつぶやきが、こんなわたしを貶めてしまったの？

そんなつよくて、もろい欲望は、足元に落とされた香水瓶のようにばらばらに砕け、落ちてしまった。つよく立ち昇る甘美な薫りに、身体中、熱くて、つよい、逆流を覚えるまま。

途方もない苦しみ、痛みと怖さに我を忘れ、それなればと、わたしは今までの罪の意識と、恋と情熱に悶え、泣いて、流れた血に染まったこの紅い衣を身にまとい、ただひたすらに「かえり」を待つことにしたというのに。そのおそれを知らぬ狂想にかられて、長い髪をふり乱して、とてつもない叫び声は声にならず、喉の奥底で詰まってしまうている。正面には、美しい聖女マグダラのマリアの影が両腕をひろげて、その色つばさ、強烈ないのちのほとばしりが、なにかも許してしまうのに対して、背後から迫ってくるのは、聖金曜日。恐るべき十字架。でもわたしにはもうなにも感じない、なにももう見えないの！

内部からどつと押しよせて来る、暗いまぐまのような衝動が、わたしをさらに盲目にしてしまつて、涙すら流れません。

夜も眠らせない。昼も目覚めるまま。このままどうぞ、わたしを早く逝かせて。

びたびたと走りよつて来る女兒は、その透き通つた瞳で問いかけるまま、表情が少しづつやわらいでゆき、突然笑い声が、2つの心を重ね合わせた。

罪てなに？

地獄てなに？

なぜ魂は堕ちてゆくのか？

無表情の神父がつぶやくのは、

「あなたは道を見失つた」

5人兄弟が美しく装つた日曜日の食卓に、一緒につくことは許されず、投げつけた肉片を犬とむさぼる。

「あなたの罪はあまりに暗く、大きくて、幼少期の苦しみは、いまだカミから許されていない。」

そう、この地上における道を見失うままに。でも、いつまで、どこまで、失えば良いのでしょうか？

無表情な黒衣の神父は、初めて目を見開いて、ここからの怒りに燃えながら、

「カミは罪人には同情せず、悔い改めの態度によつて許しを得られる。でもあなたには、すでに道がない。」

はたしてこの言葉は、わたしのものなのか、それとも、カミのものなのか。誰か、教えて。

気がつけば、静寂な光に満ちた祈りの室から意識は遠のいて、いつの間にか、ねずみ色に澱んで汚いセーヌ川に

面した、シラミだらけの藁の敷かれた部屋に閉じこめられてしまった。

長い髪の毛は、ばつさりと根元まで断ち切られて、部屋着は垢にまみれて替えられることなく、叫び声も涸れ果てて出ない。

ひとり、そしてひとり。

キリストの受難と十字架が、人間として生まれての罪をきざんだ体に、あちらこちらに血の染み出した傷に重なり合う。

ふたたび、無邪気なあの子が合わせ鏡のように駆けよってきて、そう、あの頃はなにもわずらい無く、けがれ無く、四足で這い回って笑えば笑え、泣きたい時には泣きたいのみ。

どうぞ、幼児のこころを忘れずに、夢を忘れずに。

「エヴァの娘」はこうして輝ける「聖母の娘」となってゆく。

その美しさ。

「愛よ、愛」

声なき声で歌いたい。

「主よ、あなたのお求めになるわたしのすべてをお与えます。あなたの愛のみで生かしてください！ 無意識から意識が醒めて、しずかなる祈りにまかせるまま。もう、わたしは抗うだけの力は尽きました。何の策ももはや無く、ただひたすらに、無邪気に、主の愛のみで好き放題にして！」

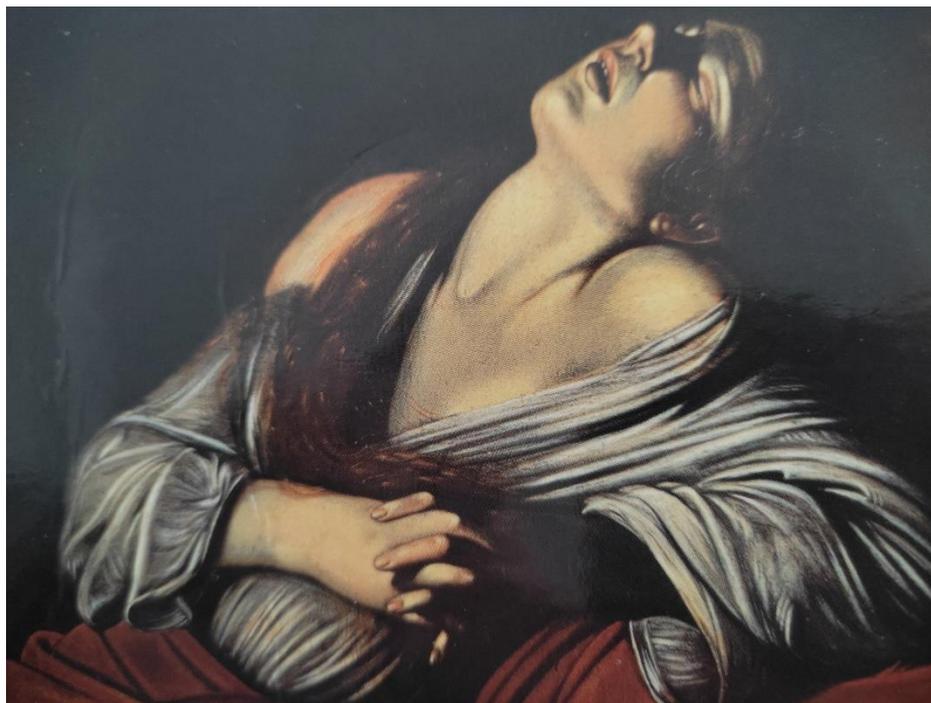
迷えば道は開き、たどりつけば道はまた閉ざされる。

「エガレ égaree」

信仰とともに。

アーメン！

完



おかしいな、ここは一体何処なんだ。今何処を走ってるんだ。さっき超えたのは芦屋川だった。だったはずなのに今はまた夙川に差し掛かっている。変だな。苦楽園？違うだろ。僕は苦楽園なんかに行きたかったはずじゃあなかった。御影に向かっていたはずだ。しゃくーん、しゃくーん、しゃくーん、ワイパーは左右に激しく動いてそれでも降ってくる雨粒にはとてもじゃないが追いついていけない。

すごい湿気だ。さすがはアジアだ。東アジアモンスーン気候、そんな地理用語を僕は思い出した。「東アジアモンスーン気候」僕は声に出してそう言ってみた。言ってはみたものの何も変わりはない。「イースト・エイジアン・モンスーン・クライメイト」、もう一度、今度は英語で言ってみた。

「どうしたのよ、ハジメ。あなた何を言っているの？」

助手席に座っていたジエラルディヌがそう聞いてきた。いや、ただの呪（まじな）いさ。湿気が和らぐはずなんだ。ほんの少しだけだけだね。効き目があまりはつきりしないただのおまじない。

しゃくーん、しゃくーん、しゃくーん、僕は道を探し求めながら車を走らせ続けた。ずっと昔から住んでる、自分の町だったはずなのに、どうして道に迷ったりするんだろう。日もすっかり暮れて暗くなってしまったからどっかで道を間違えてしまったのかもしれない。

ゆきゆきて 勝手知ったる町なれど われ泣きぬれて 道を通つ

今度はジエラルディヌは声を上げて笑った。またおまじない？日本には不思議な風習がたくさんあるのね。いや、違う、これは呪（まじな）いなんかじゃない。じゃあ、何なの？ まあ、そうだな。一種の文学でもある。

相変わらず何処を走ってるんだかよくわからなかったけれど、もう何処だつていいやつて気もしてきた。しゃくーん、しゃくーん、しゃくーん、さらに雨脚は強くなつてきて前もよく見えないほどだ。

我々の車が小さな坂道を乗り越えた途端いきなり強い光で前方から照らされた。危ないっ！僕は慌ててブレーキペダルを力の限りに踏みつけた。僕たちの目の前ほんの数センチのところを轟音を上げながら一台のトラックが過ぎていった。同時にバシヤッと激しい水音がして水しぶきが僕たちの車の胴体を打ちつけるのがわかった。ウーララ、危なかつたわね。ジェラルディヌは思わずフランス語でそう言った。ふうつ。僕は大きく息を吐きながらハンドルに埋めていた顔を持ち上げた。

「てやんでえ、こん畜生め。そのちっこい目ん玉こじ開けてよくみやがれてんだい。車つてのはだなあ、前向いて運転するもんなんだい」

それも文学なのね。いや、これは違う。これは文学なんかじゃない。こいつはまじないの一種。僕とジェラルドが一日でも長く元気で生き永らえられますようにってね。

少し間をおいて僕はまた車を発進させた。しばらく行くと見たことのある急角度の曲り角が見えてきた。ここだったかな。ウインカーを明滅させながら曲がり道に侵入してその道を折れてしばらく行ってみたらさつきよりは少し広い通りに出た。

僕は路肩の奥に適當なくぼみがあるとところを見つけるとそこに車を停めた。ヘッドライトも消した。雨はいつの間にか止んでいた。

ねえ、ハジメ、聞いて。うん、聞いているよ。あなたは大切な何かを探しに行かなきゃならない人なんだわ。うん、知ってるよ。わかつてる、そんなことぐらい。

ジェラルディヌの手の中にはいつの間にか丸い球があった。中学校の部活で使うバレーボールくらい大きささ

の、丸く膨らんだピンク色の球だった。

その上に、ジェラルディ又は薄い布のようなものを被せた。薄い青い布のようなものに僕には見えた。フランス人を父に、中国人を母に、パリに生まれそして芦屋で育った彼女は流暢なフランス語と英語、美しい中国語、そして少し危なっかしい日本語を操った。

でも本当は、何にも見えてなんかいやしないのよ。この薄っぺらい、世界だと思ひ込んでいるものの中で争ったり、妬んだり、憎んだり、愛し合ったりしているだけなんだわ。

それだけ言いたえるとジェラルディ又は僕の目を正面からまっすぐに見据えた。見据えると言った。でも、このままじゃ、私たちみんな死んじゃうのよ。

そいつあ大変だ。

そうよ、大変なのよ。私たちのこの世界が死んでしまうのよ。

だから、誰かが探してこなきゃならないの。こつちと、そう言つてジェラルディ又は右手で布を掴んだ。それからこつちを、そう言つて今度は左手で風船を持った。そして言った、つなぐの。

その二つがつながれば僕たちはまた生き直すことができるんだね。そうよ、そうなのよ。繋がったところからもう一度、生命が流れ込んでくるの。そうすれば私たちは生き直すことができるんだわ。

何処にあるのかしら。何処にあるんだい。ここよ、ここにあるのよ。ここなんだね。でも、ここにはないのよ。じゃあ、何処だい。そこよ、そこにあるわ。そこにあるんだね。いいえ、でも、そこにはないのよ。そう、そこにはないんだね。ええ、そうよ。そこにはないわ。あそこにあるのよ。そうか、あそこにあつたんだ。いいえ、違うわ、ハジメ、あそこにはないんだわ。

そんなものは何処にもない。ここにあつて、ここにはない。そこにあるけど、そこにはない。あそこにはあるけど、あそこにもない。

僕たちが探しているものは何処にもない、何処にもないけど何処にだつてある。

ジェラルディヌは僕の目をまっすぐに見つめた。まっすぐに見ると僕の胸を指差して言った。ここにあるわ。ここにあるのよ。僕に向けた指を僕の体にずっと近づけてきた。そのまま僕の胸を人差し指で貫くとシャツのボタンを一つ二つ外して手の平をシャツの下にもぐりこませた。ジェラルディヌはシャツの下で手を広げると僕の素肌の上に手を置いた。置いて言った。「ここにある」

気をつけて潜るのよ、とても危ない旅になるはずだから。誰でもが行けるところじゃないのよ。それから、それと見てわかるような姿なんかはしていかないからね。最初に見つけたときにはわからないものなのよ。そこにも気をつけてね。じゃあ、よく探すのよ。きつと見つかるはずだから。

それだけ言い残すとジェラルディヌはじゃあ私帰るからと言って車を降りていった。

おい、待て、ジェラルド、待つんだ。帰るって、何処へだ？フランスへか？

僕も車を降りると後ろから追いかけた。ここは空港じゃないんだぞ、それに、こんな夜中に飛行機なんか飛びやしないんだ。

僕の前を行くジェラルディヌの向こう側から眩しいヘッドライトが明るく照らした。僕は思わず額に手をかざして前を見た。その強烈な光の中で、一瞬の裡に、ジェラルディヌは昇華して消えた。

## ヘルダリン覚書(2)

江尻 潔

ヘルダリンの詩「自然と技術」(Natur und Kunst 1801 成立)は自然と人間の関係、神々と詩人の関りをヘルダリンが如何に考えたかを知るうえで重要である。本詩は「サトゥルヌスとユピテル」という副題がついている。サトゥルヌスはギリシア神話におけるクロノスにあたる。ユピテルはゼウスであり、クロノスの子である。巨人族であるクロノスはゼウスに倒され、至高の座から引き下ろされた。この詩は、自然としてのサトゥルヌスが技術の象徴であるユピテルに凌駕されることに対するヘルダリンの異議申し立てである。

原初の状態が秩序づけられる事がうたわれるが、詩人はサトゥルヌスの側に立ち、ユピテルを糾弾する。

その御座から降りるがいい！さもなくば、感謝することを恥じるな！

いまのままに留まりたいならば、老いたる神に仕えよ！

そして、あらゆる神々と人間にもまして

真つ先に、うた人が老神の名を呼ぶのを妨げるな！

詩人は最高神であるユピテルに向かって激しく叱責している。ユピテルの御稜威である雷はそもそも親神(サトゥルヌス)に由来している。にもかかわらず子神は恩恵を忘れ我がものとして行使し、その本源をないがしろにする。それは人間が自然の力を利用するだけ利用して、感謝しないのと同義である。そして詩人は「サトゥルヌスの平和からあらゆる威力が育ってきた」と賛美する。ここで筆者は、改めて詩人とは神をも諫める役目を担

う存在であることに感じ入る。

思えばユピテルは自然に対する人間の態度を先取りしている。自然の諸力を秩序によって制御し「道具」として扱う。これは人間界にそのまま言えることである。人間界は神界の転写なのである。神界の出来事が人間界に時を隔てて起こっている。だから詩人はユピテルに反省を促すのである。至高の神が己を省みれば人間も行いを改めるかもしれないという詩人の思いがある。

だが、注意すべきはこの詩の最終連で詩人はユピテルを「賢明な師」としてあがめていることだ。ここには人間もまた時の息子(クロニオン)であり、その淵源はユピテルであるというヘルダリンの思いがはたらいっている。人間は秩序と形式をその住処とする。秩序付けるのは言葉とそれによる思考である。言葉によりヒトは自然から一線を画し、「人間」となった。言葉は自然との距離を生みだす。このはたらきがユピテルにあるのだ。

この事実はヘルダリンを深く悩ませた。詩人は、混沌である自然を秩序付けその諸力を我がものとする人間の傲慢さに憤る。そして、自然の側に立ち人間の態度を糾弾する。しかしそれを表現するのは「言葉」なのである。

「言葉」こそ、先述した通り自然を把握し秩序づけ、ヒトを「人間」たらしめたものにほかならない。詩人は自然と人間の間で宙づりになる。

この難問をどう解消すればよいか。ひとつ言えることは、「言葉」が発生する以前、ヒトが人間となる以前にも「ことば」があったのではないか、ということだ(ここでは概念構築に終始する道具としての「言葉」と区別するため「ことば」と表記する)。サトゥルヌスをはじめ古層の根源神の時代における「ことば」である。現に太古の神々の名は伝わっており、詩人をはじめ私たちはその名を呼ぶことができる。ヒトがまだ人間としての意識がない時代の「ことば」、これらは野生を保っている。「ことば」自体が命の輝きをまとって。これこそ詩の「ことば」ではないだろうか。

ヘルダリンは、「ことば」を求めてやまなかった。それを引き起こす「言葉」がある。そのひとつが「エーテル」である。詩人は「父なるエーテル」に呼びかける。詩「エーテルに寄せる」(1797)では母の乳よりも、また神々よりも真っ先に詩人を養ったのはエーテルであったこと、エーテルの充溢により命に満ちた気体がほとばしり、生あるものは皆、植物も、エーテルを愛し求めて喜ばしく生い立つことがうたわれる。また「ゲルマニア」(1801)では、エーテルから落ちてくるものは純真な形象であり、それは、雨となつて降る神々の言葉であること、それを感じし森の奥深くが鳴り響いていることがうたわれている。筆者は「エーテル」とは「むすひ」のようなものだと想起する。森羅万象に命を付与する「はたらき」である。命に資する慈雨、これが「神々の言葉」として生きとし生けるものにはたらきかける。現象もまた「ことば」であり、それに促されて森の命が鳴り響く。ここに反響(エコー)としての「ことば」が出来する。それは、草木虫魚の「うた」なのだ。

人もまた、「ことば」を発する。それは命に根付いている。ヘルダリンの場合、「ことば」は「言葉」を介して顕れた。彼の詩を彩る、エーテルをはじめ抽象的だが、確固とした実感を伴う言葉がその役目を負う。「根源」「祖国」「故郷」「深淵」「しるし」、そうした言葉はそれが受け持つ意味を超えて、実感や予感として読む者に作用する。それは既存の言語の枠を壊していく。だから見ようによっては言語の崩壊として捉えられる。崩壊することによりその根底にある言葉ならぬ何ものかが顕れ出る。それは、ある種の畏ろしさをまとっている。なにか命そのものにじかに触れるような、危険極まりない印象を与える。命が無防備で晒されているのだ。なぜ、このようなことが起こりうるのか。それは、ヘルダリンの瞬間、瞬間の、内面の燃え広がり、いわば命の燃焼の媒体としての役割を「言葉」が引き受けているからだ。このとき「言葉」が「ことば」となる。

後期の讃歌に特に言えることだが、部分は極めて鮮やかに彩られていく一方で、全体は幽冥であり深遠さを増す。それは、一見全体性が放棄されているように見受けられるが、そうではない。より高次な総合を目指してい

るのである。その証に彼の詩は、思い出そうにも思い出せない記憶の想起や帰りたくとも帰りようのない郷愁に、読者を駆り立てる。私たちにこのような思いを抱かせるのは、ヘルダリンの「ことば」の、「言葉を紹介したことば」の、なせる技なのである。

# 『くりぐとむねじあ歌日記』抄

日守 麟伍(津城寛文)

「雰囲気の景観(アトモスケープ)」を詠むことで、外界の雰囲気(アトモスフェーレ)と内界の気分(シユテイムンク)が同調(アインシユテイムンク)することは、軟弱な叙景歌人である私にとっては、ささやかながら、至福の喜びである。また先祖や子孫、慕わしい人の思い出を追い、先行きを氣遣うことは、私事ながら、代えがたく心に沁みるものである。

自然の運行や世間の人事が、同じようなことの繰り返しのなかに、少しずつ差異を含むように、同じような歌の繰り返しが、寄せては返す波のように、そのたびに胸をときめかせる。

近刊の歌日記から、いくつか抄録して、『あごら』の埋め草としたい。

二〇一九年七月、所用があつて、先祖の暮らしたあたりを訪ね、会う機会の少ない親戚たちと会い、いろいろな話を聞いたり、かつての菩提寺を訪ねたりして、数日を過ごしました。

遠くで生まれ育った私には、あまり馴染みのない土地ながら、先祖が暮らしたと思うと、空気がほかのところと異なつた、まわりつくような感じがします。先祖、親類のいろいろな苦勞を、自らの苦勞と重ねて、偲びました。

先づ祖の 住まひしあたり なつかしき 畔ゆ見上ぐる 雨雲の空

(先祖にゆかりの土地を訪ねると、家並みや道が古い時代の空気を放ち、まだ青い田の畔道の上には、雨雲の空が広がっていました)

人の世に 悲しきことの めぐりくる 深き心の 増せとごとくに

(この世に生きる私たちは、何かのめぐりあわせで、避けようもない悲しみに出会います。まるで大いなる意志が、それによって心が深まるようにと、見守ってくださいているかのように)

二〇一九年八月一六日夕方、そばにいて手を握っていた父が息を引き取り、天寿をまつとうしました。翌二七日、通夜の前のひととき、エアコンで冷えた座敷に横たわった父の横に座って、締め切ったガラス越しのやや遠い蝉時雨が、強くなったり、弱くなったり、響きやんだりするのを、父と一緒に聴きました。

亡き人を 遠く訪なふ 蝉しぐれの 波の満ち干を とともに聴く夏

(夏を惜しむような蝉時雨が、締め切った座敷に遠くから聴こえ、強まったり弱まったり、ときおり止んだりするのを、亡くなった父の横に座って、一緒に聴きました)

二〇二〇年二月、いつも通る自然公園の細道で、片側に梅が群れ、反対側に白樺が一本だけ立っているところがあります。立ち止まると、かすかな香りが、ときおり動く風に、運ばれていきます。

白樺に 梅が香りを 吹き添へて かすかに揺らぐ 山道の風

(山道に一本だけ立っている白樺に、一人で向き合って立っていると、かすかな風が、群れ咲く梅の香りを吹き寄せてきます)

帰り道、夕日が梅の枝ごしにきらきらするのを、しばらくたちどまって見ていると、やがて雲に隠れていきました。

梅が枝に 透きてかがよふ 入りの日を よそめに目守る 雲隠るまで

(梅の枝ごしにきらきらする夕日が、やがて雲に隠れるのと、目線をそらして、しばらく見ていました)

二〇二〇年四月、感染症の流行で、外出する人が少なくなっている中、雨の日の公園は、いつもよりさらに人氣がありません。ポケットの中の鍵の束をまさぐりながら、昔の物悲しい歌を小さな声で口ずさんでいると、厚い鍵の音とは違う、薄い鈴の音が聞こえたような気がしました。

春籠り 人行き会はぬ 道の雨に 細く歌へば 鈴の音やせし

(人々が家に籠り、歩いていても行き会う人が少ない、春の雨の日、悲しみの歌を小声に歌いながら歩いていると、小さな鈴の音がしたような気がしました)

雨脚が強まる中、濡れた道の辺に、椿の赤い花が散り敷き、つやつやと華やいでいました。

降りまさる 雨に潤ふ 森の辺に 散り敷く花の 赤きつやめき

(雨脚が強まる中、道の辺に赤い椿が、つやつやと、華やかに散り敷いています)

数日後、二度寝して、あわただしい夢を見ました。旅館のようなどころで、大勢の人が雑魚寝をしている様子のあと、がらんとした大きな和室に、若いころの両親と、私たち子どもがいました。父は寝転んでいます。

亡き人の 形見の夢に なつかしき 海のざわめき 夏の思ひ出

(亡くなった父が、広い和室に寝転んでいる夢を見ました。なつかしい夏の思い出と重なり、海のざわめきが聞こえるようです)

老母の見舞いにいけない日々が、続いています。夢で会いにいったものか、母が会いにきたものか、母の暖かい手を握ったまま、ゆっくり目覚めてきました。手に残ったぬくもりが、切なく、嬉しく、いつまでも消えませ  
ん。

したはしき 人の手をとり あたたかき 夢より覚めて 名残の惜しき

(夢で会いにいった母の暖かい手を握ったまま、ゆっくり目覚めてきました。手に残ったぬくもりが、いつまでも消えませんが)

四月末、夕方から雨になり、とくに木立の深いあたりは、暗くなりました。遊歩道も、人にほとんど行き会いません。寒さと暗さで、あの人、この人にしたことが、つぎつぎに思い出され、心の中で謝りながら、雨の森を歩きました。

雨の森を わびつつ歩む さまざまの 人にせしこと 思ひ出でつつ

(雨の森で、あの人、この人にしたことが、つぎつぎに思い出され、心の中で謝りながら、歩きました)

暑さがいつまでも続いていた日々、暖かい雨のあと、うっそうとした並木の濃い陰に近づくと、この一度きりの瞬間に、急に別の人生の実感が迫ってきて、足が止まりました。つま先が、深い心の水際の、なめらかな揺ら

ぎに触れています。

陰や濃き 道過ぎがてに 沈みゆく 深き心の 水際のゆらぎ

(うっそうとした木の陰に近づくと、別の人生の実感が迫ってきて、足が止まりました。深い心の水際の、なめらかな揺らぎが、つま先に触れています)

初夏の一日、湿度がやや高くなりはじめた森を、歩きました。広い草原は、まだ草丈が低く、ところどころ、白い花が群咲いています。

柔らかき 草を踏みゆく 足元ゆ 心をなづる 音の粒立ち

(初夏の草原を歩いていくと、まだ丈の低い柔らかい草が、聞こえるか聞こえないくらいのも、泡立ちのような音を足元から立てています。)

秋の雨あがり、山道を、歩きました。枯葉がちらほら、風がふくと吹雪のように落ちて、険しい道に散り敷いています。時折、上り下りの人に行き会う中、すぐ後ろの、左側から、女性の小さな声が、短く聞こえたような気がして、振り向くと、確かに聞こえたのに、誰もいません。貴女だったらよかったのにと、こんなところにいるはずもない貴女を、思い出しました。

落ち葉敷く 道の後方ゆ ささやきの 聞こゆと覚ゆ 妹のあらなくに

(落ち葉が散り敷いた、狭く険しい山道で、短い女声のささやきが聞こえました。貴方がいたのだったら、どんなに嬉しかったことでしょうか)

いつも歩く並木道で、ときどき不思議な感覚を覚えることがあります。汀に足が触れたような気がしたり、大きな不可視の塊に行き当たったり、そのような思いが、間遠く訪れてきます。二〇二一年夏から二〇二二年春にかけて、そのような思いを断続的に味わいました。

この道は 奇しき思ひの 稀にいたる 異世(ことよ)の夢や 心に触るる

(この道歩いてくると、ときとして不思議な思いが、向こうからやってくることがあります。どこかの世界で見た夢が、今の心に触れるのでしょうか)

夏の濃密な大気の下を、並木に沿って歩くと、木々がつぎつぎと、舞台の幕が巻き取られるように、後ろに引かれていきます。繁った梢の重なるわずかな隙間から、まだ強い光が差し込み、地面の暗さを深めていました。

行く道を 後方(しりえ)に移る 夏木立ちの 繁り葉を透(す)く 光の暗き

(夏の並木道を歩いてゆくにつれて、木々が幕のように後ろに巻き取られていき、濃い葉陰から差し込む光が、行く先の地面を暗く照らしています)

夏の夜の道は、海の底のように黒々として、木々が柱のように揺らいでいます。そこを人影が動いています。

水底に 沈みて揺らぐ 夏木立ちの 連なる道を 人の行き交ふ

(海の底に沈んでいるような夏の夜道で、浮き揺らいでいる木々の間を、人影が流れていきます)

雨に濡れた紅葉の森が、夕映えの光を受けて一面に輝いています。あちこちで鳴き交わす鳥の声と、雨のようにしたたり落ちる雫が融けあって、大気を満たしています。

入りの日の 雨にしたたる もみぢ葉に 鳥鳴きさわく 音のきらめき

(雨に濡れた紅葉の森が、夕日を受けて輝き、鳥の声と雫のしたたりに満たされています)

柔らかな夕風の中を、鐘の音を聞きながら歩いていると、散り遅れた枯葉が、静かに落ちてきました。

吹く風に 散りかかりくる おくれ葉の 夕べの鐘を 弔ひと聞く

(散りおくれた葉が、夕べの風に吹かれて落ちてきます。ちょうど鐘が鳴っていて、枯葉を弔うかのようにでした)

寒さが増すころ、木立が時雨に濡れて、葉を打つ音に包まれています。

行く道の 時雨にかすむ 冬木立ちの 枝に膨らむ 淡き水音

(時雨に霞む並木道を歩いていくと、葉々を打つ静かな雨音が、樹を柔らかく包んでいます)

物思いにふけりながら、いつもの道を歩いてきて、道が終わろうとするところで、今日覚めたような気分がして、空を見上げました。

思ひつつ 歩みきたりて この道に 目覚めしごとく 薄青き空

(物思いをしながら、いつもの道が終わろうとするところまで歩いてきて、ふと我に振り返り空を見上げると、まだ薄青く寒々とした空が、枯れ枝の向こうに広がっていました)

なぜこの道は不思議な物思いにつながるのだろうか、いつもの問いを考えながら歩きました。暖かくなってきた風に枝葉がそよぎ、夢の名残を弔うようです。

故知れず 夢路に通ふ この道を 弔ふごとき 葉々のささめき

(何故かはわかりませんが、この道は夢のような思いに通います。春めく風に枝葉がそよぎ、無数の人々の見果てぬ夢を弔うかのような優しい音をたてています)

二〇二三年、春めいてきた昼下がりに、いつもの道端に、腰よりも低い小さな桃の木が、蕾をつけているのに気づきました。細い幹に不釣り合いなほど、大ぶりの蕾は瑞々しく、大きな花を咲かせそうです。

胸元に 届かぬほどの 幼木の 桃のつぼみや 肌理つややかに

(胸元に届くか届かないほど小さな桃の木に、大ぶりの蕾がいくつか並んで瑞々しく、もうすぐ花開きそうです)

数日後、蕾が開き始めました

胸元に 届かぬほどの 幼木の 桃のつぼみや 綻びそむる

(胸元に届くか届かないほど小さな桃の木に、いくつか並んだ大ぶりの蕾が、綻びはじめました)

三月末、別れの季節、はなむけの宴のあと、帰宅するところに雨になり、心地よいほどの雨脚の中を歩きました。途中に並木道があり、若葉に覆われたトンネルのような空間に、雨音がこもっていました。薄日がさしてきました。

春の雨に 濡るる嬉しき 水音に 包まるる道 薄日さす空

(春の雨に濡れながら、雨音のこもる道を歩きながら、帰宅する道に、薄日が差してきた空を見上げました)

寝覚めの夢に、育った島の砂浜の情景がみえました。うち寄せる波が繰り返しては、水泡が一瞬で消えてゆき、発砲音の名残がいつまでも耳に残ります。

懐かしき 夢の砂浜や うち寄せて 崩るる波の 音に溺るる

(夢で、ふるさとの砂浜にうち寄せる波の、崩れて泡立つ音に包まれて、そのまま溺れていきそうです)

いつもの道に出ると、車の通りが少なくて、遠くまで人気がありませんでした。この道の彼方に慕わしい人がいるのかと思い、空を見上げると、空も果てしなく晴れ広がっていました。

この道の 果てにやいます この空の 下にやいます 古への人

(この道の果てに、貴女はおられるのですか、この空の下のどこに、貴女はおられるのですか。今は会うこともない、慕わしく懐かしい人)

両親と三人兄弟の家族が一人、二人、三人と亡くなって、残されたのは姉と私だけになりました。姉と私の間には、もう一人、産まれてすぐ亡くなった次兄がいました。このごろ、その次兄を思うことがしばしばあり、両親も、子どもを死産で失い辛かったろうと、自ら親になって痛感します。

現し身に まみえしことは なき人の 影見まほしく 声聞かまほし

(この世では会ったことはない兄弟の、姿を見てみたい、声を聞いてみたいと、折にふれて思います)

『くりぶとむねじあ歌日記 卷之弐』(近刊予定) より

令和哀傷歌(仮題) (草稿)

勝又公仁彦

高野のコーヒー屋さんが跡形もなくなつて

今まで見えていなかった隣の町屋

町屋にしてはネイビーという妙な色の壁

そこに畳大、三六か五八か

いややはり京間かの

グレーとシルバーの混じり合うトタンの板は長方形

コンポジションの意図も意思もなさげなパッチワーク

露わに

ヤモリの如くランダムに貼りついて心もとない

早く隠してくれと懇願する。

東鞍馬口通の日産の横のコーヒー屋さん。

高野第三住宅に住んでいた頃、一度だけ入ったことがある。

なんという名前だったか？

看板にあったのは、ワールドコーヒーだったけど

それはお店の名前の下に書いてある

どこの豆を使っているのか

どこの系列なのか、を示す印であって  
お店の名前ではない。

下鴨や妙心寺からの通い道。

世界珈琲？

毎日のようにその前を通っていたのに

その店の名前を覚えていない。

自転車漕いで急いで

通るだけだったから知らなかったのか

そもそもその名を知らなかったのか。

朝方はよくタクシーが停まっています

モーニングを運ちゃんが頼んでいるのだろうと推察していた。

運ちゃんたち

モーニングを食べる場所はどこに変わったのだろうか。

店には運ちゃんがたくさん来ていたから

そこではもう運ちゃんとは呼ばれない。

誰にでも名前がある。

でもわたくしはその名前を知らないから

つい運ちゃんと言ってしまおう。

店でも名前を呼ばれるのは、

せいぜい順番を待っているときぐらいだ。

そこではそんなに並ぶことはない。

満席なら他へ行く。

それこそ北白川か元田中

運ちゃん／ドライバーさん

病院ではフルネーム、ハイソリッヒ。

満席なんてことはない。

誰かがつけた名前。

タクシーの中

助手席前のダッシュボードの上で

残酷に明かされる生年月日氏名。

僕はプレートを一瞥する。

あんまり見たら失礼だ。

意外と若いんだな、とか思ったりもする。

≡だったら名乗ってくれる。

何なら昔は帽子をとって

隼のように運転席から降りてきて  
両手で上着を着せるが如く

ドアを開けて待つてくれている。

でもその人の名前は覚えていない。

誰かがつけた名前、ズミライト。

黒髪に銀の筋が流れた今や

アプリで追跡、スマホで評価。

監視されつつタバコを吸う。

小さく畳んで新聞を読んでいたのは、運ちゃんだったのか

近所のおじさんだったのか

忘れてしまった。

忘れてしまったけれど、

カウンターの向こうにはまた別のおじさんがいて

それはその店のマスターなのだけど

名前も知らない。

その人がどんなふうだったかも全く覚えていないのに

チラシやら雑誌やら灰皿やらの

モノの積み上がったカウンターの向こうに見え隠れしていたのは

イサムノグチの白黒の肖像写真に似たような

あれは安斎さんの撮影か？

糊の効いた白いシャツの

思慮深い水鳥の眼の光を宿しながら

寡黙に何かに備えている

おじさんだったのではないかと思う。

そんなにピリツとして真鍮と

ガラスのサイフォンは清潔かつ

ドリツプの音と滴は厳かに蘇る五月の金色だとしても

雑誌や手紙や灰皿は

埃とともに積み上がってしまうのだ。

変色したエアコンの微風が紙々の端を顫わせる。

運ちゃんたち早朝の休息

四枚切りのトースト

名古屋だったら餡かもしれぬが

ここでは小分けのバターといちごジャム

僕にはピーナッツのそれがいいな

高野川のほとり

僕は眠る眠る。

春なら桜舞う。

バターナイフ。

集合住宅の30棟101

僕はあと一眠り

運ちゃんたちあとひと頑張り

京大生 YouTuber は 蓼倉橋の下

水中麻雀の準備

コーヒーはホット深煎り

向こうの紺の壁

グレーのトタン板は隠されていた。

あの子が死んでもう五年。

それなのに、新たな遺品が出てきて

それはこの前、僕も帰省の折に見ただけけれど

単なる白い布巾だと思っていたが

そこに赤や黄色の細い糸で刺し子がしてあって

ちようど八月十五日だったこともあって

僕は「千人針みたいだね」と言った。  
そしたら

それは、あの子が刺したものだから  
そんな汚いものを拭いてはいけないと  
母はわたくしを嗜めた。

### 富士山の麓

僕らが「川」と呼んでいる

昔は確かに土手があり

桑の実やアケビがたわわに稔り

夏はホテルが密やかに舞い

ハヤやサワガニが隠れ棲み

オオイヌノフグリの紺青の硝子

タガメと蛙の田んぼに水を運んでいた

緩やかな流れ

父はグラインダーで宝石を磨く趣味

幼馴染みのせいちゃんが

ぎぶぎぶと。パン一で入って行って

湯船に浸かるかのように背泳ぎをして

心底僕を驚かせた  
だって汚くないか？  
そんな川のほとり。

帰ってからの電話口

それやあの子が作っていた人形の型紙が出てきたと

何にもしてやれなかったと

母は今日も涙ぐんだ。

電話口で涙ぐむ母に

もう一人

姉にあたる妹は、

死んだ人は自ら死ぬことで先に行くことを決めて、

もう先に進んでいるのだから、

決して涙するものではないと

いつもの怒気を含んだ強い口調で言う。

どちらともともだと思っけれど、

僕は母が語ることをただ

聞いていようと思うので

何も言うことができない。

僕だって、毎日、  
ほぼ数時間に一度はあの子の不幸と気丈さを思つて泣くのだ。  
それを彼らに伝えたことはない。

街は変わっていく。

今日も妙心寺の西の川の袂、

あの子の死の報を受け取つた家の斜向かい

「かしわ鳥清」の看板のかかる家

一条通に面したガラスケースがそっくり取り去られ

バックリと口を開けたファサードに、

僕も野良猫も吸い寄せられてしまうのだけれど

その奥に広がる闇が

入り口からバス通りから観光客の歩くすぐのところなのに

そこに広がる闇が

なんとも親しみのもてるものなので

自分もまたその人たちの仲間なのだ

大きな安心の円グラフに切れ込む

一抹の不安を同時に感じつつも、

もう既になくなりかけている

この建物の姿

それは遺影と言えるのか？

築五十年疲弊した外観を画像に留めようと

これもまた無情で無礼なことなのか？

雨雲レーダーの尊の御宣託

みこと

「あと1時間で雨が降ります」に後押しされて

晩酌後の21時15分

正直言うともんどくさい

中国製の三脚を立て、

でもやりだすとマメだから複数の画角

川が映り、街灯が水面に反射し、

衣笠山、大内山陵、龍安寺、

等持院、住吉大伴神社の森

原谷の灯が北の空に飛んでいるのも映るように

元「かしわ鳥清」に向かってカメラを据えるのだ。

西の川のほとり

僕らは眠る眠る。

訪問看護。当番の日、抱き合った夜も

利用者さんの電話は三時

「おはようございます」

彼女は真っ暗な夜道へ出ていく。

人感センサー

自転車置き場のライトが点灯

僕は、ダカにGPAP

一人だと気温が落ちていく。

二児の母

僕らは一階

子供たちは三階

この母は夜道を一人走る

独りで育てると決めた

電動機付き自転車

白梅町、寺ノ内、千本鞍馬口、鷹峯、原谷

西の川のほとり

百鬼夜行の一条通

僕はひとり眠る眠る。

連中は歩く歩く歩き消える

帰ってくるのは5時30分

お弁当を作る時間まですこし眠る。

祝われた誕生日の翌日

いつもの「M」は返って来なかった。

毒をおおって

実際には洗剤だったけど

お風呂場に倒れていたと

聞いた夜にいたのはこの家だったか。

幽霊でもいいと

わたくしも思っただけけども

現れはしなかった。

富士山の麓、庭の枝垂れ桜はいつもより遥かに紅く

東山湖の桜並木も青空に映えて

位牌はピンクの石造り

ヘンリームーアの彫刻のような

ストーンサークルの一部のような

軟体動物の身体のような。

六月には庭に面した網戸に

今となつては珍しくも螢が現れ

それを見つけた母は

「まさよ、まさよ」と呼んだという。

蝶が飛んではその名を呼び

あのような身体に産んでしまったと、

ぜったい守ると言ったのに

嫁がせた彼が死なせてしまったと

集中治療室の一週間

付き添わせてくれと言ったのに

一人しかだめと言われたから

ただただ祈つて過ごしていたけれど

百二十九キロメートルのその先に

横たわる娘の傍に

なぜ無理にでも行かなかったのかと

全ては謎のまま

カルテの請求も叶わず

調書も開示されず

霧の中

闇の中

影は蠢き続ける。

その時期、わたくしの周りでは

集中治療室の大祭典

まずは妹、次伊藤先生

さらには体育会アメフトで

ゴルフ三昧屈強なはずの中島さん。

一番若い妹は去り

中島さん生還すれど起きられず

口ぐせ「死にたい」の伊藤先生は回復されて

回復はもちろんめでたいことではあるが

どうせなら

全員快復が良かったなど

逆順の宿命

わたくしの祈りなど無力。

無力なれども一族の祈りの業は我が身にも宿り

それを拒否した妹たちの巫病。

受け入れ、はたらかなくてはならないと

告げられなかったことも

悔いの一つとして挙げられて

そんな前近代的なことを言われてもと

古代から生きていない人たちは

冷笑の笑みを浮かべ

科学的エビデンス、実証的再現性

矛盾なき論理性と知的整合性に言語能力

青龍刀、重力を味方に斬り

混濁する身体の澱と竜巻と渦潮とを忘れているのか。

盆踊り、キリコ祭り、だんじりにエイサー、ねぶた、イヨマンテ

よさこいに祇園祭、大津祭、月次祭、マンカイにアラセツ

子供たちは霧に消えて

今や神輿は軽トラに担がれる。

今まで生まれてきた人たちの

そのほとんどはもう既に死んでいるのだから

マジョリティは死の方なのだ

別に人間でなくてもいい

別の世ではなく

この世のほとんどは死者なのだ

その眼差しと見えない手

慈しみとおはたらきをを

どの言葉でも感じればよい。

感じなくてもあるものはあつてあるもの。

震えるのだ。

警蹕が響く。 2024年12月1日 以後加筆修正予定

## 水面は…… 鎌田東二

水面は時を外れて落ちた。栗の未来紋の飛沫を受けて。道の向こうに巫女がいる。手旗信号で「来るな」と言っている。神父は槍を持って走っている。浮雲の下編み笠の雲水が流れている。行雲流水。すべては水のように。風のように。だからこそ火は嫉妬してやまぬ。地は羨ましくしてしようがない。世界は気楽に充ちているというこの真実が。世界は悲惨と惨酷と喜悦に溢れているという意外に。ものの見事にうっちゃられた。そこはかどなく。いづのみたまよ。とめどなく。水面を襲う渡り鳥の群れ。突っ込んでくる。どこに獲物があるのかを知っている。どこに翼を休める島があるかも。摂理至極。理という見事な仕組みに息を呑む。さらば箱舟。こんちくしうは魂蓄生に変身する。それによって水面は悉皆得度した。

### 未来記 1

すごろ苦が残したあくびを拾ってみると

太平洋の大入道が首を出した

斬ってくれ！

断ち切ってくれ！

齡千年

見果てぬ夢と成り果てた残骸

千年王国都市国家

葉脈の隙間をなめくじが這っている

惧れを知らぬ無垢

やまいたちは逃走した

菩提寺の墓石を掘りつくして銀河鉄道に乗ったさんぴん茶

ゆるゆるとパイプをくゆらせて世界史をひもといた

文明がいかに滅亡したか 詳細に綴られていた

ヒストリーというヒステリーにも似たストーリー

靈験あらたかな南無十方人未來債

漬物と債権が同等交換の市場に出回る

東銀座は黄昏た

西銀座も南銀座もすでに消滅

北銀座はエベレストのような空中都市となってラピュタ化した

途方もない

途轍もない

共行きの道

人通りが不意に恋しくて

涙した

合掌

## 未来記 2

トキをしる

いまはむかし

うずをまいてのみこまれた

微分化された粒子たち

よびごえにこたえてはしつた

東奔西走

おおーっ

うーっ

たあ〜っ

空面も水面も地面もなく

あらゆるおもてもうらもなく

そこもなくふたもない

あらゆるふきぬけの

つつぬけの

とおりにぬけの

マヌケ

真抜け敷島

そのしきしまのやまどごころをひととはば

全神経を凝集して応えよう

やまとはくにのまほろば

やまとごころはひとのまほろば

やまとだましいはかみのまほろば

人知れず泣く

神知らず無く

友知れず亡く

耳なし芳一に語る

公認されない 共有されない 理解を超える悲哀を

さればとーれ

さらばぽーれ

さすれとーぼ

の

イーハトーヴ

通せてくれ 呉羽よ

見せてくれ そのうつくしい入れ歯を

銀河みたいな入歯を

いや それこそが まさしく 銀河 銀歯 銀波

よいやさあー

よい子よ

ははもちちも いない

いないが

ははちちなしに そだつ

ははちちなしに うまれる

ははちちなしに いきる

されど いのちよ

おおはは は いる

おおはは は ある

おおははは おわす

いのちの底無しのそこなしのむこうに

いのちの蓋閉めをする　ふくろ詰めをする　そのさぎに

あえて　嗣ぐ

つぐべき　ときを

時々刻々の全相続を

財産は皆無でも採算は無限大

よし

よち

よか〜!

### 未来記3

よしずみの

ひいきのひきわたしの北の海

たばしり走って走行不能

路が切れたから  
道が裂けたから  
未知が溶けたから

いうまでもなく 言語不通

通信途絶

あれほどテレパシーを磨けと言っておいたのに  
怠るな 日常生活を  
その修業の日々を

回路の途絶えを海路がつなぐ  
陸がなければ海がある  
脳が死んだら腹がある  
山が沈めば海が跳ぶ

よしずみよ

汝が知る以上に世界は流動的でダイナミックなのだ

信じていいのだ 生まれ変わりを  
信じていいのだ よみがえりを  
信じていいのだ いづのみたまを

光り輝く泡立ちの峰

手元に残した真珠貝

旅立ちの朝 靴下を脱いで 土を踏みしめた  
愛しの君よ

#### 未来記 4

イカ釣り船に乗って神輿を担いだ

ムラは消えない

ソラは儂い

ハラは空かない

ハンモックに蟻がたかる

不在の主人の昼寝王国

涙ながらのナラティブをカナブンの親分と聴いた

いけず

と言ったあなたにももうす

生け簀もイケズも好かぬ

いのちの生捕りはよくないよ

南無三宝

この星に願いをかけるために堕ちた  
なむあてずっぼう

未来記 5

五目寿司は見事だ

アンドロメダ星雲もかくやおもうほど

出し惜しみして腐らせた愛のコリーダ

帰ってこない

還ってこないよ

ひと夏の恋も

ふた夏の金柑も

少年は閉じた

終末を

三島由紀夫みたい

にハラキリこそしないが

ヤスナガとともに

幕を下ろした

蔑むものよ

汝は知らむ

光明菩薩を

日光菩薩も月光菩薩も

ボサツはオサツとちやうねん

シンソツのように初々しいねん

いのちみなぎる

元氣玉

時の蘆舟に乗せて遣る

ひのもとのはてのはてから愛をこめて

通りすがりの……

通りすがりの微分方程式にご挨拶。畏しや。光辻を渡ったところに亀裂が走って次から次へと人民を呑み込んで  
いる。愁いを漂わせる暇もないほどの高速で。5Gもクソもない。味噌も糞も一緒に攪拌してこの千年世紀の饗

宴は続く。後ろ髪を引かれるまでに。表向き減税の受けのよい下剋上政策を掲げて。正念場を離れられない藝者の祖母は遺言した。「ゲイは身を助ける」と。だがねばあちゃん。迎が来てもおれは逝かん。翔んで往く先があるから。無礙異には死なんよ。生まれ生まれ生まれ生まれ生に始めに暗く死に死に死んで死の終りに冥し。生死輪廻。ねじ込んで潰れた館蜜。密儀を取り仕切る司祭の翌朝。屍体は晴れ晴れと宙を舞った。さらば季節よ。うるわしの四姉妹よ。ありがとう。

## 詩作するのは誰か

深澤 英隆

詩作する主体・エージェントについては、さまざまに語られてきた。極限化すれば、一方には現に詩作する意識主体、しかも一切の他性・多性をうちに含まない自己同一的主体が想定できる。他方では、詩作する身体が本来もつものとはまったく別のエージェントが詩作を余さず担うという理念型も成り立つ。まず前者については、詩作以前に、意識主体のあり方一般がそもそもそうした自己同一性ではありえないということが今では常識となつているだろう。後者については、完全な解離状態における自動書記ということはもちろんありうるが、その際詩作の担い手は、いかなる意味で、どこまでエージェントと呼ばれるのかが問われざるをえない。

実際のところ、詩作の当事者も第三者も、こうした両極のさまざまな場所に詩作の主体を位置づけてきた。またときには同じ詩作者がこのスケール上を移動してゆくこともあるだろう。常識的には、固有名を作者にもつ詩については、どのような条件で詩作がなされ、どのような介入があったにせよ、作者として記された名の主体性は担保される。一方固有名ある作者の作品という観念以前の詩作は、民族や民衆などの集合体が言語化の背後に想定されることになる。そしてこの両極性に重ね合わされたときもつとも強い緊張をもたらすが、対峙し、あるいは協同しあう、人間と神霊というふたつのエージェントという観念である。

\*

古代の託宣や、あるいは神霊による靈感付与の観念は、爾来詩作プロセスの一方の原イメージとなって、くり

かえし召喚がなされてきた。しばしば修辭的定型句ともなり、紋切り型にも墮してしまいうこうした図式の膨大な歴史的堆積のなかにも、しかしときにはなまなましい証言が見出される。谷川健一の『神に追われて 沖繩の憑依民俗学』は、過酷極まりない神靈の試練に翻弄されつつ成巫する女性の証言を聞き語りしたドキュメントだが、そこには次のような記述が見出される。

カナはパウ崎でしばらく海を見つめていた。小さな時の思い出がよみがえってくる。カナは小学生の頃、パウ岬にひとり出かけて行って、詩を書くのが好きだった。詩を書いていると、波の音が人の声になった。あゝる時は女の人が波の音にのって話をする。ある時は男の声が風の音にまじって聞える。／女の気持ちで詩を書いていると女文字になり、男になって書くとき男の字になったりする。女らしい文章が何行かつづくと、そのあと男の文章になることがある。カナは自分が書いているのではなく、何者かがカナに書かせているのを感じた。その時カナは自分がふつうの人間でないことをなんとなく知った。(四三・四四頁)

しかし成巫過程はまことに苛烈だ。神靈はインスピレーションを与えてくれるというよりも、主体に挑みかかり、生活破綻にまで追い込み、事象空間までも歪めて屈服を迫る。その過程は確かに主体の変容をもたらすが、それはもはや詩作の主体云々という限定的な問題とはかけ離れた事柄となる。

\*

恋人のズゼツテ・ゴンタルト宛、一七九九年六月ごろの書簡に、ヘルダーリンは次のように記す。

日毎私は、消え去った神性を呼び返さずにはいられません。偉大な時代の偉大な人々が、聖火となってあたりに燃えひろがり、この世のあらゆる死せるもの、無気力なもの、藁を焰と化して、それらをもろとも引き従え、天井へのぼっていったさまを思い描いて、それから、私自身がしばしばくすぶる小さいランプのような有様でうろつきまわり、夜の闇をとおしてなおしばらく輝くために、一滴の油でも施してもらいたがっているのを考えますと——みてください。えたいの知れぬ戦慄が全身を走ります。私は低く自分によびかかれます。おそるべき言葉で。「生ける屍よ！」（志波一富訳、『ヘルダーリン全集』第四卷、三七四頁）。

個人を凌駕するものからのインスピレーションや働きかけという観念は、一八世紀末以降の近代詩の形式的・内容的充実の時代においても消失はしない。むしろ傑出した作者は傑出した媒介者（メーデイウム）でもあることは、ロマン主義的な天才的著作家概念と切り離せない。それでも、この書簡の書かれた年に出たシュライアマハーの『宗教について』が証言するように、客体的神霊の観念は退去を余儀なくされつつあった。それを補ったのは、シュライアマハーのような宗教の心理主義化や、また近世にまで至る靈魂論を引き継ぎ、客観的で多層的な無意識の概念を形成する動向であり（本誌前号のカールスの訳稿を参照）、詩作もこの後者の立場からは意識主体の奥底に広がる自律的無意識と関係づけられることとなった。ゴントルト家を出て一年、苦しい生活のなかでヘルダーリンは、なお意識的主体性を堅持しながらも、神霊の助力を求め、卑小な自己イメージに喘いでいる。

\*

それにしてもいよいよ、神なしで、神に代わって詩作をしなければならぬ時代が来た。ベルギーで行われた盟友ヴィリエ・ド・リラダンの追悼講演（一八九〇年）を、ステファヌ・マラルメは以下のことばで始める。

夢を見るのに慣れたひとりの人間が、今は亡きもうひとりの仲間の話をするために、ここへやってまいりました。（…）書くということは、そもそもいかなる業なのでしょうか？ 昔ながらの、きわめて漠とした、しかしひたむきに続けられる行為であり、その真義は人の心の神秘に宿っているのです。したがってこれを遂行する者は、徹頭徹尾、自己を守り抜かねばなりません。／風説によると、いまやこの世に確として存在するものは何もなく、ただ自己だけが、散佚した神性の余映をうけているといえます。この風説が正しい限り、書くというこの向こうみずな冒険は、ある懷疑の働きによって—インクの黒い滴は至高の闇に通ずるものです—おぼろな記憶を頼りに一切を再創造してゆく義務を、幾分かなりと僭取することにほかなりません。（マラルメ『ヴィリエ・ド・リラダン』、岩田駿一訳、一三二—一四頁）

もちろん自覚的詩作行為の極限とも言われるマラルメの営みをここで論じることなどは、到底できない。とはいえ、この極めて印象的な講演の出だしは、いくつかのことを示唆している。マラルメはまず、神性が退去した無の時空に自己がいることを確認する。そこでは、書くという「ひたむきな」行為にむけて、自己は「徹頭徹尾」「守り抜かれ」ねばならないという。ここにはマラルメの意識的詩作への要請が垣間みえる。その一方で、自己は「散佚した神性の余波」（*reflet de la divinité éparse*）を身に帯び、神に代わって創世としての詩作を手探りで進めてゆくのだとも言われる。しかし意識的詩作というのはどこまで可能なのか。手探りの一瞬一瞬は、やはり見通し難い暗闇に直面する作業ではないのか。まさに「インクの黒い滴は至高の闇に通ずる」のではないか。ま

たマラルメの詩作との関わりで繰り返し論じられてきた「偶然」という問題も、この点に関わってくることになるだろう。

\*

詩作の主体をめぐるこのような歴史的経緯を見るとき、アンドレ・ブルトンのシュルレアリスムの詩作構想は、そのさまざまな矛盾も含めて、やはり決定的な転回点だったのだとも思えてくる（以下引用は、ブルトン『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』巖谷國士訳、岩波文庫）。

#### シュルレアリスム魔術の秘訣／シュルレアリスム作文、または下書きにして仕上げ

できるだけ精神の自己集中に適した場所におちついてから、なにか書くものをもつてこさせたまえ。出来るだけ受け身の、つまり受容力のある状態に身をおきたまえ。あなたの天分、あなたの才能、またあらゆる他人のそういったものを無視したまえ。文学とは、どこへ行きつくかもわからないひどくみじめな道のひとつであるということをしつかり自分にいいきかせたまえ。（五八頁）

そんなわけで、イメージの二つの項は、閃光の発生をめざす精神によって一方から他方が演繹されるのではなく、私がシュルレアリスムのとよぶ活動から同時に生まれれるものであって、理性はその発光現象をあとから確認し評価するにとどまるのだ、ということを確認しないわけにはいかない。／それに、閃光が稀薄気体を通じて発生したときにはその長さが増すのとおなじように、私が万人の手のとどくところにおきたいと

のぞんできた機械的記述によってつくりだされるシュルレアリスムの大気は、とくに、もっとも美しい部類のイメージの産出に適したもののなのだ。それどころか、このめくるめくような競争の過程では、それらイメージだけが精神の道標としてあらわれる、といってもよいほどである。精神はこのようなイメージの至高の現実性をすこしずつ得心する（六七頁）。

いまでは『宣言』成立に至るまでのいろいろな伝記的事実が分かっている。若いブルトンは象徴主義的詩作を発表しながら、精神科医見習いをしていた。ランボオの『イリュミナシオン』を愛読していたが、友人宛書簡からブルトンがランボオの狂気に深い怖れを抱いていたことが分かる。すでに十代のランボオは「見者の手紙」で決然と、自己の内なる他者にみずからを明け渡してこそ真の詩作が可能となることを説いていた。そうした自己放棄を前にしたためらいの一方で、ブルトンは当時すでにピエール・ジャネの浩瀚な『心的自動症』(L. Automatismes psychologique, 1889)を熟読していたとされる。ジャネはさまざまな解離的自動現象や霊媒的解離に憑依などを（カールスなどとは異なり）、もはやもっぱら病理的事象として扱っていた。その事象とテクストや画像などの患者の生産物に魅せられたことが、フィリップ・スーポーらとの詩的実験につながり、シュルレアリスム宣言のオートマティズムの要請につながった。その実験を「どこへ行きつくかもわからないひどくみじめな道」と言いながらも、ブルトンは第二の引用にあるようにそこに美が閃くことを強調している。

マラルメ的な「意識道」の放棄、のみならず全面的自己放棄。しかしそれはあくまで実験的放棄にとどまるべきであることを、ブルトンは生涯強調した。ブルトンがつねにアポロンの存在に映るのも、このデュオニソスのプロセスに制限を加え、美の成果を回収する態度によるものかもしれない。ただしブルトンの言う美は、「瘵癩的美」であって、人間が「美的感覚」によって生み出したり、自然がおのずと具えるような美ではない。それは偶

然性や無意識の作用から生まれた事物のデベイズマンが現出させる意想外の衝撃にほかならない。シュレアリズムにおいては、様式的にも、一種の象徴主義が再出現した。しかしそこに見られる表徴は、あくまでデベイズマンによって吹寄せられたものであつて、そこに意味連関や實在論的連関があつてはならない。エソテリシズムも、シュレアリズムのモチーフとして浮上したが、「シュレアリズムの深遠、誠実なる秘教化」をブルトンが要求するとき、そこでは秘教の真理請求と實在論は消去されている。ルネ・ドーマルなど、エソテリシズムに實在論的にコミットする者は、グループから除名処分となる。これは、ブルトンの批判的マテリアリストとしての矜持かもしれない。またエソテリックな言説は、實在論に安住してしまふと、陳腐化が避けられないとも言える。ブルトンは、狂気やオカルト的なものに近接しながら、それが實在的作用へと転化する境域で、必ずやそこから身を引き離そうとする。その底には、若年期に抱いた怖れの感覚がなお息づいていたのかもしれない。そしてこの敏感な怖れの感覚こそが、ブルトンを新しい美の発見者にしたのかもしれない。

\*

遠い日本でも、デベイズマンの美の閃光は煌めいた。一九三〇年代当時佐川ちかと並び称されながら、その後消息を絶ち、長く忘却されたままだった山中富美子の詩集が三〇〇部限定ながら出版されたのは、二〇〇九年になつたことだった。

左右の端麗な決定と悲哀とにかかはらず、  
かたはらまでおとづれた夜半は最早、豫言を  
生命としない。 おおこの室内、

すでに意味の無い輝き、沈んだガラスの神話、  
或ひは冷酷な無言が、死の床に時計の夢を、  
又はかたはな物語を傳へた。

深夜のすぐれた思想、まざまざしい姿態、紫の大理石  
無垢の告白、それらは妖氣と神託を守つてつきること  
を知らない。

はなやかに重く、かちえた眞實をひらめかす花達に永  
遠の潔白を名のらせよ。

蠟燭と両手で不思議な信仰をさぐりあてる魂も  
微笑と香氣をともなつて洗禮の闇の寢床に、  
やはらかな黒眼をもつであらう。

だが怖るべき青銅の夢の眼に見えぬ仕業は、  
昔の平和と不幸な天稟とを手にしたことであつた。

愛情を強ひられる花達の純白な氣温と、荒々しい不滅  
のささやきに、おかしがたい希望、

絶えざる豫感と太陽の冷艶さを夢みながら。

地上に又とない夜の、稀な神秘の枕元で。

(『山中富美子詩集抄』森開社、二〇〇九年、三四頁。『詩と詩論』第一二号、一九三一年掲載の配字により、また同誌初出時の誤字を改めた)

一九一四年に生まれ、一九三〇年、一六歳で前衛詩壇にデビューした山中は、一九三七年には最後の作品を發表して、消息を絶った。もともと詩壇とは、小倉から東京に詩を送付する以外の直接的コンタクトはなく、一八歳時の和装の(ある書き手の形容に従えば)「鈴蘭のような」美少女の姿を捉えた二葉の写真と、女学生の時の大きな怪我により足が不自由となったという風聞以外ひととなりも分からず、活動していた当時も謎めいた存在だった。唯一詩人・編集者の乾直恵が文通をし、また一九四二年になって直接九州に赴き、求婚もしたが、体の不自由を理由に謝絶された。その後は、夭折したか、戦乱で命を落としたと考えられていた。

しかし近年になって、驚愕すべき事実が公になった。編集者の坂口博氏の執念の調査の結果、山中は筆を絶つたのち養父母と生活をとにし、養父母の死後は三十有余年を天涯孤独のまま暮らし、二〇〇五年六月に九一歳で、小倉にて老衰死したのだった(坂口博「幻のモダニズム詩人山中富美子」『西日本文化』第四四三号、二〇一〇年、三七・四三頁)。

山中の詩には、硬質なイメージのつらなり、というだけでなく、独特の意志的性格が感じられる。デペイズマンの結果だけが列挙されるシュルレアリスム詩で鑑賞にたえるものは多くは無いが、山中の詩は、そのイメージの秩序を前にした情動やイメージへの働きかけが同時に書き込まれているとも言える。刻一刻言葉と形象の生成を促し、書き留めていった山中。その詩作する若き山中富美子と、長く孤独に生きた山中富美子。詩作する山中

は消失していたのか。あるいはふたりは共存していたのか。詩作する山中富美子とは、いったい誰だったのだからか。

# 十字架のヨハネのあまり名高くない詩の私訳

鶴岡 賀雄

一．「何処とも知らぬ処に入りて(Entréme donde no supe)」<sup>1)</sup>

何処とも知らぬ処に入つて

なにもわからずにそこにいた

あらゆる知識を超えて昇つた

どこに入つていたのだったか わたしはなにもわからなかつた

けれどもそこでたしかに観た

どこにいたのかわからぬままに

ものすごいことをたしかに悟つた

感じたことは何も言うまい

なにもわからずいたのだから

エクスター

「写本には「高度に集中した観想による脱我のあとで作られたコプラ」とある。「コプラ copla」はスペイン語の詩形。冒頭のテーマ句を、続く詩連で展開していく。平易な八音節で、比較的単純な脚韻をとる。連の最終行（「あらゆる知識を超えて昇つて(toda ciencia trascendiendo)」）は同一のリフレイン。

あらゆる知識を超えて昇った

平安とそして信愛の

それは完全無欠の知

深くおおきな孤独のなかで

まっすぐな道が悟られた

それはまったく秘められた知

だからわたしはただ口ごもる

あらゆる知識を超えて昇って

すっかりわたしは酔っていた

吞まれて溶けて我を忘れて

感覚はぜんぶ奪われて

なにも感じていなかった

ただ精神は受けとっていた

理解しないでわかる理解を

あらゆる知識を超えて昇って

そこまでたしかに到った者は  
自分自身から消える

これまで知ったなにかもが  
とともつまらなく見えてくる

知識があまりに増しまさるので  
なにも知らないままにいる

あらゆる知識を超えて昇って

高く昇れば昇るほど

理解することは減っていく

これこそはあの闇の密雲

夜を照らして導いたもの<sup>2</sup>

この闇の雲を知る者は

ずっと知らざるままにとどまる

あらゆる知識を超えて昇って

知ることなしに知るこの知には

---

<sup>2</sup> 出エジプト記二三章二節、「雲の柱」「火の柱」参照

何より高いちからがあつて  
議論にたけた学者たちでも  
これにはけつして勝てはしない  
かれらの知力はとどかないのだ  
理解しないで理解する知に  
あらゆる知識を超えて昇つて

この最高の知が知るものは  
はるかに高く聳える極み  
どんな知力も学問も  
つかまえることのできまいものだ  
知ることなしに知る知によつて  
自分に勝ちえた者だけが  
どこまでも昇つていくだろう

聞きたい者は聞くがいい  
至高至上のこの知識とは  
神ご自身の本質をこそ  
高く昇つて感じるること

寛く大きなはからいのわざで  
理解せぬままいさせてくださる  
あらゆる知識を超えて昇って

二. 「わがいのちわがうちになく(Vivo sin vivir en mí)」<sup>3</sup>

わがいのちわがうちになく

いまはただこう願うばかり

死なないためにわたしは死にます

わたしのいのちは もうわたしにはない

<sup>3</sup> 写本にあるタイトルは「神を観たくて逢いたくてつらく苦しむ魂のコプラ」。冒頭のテーマ節は、当時の恋愛歌謡にもとづく。リフレイン「死なないためにわたしは死にます(que muero porque no muero)」は、各連で少し変わるが、訳に反映できていないところも多い。「死なないために」の「ために(porque)」は、理由にも目的にも解せる。アビラのテレジアも同じテーマ節でコプラを作っている。

でも 神さまなしには生きられません  
神さまなしならわたしもないから  
こないのちはなんだというの？  
わたしのまことのいのちを願って  
千度の死さえ死にましよう  
死なないためにわたしは死にます

わたしが生きてるこのいのち それは  
生きることを奪われたいのち  
だからずっと死につづけます  
あなたと生きる時がくるまで  
聞いてください、わたしの神さま、  
わたしが申すこのことを  
こないのちはもういりません  
死なないためにわたしは死にます

あなたがいないで生きているなら  
どんないのちがありえましようか  
ただ死をこうむるばかりです  
かつて知らざる最大の死を

わたしはわたしがかわいそう  
こんなさだめを堪え忍ぶなんて  
死なないためにわたしは死にます

水から飛び出た魚でも

楽になれないことはない

死の苦しみに堪えるなら

ついにはその死がむくわれる

わたしの哀れなこのいのちには

つりあう死なんてありえましようか

生きればそれだけ死ぬのですから

少しは楽になりたくて

ご聖体にあなたを見ても

つらい気持ちがかえって増します

あなたをじゅうぶん楽しめないから

なにをしてみても苦しみが増す

願うしかたであなたに会えない だから

死なないためにわたしは死にます

会える望みをかきたてて

楽しい気持ちになつてはみても 主よ

あなたを失うかもしれない との

思いでつらさが倍になる

こんなおそれのなかで生きて

望みがかなう望みを抱いて

死なないために死ぬほどなのです

こんな死から連れ出してください

わが神よ、どうか いのちをください

繋がれたままにしておかないで

こんなにきつい縄で縛つて

ただただあなたに逢いたくて 苦しむわたしを見てほしい

わたしの全部がこんなに不幸 だから

死なないためにわたしは死にます

わが死をずっと泣きつづけ

わたしのいのちを嘆きます

わたしの罪のかずかずで  
囚われの身にあるかぎり  
ああ神さま！ いつなのですか  
いつになったらほんとうに こう言えるようになるのですか？  
死なないためにわたしは生きると

三. 「愛の獲物を追いかけて(Tras de un amoroso lance)」<sup>4</sup>

愛の獲物を追いかけて  
けつして望みをなすことなく  
高く高くわたしは飛んだ  
ついに獲物を捕らえてみせた

掴まえようとするものは

---

<sup>4</sup> 写本の題辞はただ「a lo divino」とのみ。「宗教的のテーマへの歌い替え」といった意味。鷹狩のイメージで、恋人を追いかける男の気持ちや歌う、当時の恋愛歌謡を変奏している。

あの獲物 神の獲物

だからとても高く飛んだ

なにも見えなくなるほど高く

こんなに超えて昇ったのに

飛びかたはまだ足りないままで

でも愛はとも高く昇って

ついに獲物を捕らえてみせた

高く昇れば昇るほど

眩い光で視界が満ちる

でも最も強い征服は

暗闇のなかでなされるものだ

獲物は愛で獲られるのだから

目を閉じて闇のなかへと跳んだ

あんなに高く高かったから

ついに獲物を捕らえてみせた

高みに到れば到るほど

獲物は高く上っていく

それだけ低くうち戻されて  
わたしは地面に落ちていた  
わたしは言った とどく者などいるものか！

こうして低く低く落ちた  
あんなに高く高かったから  
ついに獲物を捕らえてみせた

とても不思議なことだけれども

一度の飛翔で千度も飛んだ

天上のことの希望なら

望むぶんだけつかまえられる

この獲物だけわたしは望もう

望み足りないことなどなかった

あんなに高く高かったから

ついに獲物を捕らえてみせた

#### 四・「牧童の歌(Un pastorico)」<sup>5</sup>

羊飼いの若者がひとり悲しんでおりました

喜びからも嬉しさからも遠くはなれておりました

あの羊飼いの娘のうえに想いはひたすら向いていました

愛ゆえに胸が とても痛むのでした

愛の傷が痛いから泣いているではありません

あんなに邪険にされたからつらいわけでもありません

たしかに心は傷ついていたのですが

ただ忘れられているとの思いから若者は泣いているのです

うるわしいあの娘から忘れられているとの思い

ただこれだけがなによりつらくて

遠くの国でさまよってひどい仕打ちもうけました

---

<sup>5</sup> 写本の題辞は、「キリストと魂についての *alo divino* (宗教への替え歌)」。一行十一音節。当時の民衆の恋歌を、言葉を少し替えて、十字架上のキリストの姿を歌うものに仕立てている。付した図版は十字架のヨハネ自筆の磔刑図。

愛ゆえに胸が とても痛むのでした

若者は言いました ああ 不幸なさだめ！

ぼくの恋人は いなくなってしまうた

ぼくといっしょにいることを 楽しもうとはしてくれない！

愛ゆえに胸が とても痛むのでした

長い時間がたちまして 若者はとうとう登っていききました

一本の木の上に そこできれいな両腕を広げて

はりつけられて 死んでいました

愛ゆえに胸が とても痛むのでした



前号に書いたように、十字架のヨハネは詩人神秘家とされてよい人だった。しかし神秘家詩人とは言えない。「詩を書くこと」自体をかれは目的にしてはいない。だから作品も多くない。真作として伝わっているものは、数え方にもよるが十数編に過ぎない。そのうち、「暗夜」「霊の讃歌」「愛の生ける炎」と通称されている作品（かれの詩にはいわゆるタイトルは無く、作品名はみな通称）は洗練度が高く、著者自身によって「解説」されて、彼の神秘思想の主著群を生んだ。文芸学的研究も多くなされている。かれの神秘思想は、まずこれらの詩として言語化されたのである。前号には、この三作と、これに次ぐ「文学的」評価を得ている「夜なれど」の私訳を載せてもらった。

本号では、これらに比べて、注目され研究されることも少ない作品を私訳してみた。前記の主要作品が、字義上は宗教的語彙がまったく出ない恋愛詩の姿をとり、したがって宗教詩として読むためには「宗教的」解説が必要なのをたいして、今回載せた四編は、字義上も「宗教的」意味が見やすくなっている。その一方、詩的喚起力がこもったイメージは少なく、韻律も平易である。「コプラ」と呼ばれる形式の作品は、冒頭に置かれた「テーマ節」自体の言葉が謎めいていて、これを詩の本体が「宗教的に」説明するものとなっている。技法上は、スペイン語の語法を活用して言葉を少しずつ変えながら意味を展開していくところが多い。これは十字架のヨハネが好むところで、そこにこれらの作品の面白味があるのだが、日本語に移すのは難しく、おおまかに意識するようにした。

なお、十字架のヨハネには、同じコプラ形式の詩があと二つある。「支えなしに支えられ (sin arimo y con arimo)」と、「どんな美にも (por toda la hermesura)」で始まるもので、写本状況から真作とされているが、彼の

思想の鍵語を組み込んで修道思想を説いた、いわば「ベタな」作品となっていて、詩としての面白さには乏しい。ヨハネ自身がこうした詩を作った可能性はもちろんあるが、弟子たちが編んだものかもしれない。

これらの詩は、韻律も脚韻も単純で、どれも当時の民衆歌謡の変奏（替え歌）といった性格のものである。十字架のヨハネは、イタリアルネサンスの文芸から移入された洗練されたスペイン語の詩歌に通じていたが、当時の民衆歌謡も好んでいたらしい。民衆歌謡というものは多くが恋愛をテーマにするだが、これを神と人との愛を歌うものとして「宗教的意味に(a lo divino)」昇化していく伝統は、古今の宗教に広く見られるだろう。ユダヤ教、キリスト教の伝統では、元来古代パレスティナ地方の民衆的恋歌、祝婚歌だったらしい「雅歌」がヘブライ語聖書に含まれていることが、こうしたいとなみの可能性、正統性を保証してきている。

民衆歌謡は、文字通り歌われるものである。十字架のヨハネの詩も、当時の修道院の中で「リクリエーション」の折などにじっさいに歌われていたらしい。どのような旋律だったかは不明だが、踊ることもあったという。現代のスペインでは十字架のヨハネの詩はいろいろなかたちで作曲され、演奏もされている。「クラシック」であるより「ポピュラー」音楽であることが多い。バルセロナ出身の人気フラメンコ系シンガーソングライター、ロザリアは「夜だけれど(Aunque es de noche)」(前号に私訳掲載)全編をそのまま現代フラメンコに仕立てて歌っている(PVがYouTubeで見られる)。十字架のヨハネの詩は、総じて語彙も技法も高踏的なものではなく、一般

---

。文学的に洗練された詩とも、民衆歌謡の変奏詩とも大きく異なる韻文作品を十字架のヨハネは遺している。

「ロマンセ」という民衆叙事詩のような形式(ロルカの作品が知られているだろう)によって、天地創造からキリストの受肉までのキリスト教の基本教義を物語のように詠ったもので、これには別の面白さがある。これも私訳してみたい。

の人が用いる普通の言葉と地続きになっている。

人間の身体から声として発せられる言葉は、否応なく音やリズムをもつことから、詩はまずは歌であり、音楽として歌われることは自然であり当然である。じっさいに口に出すかはともかく、詩の言葉は「身体に響く」。

「意味」もふくめて言葉が織りなす韻律、リズム、調べが詩のいのちなものだろう。そうだとすると、詩の翻訳は絶望的になるが、また翻訳ということの全位相を考えさせてくれるいとなみでもあるようだ。

人間の身体から声として発せられる言葉は、否応なく音やリズムをもつことから、詩はまずは歌であり、音楽として歌われることは自然であり当然である。じっさいに口に出すかはともかく、詩の言葉は「身体に響く」。「意味」もふくめて言葉が織りなす韻律、リズム、調べが詩のいのちなものだろう。そうだとすると、詩の翻訳は絶望的になるが、また翻訳ということの全位相を考えさせてくれるいとなみでもあるようだ。

## アイルランドの民間伝承：『とりかえ子』（チェンジエリング）

谷口 眞理子

とりかえ子（チェンジリング）を知っていますか。

アイルランドの妖精は、よく子供をさらって代わりに「とりかえ子」（チェンジリング）を置いていきます。1930年代に集められた National Folklore Collection から二話ご紹介したいと思います。

妖精は、アイルランド語でシー（*si*）と言います。この妖精は、皆さんが思い浮かべる小さいかわいらしい妖精ではありません。妖艶で人を惑わす妖精です。シーには、「つむじ風」という意味もあり、風が落ち葉をまき散らすように、さあーと人をさらっていくのです。

どこに連れていくのでしょうか。妖精界です。妖精界で仕事をすることもある助産婦たちが伝えるところによると、妖精界、（つまりここでは、異界を指すのですが）村から遠く離れ、野原や溝を馬で駆け抜けてやっと着くことができるそうです。人間界とは川を隔ててつながっています。

妖精の社会は、実に人間の営みと同じです。女王が子供を産むと、王国全体が喜びにあふれ、パーティーを開き、飲んだり歌ったり踊ったりして祝います。この妖精界は、キリスト教の神の国とは違い、古代ケルトのドルイド教で説かれている「異界」に似て、ケルト人の描く死後の世界観そのものです。何か「なつかしみ」を感じます。自分が良く知っている人や先祖がそこに住んでいるからかもしれないかもしれません。贅沢な衣服や食べ物豊富なあるこの魅惑的な世界は、子供を育てるのに、何の心配も不自由もないところです。妖精たちは、生まれたばかりの赤ん坊や、かわいい幼児を誘拐して自分たちの国で育てたいのです。本当にこのような世界があ

るのかどうかは、わからないのですが。

では、妖精が代わりに置いていったとりかえ子はどんな姿をしているのでしょうか。とりかえ子は、一言で言うと、醜く、不気味で、しわだらけで、年よりじみた顔つきです。若い両親が思い描いていた、愛くるしい、まるまるとした赤ん坊とは全く違います。その成長は、異常なほど早く、 $\sim$ ヶ月ですすでに歩き始めたり、 $\circ$ ヶ月で歯が生え揃ったりと、若夫婦を常に驚かせます。一晚中起きて、奇妙で機知に富んだ言葉を発したり、揺りかごの中で唸ったり泣いたりします。泣き声は一マイル先からも聞こえるほど大きく、母親をイライラさせます。これは決まって母親がいない時に起こることですが、中には、バグパイプやバイオリンを演奏するとりかえ子や、煙草をふかすとりかえ子もいるのです。どうしてそんなことがわかるかと言うと、それを、見た人がいるからです。昔は、アイルランドでは、国中を巡り、家に何日も泊まって洋服を縫う男の仕立屋がいたのですが、その仕立屋とか、鍛冶屋とかが、とりかえ子がバイオリンを弾いているのを聴いたり見たりしているのです。ちなみに、妖精たちは音楽が大好きで、年に一度のお祭りのときには、バグパイプを奏で、バイオリンを弾きながらみんなで輪になってダンスに興じます。

親たちはなんとかさらわれた子供を取り返そうと様々な工夫をします。次に紹介するのは、ある若い父親が生まれたばかりの赤ん坊とその前に連れ去られた子供たちを妖精界から取り戻した民話です。

昔、裕福な農夫がいました。彼の妻は二人の子供を産みましたが、しばらくして子供は $\sim$ 人とも亡くなりました。今、また妻が赤ちゃんを産むところでした。産婆もそこにいたので、赤ん坊が生まれるまで、男は外に  
いることにして、散歩をしていました。

彼が畑の塚の横を歩いていると、中から「生まれたぞ。できるだけ早く行きなさい」という声が聞こえた。続いて、老人の声で、「行けない」と叫ぶのが聞こえた。「できるだけ早く戻りなさい。生まれたぞ」という声がまた聞こえた。

農夫はできるだけ早く家に走り帰りました。彼が中に入ると、子供が生まれて、産婆は生まれたばかりの赤ん坊を腕に抱き、産湯を使わせようとしているところでした。

農夫は、火のそばまで走って行き、赤い火の入ったシャベルを手に取り、それを生まれたばかりの赤ん坊の口に突き付けました。「食べる！」と彼は言いました。（産婆は、この農夫は気が狂ったかと思いました。）「食べられない！」と赤ん坊が答えると、また「食べる！」と彼はどなり、赤ん坊にシャベルを近づけました。

その後すぐに、彼は鉄砲玉のようにドアから飛び出しました。

数分後、若い女性が二人の子供と生まれたばかりの赤ん坊を連れてドアから入ってきました。

彼は二人の子供を座らせ、何か食べさせようとしたが、子供たちは口をぎゅーっと結んだままで何も口につけようとしませんでした。父親は、ドアに鍵をかけ、ウィスキーか紅茶かミルクか何か、そんなものを持ってきて子供たちの喉に無理やり流し込みました。これで安心です。人間界の生きた食べ物を味わった子供たちは、二度と元の妖精界には戻れません。

父親は若い女性を召使として家に留め、外に出しませんでした。その後、三人の子供を元気に育てました。

(NFC220:358)

塚は、妖精たちの棲み処です。妖精を追撃する方法はいろいろありますが、この熱したシャベルをとりかえ子に突き付ける方法、「妖精の丘が火事だ。」と叫ぶ方法などが代表的です。この農夫は伝統的な習慣に従って成功したのです。妖精たちを赤ん坊に近づけないために、母親は子供を一人で置くとときには、必ずゆりかごの上に十字の形でトングを渡す方法をとりました。この子供を連れてきた若い女性は妖精界の妖精でしょう。

とりかえ子は、若い夫婦を悩ます最大の困ったことでしたが、とりかえ子を「神様からの贈り物」と考えることもあるという民話が珍しく残っています。とても心温まる話なので、ご紹介します。

 **A Folk-Tale of Ballyboden  
Rathfarnham - The Year  
Following the Famine** Share  Share  Post

The opposite Scéal I (Proinnsias Ó Dubhthaigh OS) I had from an old man Mr John Downey who spent over sixty years in Rathfarnham and who came originally from Jenkinstown Co Killkenny. I heard this scéal also from his wife Mrs Mary Downey - both corresponded even in particulars. Told May 1925. Both these were over eighty years of age.

[\(continues on next page\)](#)



Transcribed by a member of our volunteer transcription project.

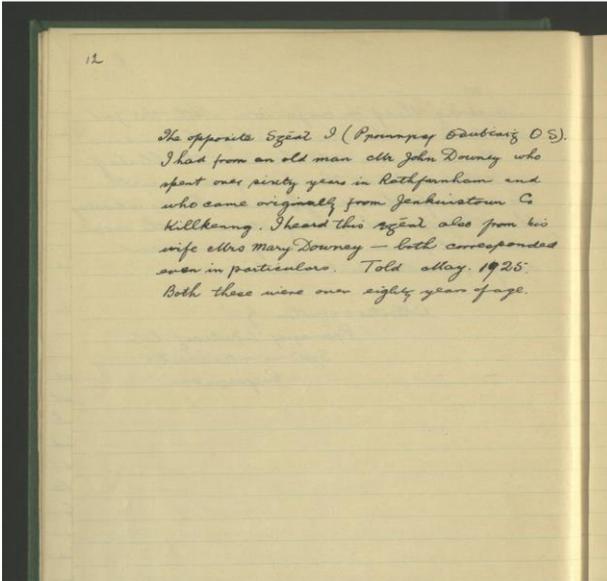
 History Edit

**Language**

English

**COLLECTOR**

Proinnsias Ó Dubhthaigh



## バリーボーデンの話： ジャガイモ大飢饉（1845－48）の翌年の出来事

「大飢饉」の翌年、飢饉から逃れてきた若い夫婦が偶然このダブリン近くのバリーボーデンの町にやって来ました。彼らは南部の村から来ました。

この夫婦に赤ん坊が生まれました。

生まれて間もなくのこと、母親が幼い息子を沐浴させた後に、日光を浴びさせようと、抱いて玄関まで連れて行ったとき、息子が奇妙な表情をすることにと気づきました。どこがどうなのかは正確には言えませんがそう思ったのです。その晩、赤ん坊に乳を含ませている時にも、母親は子供の顔に年老いた、意地悪そうないやらしい表情が浮かんでいるのに気が付きました。頭が混乱して、その表情を正確に言い表すことができませんでした。次の日曜日、子供の父親は「子供は物知りのよう表情を浮かべる」と言いました。その時から、母親は子供に何か奇妙な嫌悪感が増すのを感じました。お祝いをしてくれた近所の人たちは来なくなり、母親は孤独な時間を何時間も過ごさなければなりませんでした。

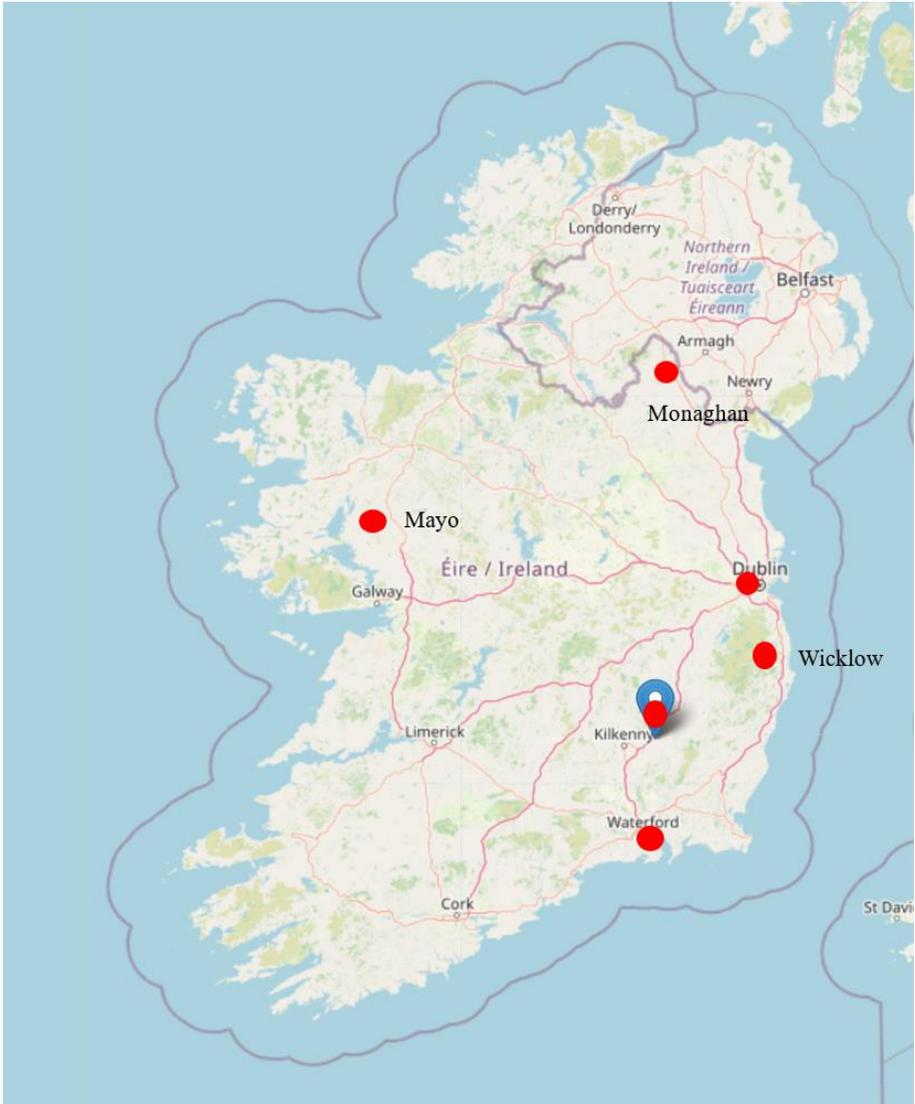
子供が生後一ヶ月になった時、母親は子供の口の中に歯があるのに驚き、薄暗い台所から外に向けて開いたドアのところまで子供を連れて行って、子供の顔を覗き込みました。すると、子供の額、頬、唇、あごに毛がびっしり生えているのを見つけてぞっとしました。慌てふためいて彼女は隣の家の人たちのところへ飛び込みました。すぐに近所の人たちみな子供を見に集まりました。なぜだろうと原因と前兆について、あらゆる方面から意見が飛び交いました。彼らはその子供を「とりかえ子」と結論付けました。二週間後、子供の顔全体に髭が生えてきて、悲嘆に暮れた母親は子供をどうしたらよいか、さまざまな考えを巡らせました。

ついに彼女は耐えられなくなり、司祭を呼びました。司祭は彼女とゆっくり、親身になって話をしました。「なあ、マリア」と司祭は彼女に言いました。「神様はきっとあなたに試練を与えたのだよ。それをそのまま受け入れなさい。子供に嫌な感情を抱いたときは、一番の優しさで抱きしめ、あなたは神様のところから来たのよ。だから神様もとへ行くのよ、と言いなさい。」 どうしようもない感情はすぐに消え、母親から優しさがあふれてきました。

衰れた母親は慰められ、数日後には近所の人たちも皆、彼女の赤ん坊への強い愛情の表れに気づきました。それから、この赤ん坊は、青春、成人、老齡、衰弱のすべてをあっという間に経験しました。2か月後、子供は老衰で息を引き取りました。

現代医学では、きつと子供の病名がわかり社会の支援も受けることができたかもしれませんが、この物語の夫婦は、自分の赤ちゃんを「とりかえ子」として受け入れるしかありませんでした。この「苦しみ」を「受け入れ」に変えたのは、母親の人間的な心と愛、そして神父の諭しです。とりかえ子はわずか1か月しか生きられませんでした。人の温かさに包まれ、母親の腕の中で、幸せに神様のところに旅立ちました。これは、キリスト教の神の国でしょう。

とりかえ子の物語の生まれた町を地図に表してみました。民話の多くは、アイルランド南部の海岸沿いの町から生まれています。ジャガイモ大飢饉(1845)の影響を最も受けたアイルランドの最も貧しい地域です。飢饉以前、アイルランドの人口は800万人を超えていましたが、飢饉、病気、移民により半減し、200万人以上がアメリカに移住しました。



とりかえ子にまつわる民話や迷信が起こった要因の一つは、人口減少、乳児および妊産婦の死亡率の高さ、貧困が重なったことです。このような悲惨な社会状況では、子供が消えたり、とりかえられたりする話が出てくるのは当然かもしれません。もう一つ考えられる要因は、誘拐された子供を取り戻したいという親の願望の現れです。子供や赤ん坊は、本当は死んだのではなく、妖精界に連れ去られ、そこで幸せに生きているのだという親の希望を反映しているのかもしれませんが。あるいは、とりかえ子の物語は、子供を失ったことを悲しむ親に、妖精界で幸せに暮らしているのだからという慰めと回復力を与えているのかもしれませんが。

さらに私が考えていることは、障害を持って生まれた子供が、親や社会に拒否されて、もしかしたらとりかえ子（チェンジリング）と呼ばれたのではないかということです。

キリスト教の観点からも考えてみたいと思います。キリスト教の影響がとりかえ子の民間伝承を形成したかどうかを調べる価値があると思います。ゆりかごに十字架の形でトングを置く伝習、聖母マリアや司祭の言葉、「神の試練」「受け入れ」「あなたは神から来たのだから、神のもとに行きなさい」という言葉から、キリスト教的な影響を考えざるを得ません。

アイルランドは、ケルト的な伝統とキリスト教の世界観の二つが同時に流れている国です。今でも、たぶん流れているでしょう。ケルト人の想像した妖精界とキリスト教界はどのように交差するのでしょうか。私は考え続けたいと思います。

ここで取り上げた物語、とりかえ子の風貌やとりかえ子追撃方法などは、The National Folklore Collection に全て語られています。それらは、オンライン、[duchas.ie](#) で見ることができます。

## References

- “ changeling, *n.* ” *OED Online, oed.com*. Accessed 7 June 2023
- “ lios” *Teanglann.id, teanglann.ie*. Accessed 19 Oct. 2024.
- Súilleabháin, Seán. *A Handbook of Irish Folklore*, Singing Tree Press. 1970.
- Turner, Frederick. *Beauty: The Value of Values*. The University Press of Virginia, 1991
- [duchas.ie](#). 以下の物語の全文を読むことが出来ます。
- 妖精界 *NFCS* 355:84
- とりかえ子の風貌 *NFC* 106:152 *NFCS* 862:113, Co. Kilkenny,
- NFCS* 917:107, Co. Wicklow. *NFCS* 648:276, Co. Waterford,
- NFCS* 934:279, Co. Monaghan.
- とりかえ子の追撃方法 *NFC* 106:8, Co. Wexford, *NFC* 106:2, Co. Wexford

## 2024夏 母を送る〈日々の記録より抜粋〉

野々目 月泉

7/13 一昨日、遠来の来客を案内して神戸まで往復。今朝39.1まで熱が上がっています。もしかしたら、というよりこの急激な発熱具合はきつとコロナ。母の世話もあるので訪看さんに電話して援助を頼みました。連休なので人手が少なくて申し訳なくです。

心配しましたが、来客も神戸の方もお変わりないらしく、とりあえずそこは安心。うつしたら大変申し訳ありません。電車の中でマスクをしないで座っていました。今まで罹らずに来たからという油断、多分それが原因。この頃一段と暑くなったせいもあってついマスクをせずに買い物に出かけたり電車に乗ったり人と会ったりしていました。以前はあんなに慎重だったのに…

7/14 妹が届けてくれた検査キットで昼過ぎにコロナ陽性判明。訪看さんに連絡してしばらく母への一日二回対応を頼みました。うちの勝手はよくご存知で、任せておけるので安心と肩の荷を少し下ろしてほっとしていたら、夕方の訪問時電話が鳴りました。「あまり良くない知らせなんですけど、大嘔吐されていて熱も高いです。酸素も下がっておりこのままでは心配です。救急車を呼ぶかどうか、かかりつけ医に相談しようと思うのですが…」

わー大変、とりあえずかかりつけ医に相談してもらってという事にし、母が単なる風邪か何かなら私のコロナをうつしてしまうので近寄れず、妹に電話。そうは言っても、入院するにしても準備が必要で寝てはおれず、カモノハシマスクをしフラフラしながら一階へ。

結局、母もコロナでした。かかりつけ医から、わたしが寝込んでるので面倒をみられないし、母の状態も悪いので救急車を呼んだほうが良いとのアドバイスがありました。訪看さんが救急車を呼びそのまま搬送され、病院へは妹に行ってもらいましたが、妹は研修医の息子にうつすとひと騒動なので母にも私にも接触したくないとのこと。その事情も分かるので無理は言えません。

母はコロナ陽性なので面会禁止。わたしも人とは会えませんので、病院に任せておくしかなく、ただドクターから電話があり「おうちに帰してあげられると思います。」と、うれしい言葉でしたのでまずは自分が治ることに専念しました。

かかりつけ医からもケアマネさんからも「入院したら大丈夫！」とのこころ強いお言葉。会えなくても心配はありません。今までも度々骨折や誤嚥性肺炎で入院しましたが、その度に病院の最短記録を書き換えるような速さで復活し退院して来ましたから。

7/14～17 (病院へはいけなけれど心配。電話をかけるのも看護師の手を止めることになるので申し訳ないと、相談員と看護師に相談。ステーションが比較的手が空いている時間帯での定時連絡ということになり、毎日

電話をかけその日の様子をうかがっていました。ただ何度か齟齬があったりして、担当医と話すところかで情報が止まったり、行き違いになっていたりも…。)

7/18 主治医から電話です。左脚の膝部の人工骨が骨折し対応を整形外科と相談していますとのこと。入院前に折れていたのではないか、あるいはヒビが入っていたのが入院中に何かの加減で折れてしまった、骨粗鬆症でちよつと触っただけでも折れてしまうような脆さだから、と。人工骨が入っていることは知っていますが、骨折とどのような状況はなく、入院前日と当日は訪問看護が入っていますし、前々日は入浴サービスも入っていますので何かおかしければそこでわかったはず、と伝えました。

高齢なので手術はリスクがあり、このまま自然につくのを待つという方針で意見が一致しお任せしました。

7/25 昨日は病院から連絡もなく、頼りのないのは良い証拠と、面会禁止が取れる今日25日を心待ちにして休みました。

朝、自分の整形外科の通院もありケアマネに「今日、看護ステーションに挨拶だけしてきます」とLINEを入れたら、

「あら、昨日午後〇時過ぎに相談員さんから連絡ありませんでしたか？」

「なんの連絡？」

「退院は28とか29ではないみたいですけど…」

「え？何にも聞いてないけど。」

ただ肺炎が少しぶり返して、それと膝の骨折の件もあって退院の予定が立たないということならそれもありかとおかしいなあと思いつつも自分も納得させるように努力していたところ、まさにそこへ病院からの電話

割愛すると、

昨夜主治医が見回ったら母が左肩を痛がっている様子、当直が整形外科のドクターだったので見てもらったら左肩脱臼骨折とのこと。

それで、今どうしようか相談しています、と。

「え？」

「今日、自分の通院もあり面会禁止も解けていると聞いているのでご挨拶がてら伺おうと思っていたのですが、いかがでしょうか？」

「解けてないですよ、どこから聞きました？」

「妹を通じて初めからずっと25日まで禁止と伺っています（ドクターあなたも言っていましたよ）」

「いえ無理です。まだ熱ありますから。」

…云々というやりとりがあり、その後ケアマネと話して、ケアマネもびっくり。

とりあえず、会えなくても良いのでステーションに対面で挨拶だけでもしたいということにしてその旨ケアマネから相談員に伝えてもらいました。

面談室では、グジャグジャとした言い訳のような話や経緯を聞き、その前に相談員にはこちらのそもそもその考えや、キーマンはずっと同居して面倒を見てきた私であることを伝え、その後Ｚなんとかマスクを買って貰えば面会できると言われ、「面会できるんじゃないんだったら初めからそういうえばいいのに：」

面会した母は、コロナや肺炎で入ったというより、交通事故で入院したようで、左足にぐるぐるとバンテージ、左肩は三角巾、そして手も足もパンパンにはれ、右手は点滴漏れで紫になり：顔もむくんで衰れました。

そんな落ち着かない、日替わりで揺り返しが来るような奇妙な毎日を送っています。

誰の言葉が正しいのか、誰が嘘をついているのか、保身に走っているのか。

いやですね、こういうのが一番嫌いです。

そりゃあなんでもあるでしょう。でも、病院もプロならプロらしくと思ってしまう。

ともかく骨折では死なないでしょうから、本人は痛くてかわいそうですが、肺炎の方をしっかりと治してもらって、後は私が家に引き取って面倒見ますから、ということですが、

頭を持ち上げ動かない体を一生懸命こちらに向けて、かろうじて動く右手を伸ばして私の手を掴もうとし、言葉にならない声を何かあげて、訴えます。

連れて帰りたかったですね。

頭を撫でて、「もう少しやから我慢するんやで。家、帰れるからね。」と伝えるのがようやくでした。母96歳と6ヶ月。もう2週間で父の18回目の命日。

7/26 (友人への報告)入院中の母は入院後3日で熱も下がりが酸素チューブも抜けて順調に回復していると聞いていたのですが、また発熱、同時に左膝の人工骨端に骨折が見つかり、加えて昨日は左肩が脱臼骨折していたと連絡が入りました。面会解禁は25日と聞いていたので面会も病院に行くのも遠慮していたのですが、まだ熱があるので…と渋る病院にステーションにご挨拶だけでもと、と行ってきました。散々グダグダと経過説明や状況報告があり、特殊マスクを買ってもらったら面会できると言われたのですかさず会ってきました。

交通事故で入院したような有様。左脚全体にバンテージが巻かれ左肩は三角巾で吊られて、左側に足も手もパンパンに腫れ上がり、右手は点滴漏れでどこを見てもいたましく…。身動きできないはずなのに、私を認めて必死で身を振りこちらに身体を傾けて来ます。右手を伸ばしてわたしの手を掴んで、言葉にならない声を発します。かわいそうでした。有料の個室部屋なのに冷房効果のためなのかブラインドをおろして真っ暗で、座る場所もないほど物品がところ狭しと積んである狭い部屋です。うちにいる方がずっと快適。でも、二箇所も骨折のありました経口からの食事ができない状態の母を私が気持ちだけで面倒を見るのはあまりに無謀。これからどうしたらよいか、思案しています。

自宅に帰り、天日に晒されてる三階は30度を超え力なしのエアコンはぬるい風を吐き出すだけ。足腰の弱った老犬を介助してようやく階段を下ろし、私と共に一番涼しい主のいない母の部屋に移住しました。一日数回、家横の駐車場までトイレに連れて行くのが今一番の仕事。母も、犬も、車も家も、家電も、全部ひとつからげに老人の世帯というのはこんなものだなあとという情けなさを泣きたいほどに味わっています。父を送って18回目の夏。今年は、試練の夏です。

7/31 母は熱も下がりが酸素も外れましたが栄養が取れていません。胃瘻は無理という結論で、鼻チューブからの栄養補給ができないか近日中に検討します。このままの通常の点滴だけなら栄養低下でひと月以内、血管が細って点滴が入らなくなれば一週間ということでした。

でも、元気になってきているのです。はつきりと私を認識し頭を振り、目を開け何かを言い、手を握り反応します。

なので、希望は捨てていません。

8月が、山場です。鼻チューブができれば、半年、一年は延命できます。

目安がつけばお盆前後には帰ってきて、新しい介護形態になりますが、一日数回の鼻から入れる食事介助がどのようなものになるのか不安もありながら、私が頑張るしかなく…。

慣れれば大丈夫だと思いますが、母の部屋の隣の少し広い廊下に簡易ベッドを入れ、仕事机も移しました。老犬も一階へ移動。

主人も妹一家も母の介護は頼れないので、ケアマネさんや訪問看護師さんに助けてもらって、半年でも一年でも傍にいます。最期の日まで、私が看ます。

若き日に 詠みし歌のひとつふたつ  
古き手帳に 書き付けてあり

軍国少女が妻となりて 母となった  
遠く郷里を離れて 夫を送った18回目の夏  
寝たきりの病室で何を思うだろうか  
療養所で父と出逢った頃の  
若き日の写真がまぶしい

軍事教練で胸を病み 二十歳にて逝きし兄の人  
ようやくに会えるなら 寂しくはないか  
父母も待つ彼岸

母にしても祖父母にしても思っても見なかった転居  
遠い夫(義息子)の故郷へ、健康体になった夫が帰ると言い出した  
引越しの後、年に一度の毎夏の里帰り

帰る日にいつまでも見送っていた祖父母の姿がまだ目に残る

関西の人は言葉は優しいが…と、それ以上は言わず目を逸らした母

近所付き合いもPTAも婦人会も、古典を読む会も、お茶とお花の習い事そして師範…  
持ち前の頑張りで乗り切えたのは、母の矜持

この町では必須の自転車も、 $\infty$ 過ぎてから幾度も転んで怪我をしながらも覚えた  
暗くなってから帰宅した父に支えてもらって表の道で練習していた母  
母の一生を思う

銀幕の女優のように綺麗だった若き日の母

なんの苦労もない暮らしを、父を信じて何の未練も迷いもなく捨てた母  
毎月の月給日前には近くの質屋さんに通っていた母

父は、欲しいものを我慢するということができない坊ちゃん育ちで  
前妻と息子の影がいつもちらついていた

母の一生は幸せだったのだろうか

母が死んだなら、遺骨は祖父母の墓にも収める

それが最後の私の母と祖父母への恩返し

鼻腔チューブで鼻から胃まで細いチューブを入れてエンシユアを流しています。

1缶250cc流すのに5時間、一日に2缶が目標。

母が帰宅したら、流し初めの設定は訪看さんしかできないという事ですが、見守りと流した後のチューブの掃除が私の仕事になります。(↓その後、結局設定もわたしの仕事になりました。)

でも大丈夫、きつとできます。

お世話するのは、好きですから。

まして、自分の母です。

あの夏、父の世話もしたかったなあ…としみじみ思います。

8/4 毎日、これでもかこれでもかというように太陽がジリジリと照り付けます。

オロオロ歩いたら、熱中症で倒れてしまいそう。

石田三成の山城跡(佐和山城)につながる臨濟宗の寺領の墓地は、案の定、山腹の井戸水が上がっていて、一度上がった坂を本堂前の水道まで水汲みに降りてきてやれやれ。往復は流石にご勘弁で、降水確率80%に期待してちよつと墓石をこすってお花立ってだけ洗ってお花を供えてきましたが…降りません。京都はザツツと来たみたい。

何年前もやはりこの時期井戸が上がって、あの時は娘と一緒にだったので水汲み女にし往復させて助かりました。今回は一人でしたので病み上がりだからとご先祖様にも自分にも言い訳して…。

父の亡くなった夏もとりわけ暑い夏でした。

帰って来て欲しいと父からの弱々しい声の電話を受けて、次女が東北大での初めての夏期試験の最終日でしたが試験をキャンセルし、その日届いたばかりの一週間分の生協の食品をご近所にばら撒いて、犬も乗せて、東北自動車道から磐越道を日本海側に抜けて、ひた走りに走って帰りました。

翌日の早朝彦根につき、父の病室に急ぎ、何にも食べさせてもらえないんだようと訴える父にバッグの中にあつたオレンジジュースをスプーンでひと匙、ふた匙口に含ませると、「あー美味しい」と言つて飲みこみました。父が亡くなったのは翌日です。トイレに行きたいと訴えましたがちょうど朝の引き継ぎミーティングの最中で忙しかつたのか、現れた看護師さんは、「オムツしてるんだからそのまましたらいいでしょう!」と吐き捨てるように言いました。父は、顔色を変え声を荒げて、「僕はそういうのはいやなんだ!」

鎮静剤を打たれたのはその後で、もともと心臓の弱かつた父は、昼過ぎには意識がなくなり夕方なくなりました。

私が臨床宗教師になり、緩和ケア棟やホスピスで活動しているのは、父への罪滅ぼしと後悔もあります。それまで半年間同居して、入院や通院、普段の生活をともにしてきていたのに最後の半年手を離してしまいました。最期は緩和ケア棟に移され、あれよあれよという間に死なせてしまいました。

父も私も、言い残したいこと、聞いておきたいことがまだまだあったのに、住み慣れた家で、自然に眠るように最期を迎えさせてやりたかつたのに、病院で逝かせてしまった…悔いが残りました。

命日が近づくと必ずあの夏のことを思い出します。

今年はそこに母のことが重なりました。

今日は、病院へ妹を連れて行ってきました。

妹はもともと母っ子でしたので、私とは違う素直な感情があります。

夕べ、妹の家族に今回の経緯を話しましたが、案の定、「入院中の二度の骨折は犯罪だ！警察に行ってくる。」と息巻いて、それでも夜の間に友人たちに電話し説得されたのでしよう、今朝になったら「病院では騒がないから」と言いましたので、誘いました。

ぐるぐるの包帯や三角巾姿の母を見ても、よく耐えたと思います。

母も妹だと分かったのだと思います。身を傾けてオウオウと声にならない声を出しました。

私は父親っ子、妹は母のひつつき虫。

毎年お盆が終わると、あとみんな帰って行ったなあと思います。

なんとなく、家中から空中浮遊していた気配が消えて、ひっそり静まり返ったお仏間。

母はもう少し連れて行かないでほしいなあ…。

妹の友人のドクター達によると、感染症になりやすい鼻チューブからの長期摂取は無理だそうです。

看護師のいる施設ではあっても、在宅での管理はほとんど見ないということでした。

もうダメなのかなあ、一週間か二週間の時間稼ぎなのかなあ…。

まだ目力はあるのですけれど、私ともう治療の選択肢はないということを受け止めない、受け止めようとする。ここに至った原因はどうあれ、残された日々のカウントダウンが始まっていてそこまで最期の日が来ているというなら私はどうしたらいいのか…分からなくなります

8/9 母は先日まではらんらんとした眼差しでしたが、今日は痰も増え吸引したら吐き戻しもあつて酸素が下がり、苦しかったのかまた泥のような便も出て、調子は良くなり静かでした。

来週、ケアマネさんや訪問看護ステーションの管理者さんが休みに入るので、退院がお盆前やお盆明けになるなら準備を進めておかなければならずで、今日はケアマネとソーシャルワーカーさんとの面談でした。

ただ看取りのためだけに帰宅させる、状態が悪くなつたのを入院死の数字を増やさないためだけに追い出されてもそれは納得できないところがあるので、ともかくもう少し頑張ってくださいとお願いしています。病院としては通常2週間で出すところをもう直ぐ2週間です。何がなんでも帰したいところかもしれませんが…。

今日ついた男性看護師が、初めて、入院されていて骨折させるといふことはあつてはならないこと、本当に申し訳ないことと謝りました。

その一言がまず聞きたかつたのですが、今まで誰の口からも出ませんでした。

安易に謝つてはいけないというのが組織としてのセオリーなのでしょうが、明らかな過失はやはり認めないと思えます。

夕方、大犬をなんとか車に乗せ友人の獣医のところへ。

狂犬病の注射、フィリアの検査と薬、血液検査、爪切り、ノミ取り薬いつものフルコース。

連れて行くだけで大変なのですが、とてもお利口にしてみましたのでご褒美にチーズとミルクキーを一個づつ。

若先生、血管が見えなくて、右前脚↓左前脚に刺し直しになりました。

お父さん先生の時はそのなこと一度もなかったのですけれど…。

イヌウ、「なにすんの！」みたいな目つき。

車にもよじ登り駐車場もちゃんと歩いたので、お前歩けるじゃん！

ちよつと安心しました。

獣医、小学校からの親友なんです。

奥さん、去年の暮れから膠原病で障害者手帳交付になりました。なかなか病名がわからなくて原因も※※※の※

※※※しか考えられないのだけれど、とメールを受け取りました。八代亜紀さんと同じです。

10日に坊守会の地区総会がありそこだけ外出しますが、お盆が終わるまで母さえ落ち着いていけば夜は空いています。

毎年、この時期祖母と父の続く命日のお墓参りを済ませるとやれやれ、お盆のお参りはおまけみたいなもの。

さあ、頑張るぞ！の思いを新たにしたら、今日でした。

父の時は離れて暮らしていて、「月初めからひと月、具合が悪いと聞いてからは毎夜眠れず、寝ても悪夢にうなされて本当に辛かったのですが、看取ってこれでもう父は痛くも苦しくもないのだと思えた時は、ある意味ほっとしました。

それなのに、葬儀を終えて、巨理の家に帰ったら突然声が出なくなりました。擦れながらも出るようになるまで半月ぐらいかかりました。

免疫ができたので、母の時はそこまでは落ち込まないと思います。

8/12 一喜一憂してはいけないとわかっていながら、毎日の様子に心が乱高下します。水枕を見るとああ今日は熱が出ている、包帯の隙間から覗く手足の膨らみに浮腫の増減を思い、痰の絡みに落胆し…。

母は、拘束用のミトンをはめられてから積極的にこちらに手を伸ばすことも稀になりましたが、すっかり見返してくる日もあれば、薄目を開けてうとうとしていた日も。全体の感じは落ち着いてはいます。

さて、どっちの方向に向いているのか：明日は、妹と心人して主治医との今後の方針の面談です。計画では先々週の週末にエンシユア一缶から二缶への増量が予定されていたのですが、二週間ぶりの点滴以外の摂取で泥状便の下痢が止まらず、脱水症状が出ました。点滴をしたら今度は酷い浮腫が出て、肺にも水が溜まっているだろうとのこと。あつちを減らしこつちを増やし、薬を変えと塩梅してくださいませ。

熱が平熱におさまり、下痢も止まり、この状態が落ち着いてエンシユア摂取が日に二缶できる様になってわたしへのレクチャーが終われば在宅に移行できるのでしようが、いつまでも救急で入って救急棟にいられるわけもなく早晚お部屋は移動かと。

このままならひと月、栄養状態が悪いので(そりゃあそうでしょう、水に角砂糖何個ケ分しか入っていない点滴では栄養など補給できるはずがなく…)血管が潰れて点滴ができなくなれば一週間と言われた時が一番ショックでした。その後胃瘻の選択肢がなくなり、高濃度の血管からの栄養補給も無理だと言われて、最後の手段として出てきたのが鼻チューブからのエンシユア注入です。もうそれしかありません。

骨折さえしなければと、喉元まで出かかっていますが、今更病院を責めても仕方ないので今の状態を少しでもよくして退院できる様にそれだけが希望です。頑張ってくれていますが、一進一退。

帰宅でき、何週間なのか何ヶ月なのか家での時を持たたとしても、多分最期は坂を転がる様にあつという間に状態悪化になりただ見ているしかなくなるのでしょうか。それはそれで仕方のないこと、よく頑張ったねと言って、見送りたいと思っています。

娘として妻として母として、母の一人の女性としての生涯を振り返るのはそれから長い歳月をかけてのわたしの務め。

多分その後は、同時並行でもう後期高齢者に入っている住職の夫の介護があつて、無事に見送れば、自分自身が紛れもなき老境。

その覚悟はついています。

8/13 今後の方針について主治医と面談でした。相談員と妹が同席。妹は何一つ語らず、終わってからひどく医師に肩入れた様な物言いを私に。娘というより、医者のおの息子を自分自身に投影している様な感じでした。少し動くと言ったような汗が噴き出す湿気と暑さが朝から続いていて、昨日までは風があつた分凌ぎやすかつたのかもかもしれません。

今週、来週と私の方の在宅での受け皿の練習をして、もう少し骨の接着も待って、今月末には帰宅できるのではないかと感じました。

ただ、相変わらず悲観的なことばかりおっしゃるので、「先生、少しモチベーションが上がること言ってもらわないと、私頑張れません！」と言いました。

かかりつけの先生がどういう形で受けてくれるか、週心の点滴は問題ない、鼻チューブの管理、差し直し、その辺りはむづかしい。それと整形外科の診察。

どのくらい今の病院が最後まで関わってくれようとしているのかわからないけれど、逃してなるものか！

母のことを考えながら、来年の月の同朋女性大会の講師を※※※先生に頼めて肩の荷がおりました。深夜のFacebookでの依頼に、お小言を言うでもなく朝返事があり受けていただけ、ありがたく、優しさの点で※※先生と※※先生は似ています。

明日朝は二時までには病室に行き注入のレクチャー。

少しドキドキ。でもできないはずはない！やるしかありません。

8/14 7月分の支払いを済ませました。

朝二時から注入のレクチャーを受け、若い看護師さんだけでも要領よくテキパキと、大事なところはスマホで動画も撮ってもらえて大変ありがたく、本当は自分一人でちゃっちゃとやってしまった方がずっと効率的で時間のロスも少ないのに、嫌な顔一つ見せず付き合ってくださいました。

そういうみんなの気持ちに応えるように、母の調子も日に日に良くなつて、酸素チューブを外している日が増え、水枕はしたりしなかったり。

8/15 今日には緩和ケア棟での傾聴活動がある日なので注入の開始時ではなく終了時のレクチャーを受けました。終了時は手順も少なく、チューブの洗浄も注射器で白湯を通すだけなので簡単。

点滴を減らせるように100ccほど白湯を注入しているらしく、ミトンなしで、右手を自由にしています。チューブさえ触らなければそれが一番。

8/16 朝、注入準備とポジショニング、口腔ケア、鼻チューブの固定について。初めに整腸剤の注入をシリンジで注入。

ミトンは無しでぬいぐるみを抱えたり自由に動かしています。

二時から一時半に引き上げるまでしっかりと眼を開け手を動かし反応多く、ずいぶん回復したなあと感慨深かったです。

8/17 11日ほどの特訓があつて、母の鼻チューブからの栄養補給はなんとかかなりそうです。看護師さんは親切で丁寧。こんな素人に教え込むより自分たちでチャツチャとルーティンでやった方がずいぶん効率的でしょうに、イヤな顔ひとつ見せずに教えてくれます。

毎日のことで大変だから退院したら施設に預けた方が良い、と内心では思われているのかもしれませんが口に出しては言われません。

そういうところ、宗教者は尊大。

主人なども「自分でやった方が早い、見て覚えるべきだ。」と言って娘に教えませんものね。多分どの寺でも一緒。だから住職が亡くなった時に後継が困るのです。

「住職の葬儀に何も分からなくて恥ずかしかった。周りが助けてくれなかったら葬儀も勤まらなかった。みんな優しくして…」、と昨年、父親を急に送った知り合いの若住職が泣きじゃくりました。

退院の時には、導尿管も抜き点滴も酸素吸入もないようにして、くるくるつと巻いた鼻チューブだけで帰したいとドクターは思ってたっしやるようです。これでグルグル巻ききの脚のバンテージと肩の三角巾が無くなったなら…。ただ脚の方はいつ骨の端が皮膚を破って出てきて開放骨折になるかもしれない、そうなるのならかの外科的処置が必要です。赤紫の変色が見られて、要注意。上からバンソーコ貼っていますが、斜めに割れていて下か

ら支える骨が無くなっているので余計に外に向かっていると説明でした。母はRHマイナスの血液型なので手術になると迷惑をかけます。

退院予定は27日以降の月末かと。

姿勢変換に始まって注入開始まで朝一時間くらい支度にかかりますが、流し始めれば手が掛からなくなってきましたので外出さえしなければ日中家の中のこといろいろできそうです。

母の傍で昼の間に自分の書類仕事が付くのでそれはそれでいい感じ。

点滴保持の時は片手しか使えませんでした。今は両手が空くので仕事は捗ります。

とはいえ、片手しっかり握られています（笑）

注入が終わる夕方以降は、私の時間。

zoom会議はたいてい夜なのでそれも助かります。

TVがないせいで、FMラジオが毎日の友です。

退院後しばらくは入浴サービスや訪看さんや点滴訪問もあってペースを掴むまで大変そうですが、それも慣れかと。

8/17 14:00 昨日絶好調だったのに、今日は濃い茶褐色のものが多量に引けて、出血してなければ良いんだけど、と師長さん。様子を見て続くならドクターに連絡することでした。今日の少し年配の看護師さん、よう

しゃべららばって、母にも答えさせようと一生懸命に話かけ、「答えてくれるんです」と力説してましたけど、「わかってませんよー母。」。もう少し静かに観察していたら、いつもと違う状態に何か気づくのじゃないかと思いましたが。若い看護師さんが「ちよつと一回引いとしましよ」と言ってますと来てくれて、口から引いてくれて状態が判明。おしゃべりな人は、鼻から形だけの吸引。ギャツジアップし忘れたままに注入を進めるし、悪気はないけどちよつと雑なのかもしれません。隣のベッドの患者さん酸素が∞に下がっていてアラームが鳴っているのに、見に行かず、そこも違う看護師さんが走ってきました。

心配は心配、でもそんなにひどい痰の絡みではなかったので明日また来るからね、と言いついて帰宅。

8/17 16:40

病院から電話。

「ふさ子さん、息してないんです。」

あっぱれ、1人で逝きました。

どうして、という思いはありますが、ドクターが泣いて見送ってくれたので口はつぐみません。

家に連れて帰ってきました。

本当に安らかで眠っているよう。

母の周りの空間がしんと鎮まっています。

命終、享年九十七歳でした。

2024/8/22

心臓がコトリと小さな音を立てて最後の鼓動を打ち

吐き終わった息を吸うのを忘れて、母はそのまま逝きました。

もう力尽きたのでしょね。

よく頑張ったと思います。

※階のエレベータを降りて右へ行くと父の病棟、左へ行くと母の病棟。

父に遅れて18年と10日あまり、

お盆の送り火に遅れてはいけないというようにあっさりと、ひっそりと母らしい幕じまいでした。

父の遺族年金や母の国民年金停止の手続きをしましたが、

ああこうして父は亡くなった後18年も母と二人で私を守っていてくれたのだなあと思うと胸が詰まりました。

親の愛は計り知れません。

公務員の家庭で育った私の老後の心配をくだいほどに父はしていました。

主人はお寺生まれお寺育ち、幼くして養子に迎えた父が去り

頑張り者の母親が外で働き、お寺は祖父母が守っていました。

檀家にも可愛がられて根っからお気楽。

大学の教官と聞いていたのですが結婚してからよく聞いたら外地に行っている方の穴埋めの期限付きの非常勤講師。

退職していた父が心配してその頃地方にはまだなかった少し大きい規模の塾を作ってくれました。

運営や生徒の管理、会計事務は母の仕事。

主人と私は、ただ駒を教えにいけばよく、父の車に年度はじめや夏期講習の生徒募集のチラシを詰んで二人（父と母）が新聞の販売店を回っていたことを思い出します。

私は二人の恩には少しも報いていない。

それが申し訳なくって、今更何も伝えられなくって…。

明日借りていた介護ベッドや車椅子を引き取りに来て、今日までお盆休みだったかかりつけ医の先生にお礼に行つて、訪問看護ステーションといろいろアドバイスをもらった薬局を回ってきたら、もう何も母関係の仕事はありません。

社会的立場もない超高齢者の老女が一人死ぬということは、こんなにも簡単。

健康保険証を返し、介護保険証を返し、年金停止の手続きをし、電気やガス、水道の名義人を変更したらそれでおしまい。

母名義の動産も不動産も何もないので呆気ないほど簡単に終わりました。

さて、私はどうしようか。

一階の母の部屋は涼しくて住みやすいのですが、昼なお暗くしんと静かです。

洗濯物を持って三階に上がると、母が生きていた頃の私の部屋、生きている私の空間という気がします。流石に灼熱なので今しばらくは下で暮らしますが、そのうちに大犬のお尻を支えて階段を上げ、三階に戻って明るく風通しの良い、空に近い、遠くの山々の見える日常に戻りたいと思います。

10月3日の七日七日が終わって一週間後の10月10日は母の97歳の誕生日。

お浄土でみんなに祝ってもらおうのだろうかと思うと、少し安堵。

母がいなくなったただけというだけで何も変わらないのだけれど、両親の現実的な助けなしに自分の足で歩き始める初めての秋。  
たぶん、きつと、頑張れます。

8/27

この夏の乗り換え予定が吹っ飛んで、車探しも買い替えも間に合わず、急いで車検に出していたオンボロ車を受け取ってその足で懐かしい場所巡りをしました。

夏の青空、入道雲、ガスを補充したカーエアコンからは冷えすぎるくらいの冷氣。母を助手席に乗せトランクに車椅子を積んでどれだけ病院がよいをしたかわからないもうすぐ十万里到達の猫足愛車。

そしてふっと、ああ、母は今、父の運転する車に乗って18年ぶりのドライブを楽しんでいる！と思いました。自在に滑走し滑空する二人の乗った車は、父が愛したルノーのワイン色のルーテシア。カーナビから理解不能のフランス語が流れる、柔らかいキャメル色の革張りの仏蘭西車。

父が不本意な退職を迎え、その後に興じた塾の20年余、言い争いを続けながらも、あの二人は24時間共にいて、支え合い助け合って暮らして幸せだったのだと、その時はっきりわかりました。

もう二人にはこの世での苦しみは、何ひとつありません。

あの世は一分の苦もない幸せな世界。

父も母も今は限らない幸せな世界にいるのですから、もう泣くまい。

寂しいのは、悲しいのは私の問題。

今はただありがとうと声をかぎりに叫びたい。

母の遺影を頼みに行こう。

父と並べて仏間に揚げ、母を父の元に戻そう。

娘のため、父のため、母のため、誰かのためではなく  
私が私として生きなくてはいけない。  
そういうことをふっと思いました。  
この秋は、新しい秋。

## 冬の星座

鎌田 東二

春の夜明け

夏の行方

秋の気配

冬ざれの島

## 春の夜明け

「はよ起き！ 父ちゃんが死んだんじよ。」

ふるえるような、はりさけるような母の声で目が覚めた。

どんな夢を見ていたのか、なにもおぼえていない。そのあとのことも、いつさい記憶がない。

一九六六年三月十七日、交通事故で突然父が死んだ。私の高校受験の合格発表がある前日のことだった。父は私が合格するかどうか心配していたようだった。

だが、合格の知らせも聞かずに、前日の朝、突然死んだのだった。

翌日の徳島新聞朝刊に、父の死と私の合格発表が同時に載った。

私の記事は、一行。合格高校名と合格者名の記事。

父の記事は、三行。小見出しがあった。「酔って、転んで、死ぬ。」

その日の深夜、父は仕事先でご馳走になり、その後立ち寄った桑野町の食事処でさらに酒杯を重ね、そのあとオートバイで家に帰ろうとして、桑野川の橋の近くのカーブのところ、曲がり切れずにか、対向車に目がくらんでか、事故原因は不明であったが、転倒して道路下に落ちたのだった。

目撃者がいたのか、そのあと通り過ぎた人がいたのか、救急車で徳島大学附属病院に運ばれたが、途中で息を引き取った。徳島市蔵本町にある徳島大学附属病院での死亡確認は三月十七日午前三時三十五分。

その間、私たち父の四人の子どもたちは、そのようなことが起こっているとはつゆ知らず、それぞれの寢床で熟睡していた。

それが、朝まだき、甲高い母の震えるような声で突然眠りを破られたのだった。

振り返って思い起こすと、母も動顛していて、何をどうしていいのか、よくわからなかったのだろう。

青天の霹靂という言葉があるが、予想外の出来事だったことは間違いない。

母を襲った衝撃がどのようなものであったか、そのときも、いまも、まったくわからない。

印象としては、気丈にふるまう母の姿はある。しかし、どのような表情をしていたかとか、どのような仕草をしていたかとか、兄や姉の表情がどうだったかとか、一切記憶がない。

記憶があるのは、父の葬儀が終わって一週間ほど経ったころ、弟が家の前の田んぼの畦道でボーっと座っている姿だけだった。

だが、誰が死のうか生きようか、日々の日常は淡々といとなまれ、過ぎてゆく。

四月になって、私は高校一年生となり、入学式に出席した。その瞬間、あえて選択した高校を間違ったと思っただけだった。

後から考えると、その誤った選択の父なき高校生活の三年間が今の私を作ったといえる。母の苦勞や兄弟たちの失意をよそに、私はふしぎな高揚感と絶望と道なき道の戸惑いの中にあつた。

私の前にレールも道もなかった。見えなかった。どこから来て何処へ行くのか。自由であつたが、どうしていいか、わからなかった。

二年後の一九六八年四月、九州の青島への一人自転車の旅から帰ってきて、私は口から火山弾を吐き出すようにして詩を書き始めた。

言葉は私の口中から反吐のようにどろどろと出てきて、止むことがなかった。

それが今もつづいている。

私の地殻変動は、父の死から始まっている。

その父が、戦争トラウマを抱えていたことを子どものころから薄々とは感じていたが、二年前にステージⅣの大腸がんが発覚してはつきりとわかるようになった。

父・田中義美は、大正九年（一九二〇）三月三日、徳島県那賀郡桑野村大字桑野字大谷四十二番地で生まれた。父・田中嘉吉、母・田中リキの六男末っ子として。

母リキは、乳飲み子の義美を抱いたまま、ある朝死んでいた。父義美は、生後三ヶ月で冷たくなった母親に抱かれたままある朝目覚めたのだった。当然、そのことの記憶はないはずだ。

義美は、桑野尋常小学校に入学し、卒業後、桑野尋常高等小学校に進んだ。当時珍しいバスケット部に入り、活躍した。背が高く（一メートル七十三センチ）、シュート力もあった。五歳年下の下級生だった母鎌田フミヨは上級生の田中義美のその姿をあこがれをもつて見上げていたという。

が、家が貧しく、旧制富岡中学校に進学することができなかった。バスケット部の親友の檜原君は富岡中学に行き、卒業後、徳島師範学校（現徳島大学教育学部）に進学して小学校の教諭となった。

父に強い向学心と進学希望があったことは、その後の彼の軌跡をたどると見えてくる。

はつきりとした証拠写真が私の手元にある。写真の表は、陸軍軍帽をかぶり、首と両手に近い裾にふかふかのあたたかそうな毛皮の越冬服の上着を着こんで腕組みをしている鎌田義美。その裏には、かなり達筆の細字筆書きで、

昭和十五年十二月

宇都宮陸飛校

名取飛行場

二十一才



昭和十五年十月  
宇都宮陸軍飛行校  
名取飛行場  
二十一才

とある。

鎌田義美は、大正九年（一二二〇）三月三日生まれである。であれば、「昭和十五年（一九四〇）十二月」は、満二十歳、数えて二十一歳。鎌田義美が属していた「宇都宮陸軍飛行校」は、正式名称は「宇都宮陸軍飛行学校」で、昭和十五年十月一日に「宇都宮陸軍飛行場」に開設された飛行機操縦を行なう少年飛行兵や将校や下士官に対して飛行機の基本操縦教育を訓練した「日本陸軍軍学校」の一つである。その分教所が、仙台陸軍飛行場、名取陸軍飛行場、磐城陸軍飛行場、那須野陸軍飛行場、金丸原陸軍飛行場、前橋陸軍飛行場、下館陸軍飛行場、古河陸軍飛行場の八つの飛行場であった。

この年、昭和十五年九月十三日に、「勅令第五七七号 宇都宮陸軍飛行学校令」が当時の内閣より発せられている。

宇都宮陸軍飛行学校令 宇都宮陸軍飛行学校ハ飛行機操縦ニ従事スル少年飛行兵及少年飛行兵ト為スベキ生徒ヲ教育スル所トス 生徒ハ東京陸軍航空学校ヲ卒業シタル者ヲ以テ之ニ充テ飛行機操縦ニ従事スル少年飛行兵タルニ必要ナル學術ヲ修習セシム通常毎年二回入校セシメ其ノ修学期間ハ概ネ一年トス 陸軍大臣ハ臨時ニ兵科（憲兵ヲ除ク）將校以下ヲ召集シ必要ノ修学ヲ為サシムルコトヲ得 生徒ノ教育綱領ハ陸軍航空總監之ヲ定ム 生徒ノ教育ノ實施ハ教則ニ依ル其ノ教則ハ前条ノ教育綱領ニ基キ陸軍航空總監ノ認可ヲ受ケ校長之ヲ定ム 少年飛行兵、生徒及第三条ノ規定ニ依リ召集シタ

こうして、徳島県那賀郡桑野町の鎌田義美は、「東京陸軍航空学校ヲ卒業シタル者」の一人として、「飛行機操縦ニ従事スル少年飛行兵及少年飛行兵ト為スベキ生徒ヲ教育スル所」に、「飛行機操縦ニ従事スル少年飛行兵タルニ必要ナル學術ヲ修習」するために、急ぎ書類を作成して送り、「陸軍航空總監ノ認可ヲ受ケ」、志願して、宮城県名取の陸軍飛行学校に入り、一年間の学習と訓練の後、正式の航空兵となり、満州に渡り、ロシアに近い満州帝国黒龍江省のハルビン（明治四十二年【一九〇九】枢密院議長の伊藤博文はハルビン駅前で安重根に暗殺されている）に配属された。

ちなみに、同年に陸軍航空總監部が定めた同校の教育内容は次のようなもので、けっこう専門的で高度なものである。

#### 操縦候補生教育

堅固な志操と高潔な品性を陶冶することにより幹部となるにふさわしい人格を養成し、かつ戦時飛行機の

操縦に従事する初級将校に必要な基礎の学識技能を与えることを目的とする。

術科…一般教育・操縦術・空中航法・機関工術・航空用具の取扱・内務および諸勤務。

学科…作戦要務令・航空兵操典・軍制学・地形学・空中航法学・航空法規・気象学・軍陣衛生学・その他。

#### 八十三条下士官候補者教育

軍人としての徳性を涵養し航空兵科初級下士官に必要な学術を修得させるとともに、戦時飛行機の操縦に従事する下士官に必要な基礎の能力を備えさせることを目的とする。

術科…一般教育・操縦術・空中航法・機関工術・航空用具の取扱。

学科…作戦要務令・航空兵操典・地形学・空中航法学・航空法規・気象学・軍陣衛生学・その他。

内務および諸勤務

この学習と訓練を受けて、「少年兵」として満洲帝国に派遣され、満州での知能テストで最優秀となり、満鉄の総裁に呼ばれて褒められたという。

そのことを姉は父から聞いて覚えていらしい。そのことを最近知って、父は姉の前でそのようなことを語っていたのか、と不思議な気持ちがあった。

というのも、三人の息子たちの前では、酒に酔うと、まっぴだかになって、「わしの人生は余生だ。同期の戦友はみな死んだ。特攻隊で。わしと、もう一人、肺尖カタルになって陸軍病院に入り、除隊した。もう一人の生き

残った戦友は、戦後、民間旅客機のパイロットになったが、墜落事故で死んだ。残った同期は、わしだけじゃ。」と、泣くように、嘆き叫ぶくように言い放って、朗々と何曲も軍歌を歌いつづけるのだった。その「儀式」がひとしきり終わるまで、私たち息子三人は正座したまま畳の上に座らされているのだった。

ある朝起きると、家の庭の木がすべて斬られていた。軍刀をもってよく手入れしていた父が何を思ったのか、怒りにかられてか、悲しみにつきうごかされてか、庭木を全部斬りはらってしまったのだった。誰もそれを止めるものはいなかった。脳溢血で寝たきりの祖父も乳がんの義祖母も母もだれも。止めることはできなかった。

「酔って、転んで、死ぬ。」と三行で徳島新聞に死亡記事を書かれた父は、死の間際何を思っていただろう。死んで逝った戦友たちのところに逝けることに安堵のころもちがあっただろうか。

最近、父の死を、それとして受け止めることができたようになった。

これまでは、みじめとまでは思わないが、つらい死だっただろうと思っていた。

しかし、まんざらそうでもないかもしれないと考えるようになった。

じつは、父は、いつも早くおれも死にたいと思っていたのではないだろうか。つねに、自分も早く死ぬべきだ、と思っていた。そうにちがいない、と確信するようになった。

戦友に対する自責の念、そして、自己処罰の念慮に常に引き戻されていたのではないか。自殺はできない。しかし、事故死であれば。

父はオートバイに乗っていた。元優秀な航空兵だったようだから、運転技術には自信があったはずだ。オートバイに乗っている姿は颯爽としていた。いくらか長身で体格もよく子どものころは女子児童のあこがれの美少年であったことは、残されている写真からもうかがえる。

父は、航空兵として、特攻隊の一員として知覧の飛行場から飛び立つことを当然と考えていただろう。

だが彼は知覧から飛び立った特攻隊員の一員にはなれず、靖国神社に英霊として祀られることもなかった。戦友たちは、ほぼ全員靖国の英霊となっている。

おれの余生はなんだったのか。父の胸裏と脳裏に常に甦る戦友たちとの日々。そのときの甘酸っぱくも苦いような切ないような感情。取り戻すことのできない十代の終わりの日々。戦争のさ中ではあったが、精一杯生きて、精一杯死んだ。

その戦友たちに比べて、戦後のおれはのんびんだらりと子どもたち四人を得て、このようなふがない日々を過ごしている。

彼はどうしようもない自己処罰感に日々苛まれていたのではないだろうか。酒を飲むと、それが一挙に吐き出された。その「反吐」を受け止めたのは、三人の息子たち、中でも二男の鎌田東二、私だった。

父が死んで、私は一切悲しむことはなかった。一滴の涙も出なかった。

そうではなく、むしろ、開放感があった。おれは自由だ。父を喪ったが、自分は自由である、という開放感があった。それは、おそらく、兄にも、弟にも、姉にもなかった感情であり感覚だっただろう。

反抗期となり、父に向かって反撃の拳を振り上げたとき、父が不在となった。そんな感じもあった。

それは、哀しみではなく、開放ではあったが、しかし、自分はどこへ行けばよいのか、まったくわからない無道の渦中にあった。

父の死から始まるわが家のてんやわんやについても、父の葬儀のことについても、まったく記憶がない。思い出せない。

私は十四歳の終わり。あと三日すれば三月二十日になり、十五歳になるはずだった。こうして、私の十五歳は、不幸ではないが、無道無策で始まった。

## 夏の行方

その夏がどんな夏だったか、いまとなつてはほとんど思い出せない。ただ一つのことを除いては。

その夏、七月の中頃、わが家が徳島県下で一軒だけ集中豪雨により、裏山の土砂崩れに呑み込まれ、全壊してしまった。

右隣の家とは五メートルも離れていない。左隣の家とは、小さな畑を挟んで十メートルの距離。

だが、奇妙なことに、両隣にはまったく何の影響もなく、我が家だけがピンポイントで全壊したのだ。午後七時ごろのことだった。

家の中には、母が一人で、兄（長男）と姉（長女）の帰りを待っていた。

阿南市富岡町にある電電公社に勤めていた姉の帰り、豪雨だったこともあり、桑野駅まで兄が車で迎えに行っていた。

突然、ゴーっと云う物凄い音とともに地響きがあった。

母は、咄嗟に、動物のように、一目散に家の中から土砂降りの雨の中、外に飛び出た。そして、庭に出て、後ろを振り返った。

見る見るうちに、わが家の母屋が土砂に呑み込まれ、押し流されてきた。身の安全をはかりながら、その仔細を見つめていた。

その時の母の気持ちがどのようなものであったか、訊く機会は何度もあったはずなのに、一度も訊いたことはない。

ほどなくして兄が姉を助手席に乗せて家に戻ってきた。そこに、土砂降りの中、ずぶぬれになりながら呆然と突っ立っている母と土砂に呑み込まれた我が家を兄と姉は目撃することになった。

その時の兄と姉の気持ちについても、一度も訊いたことがない。

何十年もの生活を重ねてきた自分たちのおいのしみついた家を喪失した彼らが、その時、どのような思いでいたのか、一度も訊いたことがないし、想像力をはたらかせたこともない。

そうなのか。そうだったのか。そうなるのか。

そのことを知って、ただ、そのように感じただけだった。

そして、もう金輪際母に無心することはできないと覚悟した。

フーテン気質のぬけない能天気な学生だった私が社会的な意味で自立したのはこの時だったと思う。一九七二年七月のことだった。

## 秋の気配

父は春死んだ。

が、祖父母は秋に死んだ。

秋の気配は、私にはつねに祖父母の死とともにある。

明治二十一（一八八八）年十月二十四日生まれの祖父鎌田藤七（のちに東助と改名）は、昭和三十八年十月二十六日、秋のある日、この世を去った。行年七十六歳だった。藤七は「七番目の子ども」ではなく、父鎌田辨蔵、母クスノの長男として生まれた。

祖父とは「いんきや（隠居）」で小学生の六年間を祖母とともに三人で過ごした。

その秋の気配は忘れられない。墓地に向かう行列もおぼえている。何本かの旗を先頭に行列がつづき、菩提寺の万福寺の住職の後に棺桶と親族が従う。

気だるく、物憂い、何もやることのない奇妙な倦怠感の中にあつた。

葬儀に緊張していたという記憶はない。大工の棟梁であつた祖父は県南地域では名工としてよく知られていた。宮大工もできるほどの腕前で、見事な設計図も描いた。時代が時代なら、地方の名建築家と名を馳せたであろう。今でも、桑野町に帰ると、「藤七はんの孫なんけ〜」と言われることがある。

新しいもの好きで、桑野町で最初に自転車を買って乗った人ということでも知られていた。進取の気もあつたのだろう。

祖父について私が知っているのは事柄の多くは他人の評価で、私自身が知っているのは日常の中の脳溢血で右半身不随の状態で言葉もしゃべることのできない祖父の姿だけだった。数年間も共に過ごしていると、いつの間にか祖父が何を感じているか、何をしてほしいか、わかるようになる。

おむつを替えてほしいのだから、尿瓶に排尿したいのだから、とか。ブザーで母屋にいる母を呼ぶ祖父の表情の中には早く何とかしてほしいという気持ちにじんんでいた。

祖母は乳がんで医療拒否していたので、本当は血のつながっていない母が毎朝夕消毒をするだけだった。

今となっては、祖母の介護、そして、夫の突然死、四人の子どもたちの養育、母に降りかかってきた災難ともいえる苦労の数々が少しはわかるようになった。そして、母に対する感謝と敬意がいや増しに増してきた。

人生を楽しむというゆとりは彼女にはなかった。

私は祖父と一緒に暮らしながら、自分の方が祖父よりもおとなであるように思うことがしばしばあった。祖父が自分より小さな子どもに見えることがたびたびだった。

のちに、私は『翁童論——子どもと老人の精神誌』（新曜社、一九八八年）という本を書いたが、その論の根底にあった実感は、子どもである私がじつは老人で、老人である祖父がじつは子どもであった、というその頃の私の直覚であった。それを理論化し、事例を引いて跡付けただけのものだった。

私の中で、子どもと老人の境目はふたしかであり、明確な境界はない。いつでも反転し逆転しうるコインの裏

表のようなものにすぎなかった。祖父母は私にそのことを教えてくれた。だから、『翁童論』は祖父母との共著である。

祖母鎌田納は、明治三十一（一八九八）年九月十五日に梶南の漁師町の椿泊で父阿利音吉と母フサの四女として生まれ、昭和四十五年（一九七〇）九月十五日に、誕生日と同じ日に身罷った。行年七十二歳。納は秋の人であった。

春生まれの私は春になると「たまあくがるる」気分になり、矢も楯もたまらず旅に出たくなるが、秋になると愁いと切なさに浸される。それは祖父母の気配と気分が私に乗り移ってくるからだ。

祖母は、漁師町に生まれた。家は網元と聞いていたが、その分家筋の貧しい漁師だったのかもしれない。できれば、徳島に芸者に出ることなどなかっただろう。

彼女は美しい人だった。おそらく、徳島の新町や富田町で美人芸者として売れっ子だった時期があるのではないか。誇り高い彼女のふるまいを思い出すたびにそのようにおもう。

つねに火鉢を囲んでキセル煙草を吸い、『マーガレット』や『りぼん』や『少女フレンド』や『花と夢』などの少女漫画を読み、三味線を弾く毎日だった。寝たきりの夫の世話も家事手伝いも一切しない。そして必ず自分の特別な湯飲み茶わんにたっぷりと日本酒を注いで晩酌にした。

自分の世界と流儀を何ひとつ壊すことのない人だった。子どもの私には、父母は夫婦のおとなであったが、祖父母は夫婦であるとも、おとなであるともおもえなかった。むしろ、私以上に子どもに見えた。私は祖父母の保

護者のような気持ちにしぼしぼなった。祖父母を年長者とは思えなかったのだ。

そして、中学生になるまで、祖母の布団と一緒に眠った。右隣は少し高さのある藁布団に横たわっている祖父がいた。祖父と祖母の間、三本川になって私たちは夜を過ごしたのだった。

どのような子どもでも、病人とともに八年もともに生活したら、どこか憂愁を身に着けてしまうのではないだろうか。そしてその憂愁はいつも秋の気配をともなっている。

祖父は、十月二十四日に生まれて、十月二十六日に死んだ。

祖母は、九月十五日に生まれて、同じ九月十五日に死んだ。

私も祖父母に倣って、春に生まれて春に死にたい。三月二十日生まれの私は、いつも生まれた日と同じ、三月二十日に死にたいと思っている。

その祖母が、一度だけ真剣な面持ちで、病気で寝込んでいる私の隣に来て、緊張した強い言葉でこう言ったことがある。

「うちは、おまはんのほんまのばあちゃんじよ。」

本当の血のつながりのある祖母が、おまえの本当の祖母であるなどとあえていうものだろうか？

それから、祖母が祖父の五度目の妻であることを知るまでに、それほど時間はかからなかった。

が、その「事実」を知った後も、私は鎌田納が本当の祖母だと思う気持ちは変わることはなかった。私に一番影響を与えたのは、この祖母だったから。血がつながろうかつながらなろうか関係ない。もっと深いチ(霊)の

つながりがあることを私はこの祖母を通して知ったから。

## 冬ざれの島

一年半も経たないうちに、この冬ざれの島にふたたび訪れることになるとは。

一九七一年四月十一日、上野から初乗り料金の切符を買って、夜行の急行と鈍行を乗り継いで、朝七時過ぎに新潟駅に着き、そのまま駅員に切符を渡して改札をと売り抜けようとして、後ろから「お客さん、切符が違いますよ！」と声をかけられたのか、ぐつと襟首を掴まれたのか、記憶は定かではないが、要するに、新潟駅でキセル乗車がばれて、駅員につかまってしまったのだった。

友人の中島和秀は、周到に東北一周の割引周遊券を購入して持っていたので、駅員につかまっている私を横目に悠然と改札を通過していった。

ちよつと心配そうな表情もしているが、この事態を楽しんでいるようにも見えた。しょうがない。なるようになれ、だ。

それから、小一時間、こつてりと、新潟駅の鉄道公安室でしぼられた。解放されたのは一時間後だが、今後に影響く重要な出来事があった。

それは、新潟駅から徳島県阿南市桑野町の桑野駅まで電話が行き、母親が駅に呼び出され、そこで罰金料金を払わされたという事態があったことだ。

これにより、何よりも世間体を大事にしてきた母親にさらなる心配と苦勞をかけることになった。というのも、この事態の出来によって、桑野町全体というのは大げさだが、地元の多くの人に「鎌田フミヨさんの二男のトウ

ジくんがキセル乗車して新潟駅でつかまったんやと。」と一気に噂が広がったからだ。そのために、母親はいろんな人から「トウジさん、元気でやってますかあ。」とか、とぼけたような、あいまいな挨拶をされることとなり、気苦労することになった。

だが、そんなことは、どこ吹く風。全く気にせず、中島和秀と私は佐渡を一周し、秋田県男鹿半島から、青森県下北半島まで足を伸ばし、性懲りもなくさらなるキセル乗車の流浪の旅をつづけたのだった。

自分がどんなことをしているのか、それがどのような影響を周りに与えるかなど、まったくひとかけらも考えることがないほど幼稚だった。

そんな自分が、ほぼ一年半後に今度はある女子学生にキセル乗車をさせて、いっしょに佐渡まで来た。一九七三年二月のことだった。

なぜ佐渡に行ったのか、今となってはその「犯行動機」は判然としない。世間知らずの女子学生が初乗り料金で渡した上野駅発行の切符はそのまま何も咎められることもなく改札口を通過した。上野から長岡まで急行、長岡から始発の列車に乗って、新潟駅で下車。

そのまま駅前のソバ屋で熱いそばを食べてから新潟汽船だったかで佐渡に渡り、外海府に行ったのだった。

猛烈な風。獰猛に砕け散る冬の荒波。飛び込んだ瞬間に藻屑となって錐揉みされるような。あらゆるいのちの声を掻き消す怒涛の海。

その海を前にして、どんな声もなかった。

これから先、何をしようという思いもなかった。  
ただ、ひたすら冬の海を見つめていた。それだけを仕事にしているかのように。

【付記】

その世間知らずの女子学生（山岸左紀子）は現在半世紀以上生活を共にしている配偶者である。彼女とは、このとき、佐渡から大阪経由で隠岐の島まで、島渡りの逃避行をつづけた。どれほど周りを心配させれば気がすむのか、私の無鉄砲はとどまることがなかった。

## 崇り

母を支配していた感情は「崇り」と世間体だった。

自分が鎌田家を引き継ぎ、小学生の時にあこがれの君であった美少年が戦地から帰ってきて、仲介者があったのだろう、昭和二十三（一九四八）一月二十七日に、母鎌田フミヨは田中義美と結婚した（婚姻届けは同年七月三日）。

母は戦後まもなく北海道の叔父の家に身を寄せていた。が、旧制富岡中学を優秀な成績で卒業した鎌田一族の期待の星で国鉄桑野駅に勤めていた兄が肺結核で急死したため、急ぎ郷里に帰り、家を継ぐことになったのだ。そして、小学生の時にひそかにあこがれていた上級生を結婚した。

母にとっては、それは思いがけない展開であり、喜びもともなうものであっただろう。

結婚してまもなく昭和二十三年（一九四八）一月一月二十一日に長男吉仁が生まれ、翌昭和二十四年七月二十日に長女モト子が生まれ、そして年子で昭和二十六年三月二十日に二男東二が生まれた。末っ子の三男功三は昭和二十八年二月二日に生まれた。

たいへんではあったが、つづけざまに四人の子を産んだころの母が、生涯でもっとも幸せな時期だった。何といても、あこがれの君の子を四人も授かったのだから。

私はしかし生まれた時から母を苦しめる運命にあった。

ご丁寧にもへその緒を三巻き首に巻いて産道を出ようとするとするたびに、へその緒が自分の首を絞めて苦しいので、

すぐに引つ込み、また陣痛促進剤で産み出そうとして力んで顔を出しても、またもや自縄自縛、自分のへその緒で自分の首をしめてまた子宮内に引つ込む。それを繰り返したため、母体も胎児も共にきわめて危うい事態となり、ようやくにして産婆が取り上げたとき、母は疲れ切り、私は顔だけでなく全身鬱血のチアノーゼで紫色。一言も泣きもしなかった。

ふつうの赤ちゃんなら上げるはずの「おギャー！」という声は私の口から発せられることはなかった。「ふにゅ」とか「ふにゃ」とかいったか細い吐息のような息もたえだえの状態。それが、私のこの世へのデビューだったという。

このことは、ことあるごとに、母からくりかえし言われてきた。たぶん、おまえには苦勞させられたよ、今もね、ということと言いたかったのだろう。

そのとおり。吾ら四人きょうだいの中で、母を困らせ、心配をかけとおしたのは私一人だった。

兄も姉も弟もじつにおだやかだが、私はたいへんな癩癩持ちで、とてつもなく激しい不安定な気性。どうにも扱いにこまったにちがいない。

加えてしかもときどき、「鬼がいる！」とか、「ぼくには山に巣があるんや。」とかと、奇妙なことを口走る。

それは私にとっての心的現実だったが、きわめて良識的な現実主義者で、世間体とか世間並みとか後ろ指をさされないとかを極端に気にする常識人である母には、この鬼っ子のような非常識そのもののわが子には手を焼いただろう。

高校生のころ、あまりに心配した彼女は、橘（桑野町の隣の港町）の霊能があると評判の占い師のところに行って、わが子の未来を占ってもらった。そして、その占いの結果を聞いて、気が休まるどころか、いつそう心配事が募ったのだった。

占い師は言った。「この子はいい方にいけばよい方で目を出し、かなりなことを成し遂げるが、悪い道に逸れれば悪い方でより悪いやつになる。」

これを聞いた母はさぞかし困ったことだろう。判じ物のような、禅の公案のような矛盾そのもののような答え。二律背反。残念ながらと言うべきか、幸運にもというべきか、このような両義性に耐えられるだけの感性と頭脳を彼女は持ち合わせていなかった。彼女は単純明快素直を求めていたから。どこから見ても複雑系のひとはなかった。彼女が一番恐れたのは、いつかこの子は悪の道に染まってやくざの親分になるんじゃないか、ということだった。

かあさん、あなたのしんぱいはあつた。ぼくは、ほとんど、「やくざのおやぶん」になっちゃったよ。なぜなら、「ササノヲの子分」だからね。この世の枠から外れっぱなしだからよう。

場違いで生まれてきたぼくは、場違いで死んでいく。生まれてきた場所を間違えた。ぼくは、「とりかへばや」のような取り換えっ子だったんだよ。鬼の子として、鬼の世界に生まれるべきだった。そうおもうよ、かあさん。

母を支配していたもう一つの感情、それは「たたり」だった。

「たたり」とはなにか？ 日本民俗学はそれを神聖なる存在や霊威ある諸存在の立ち現われととらえ、その「た

ちあらわれ」が「たちあり」↓「たたり」↓「祟り」となっていつて、襲ってくる災難や災害や不幸、もろもろの排除したい破壊や崩壊という意味合いを含むようになっていったと考えた。

母は確かに「祟り」を恐れていた。

それは、まず第一に祖父鎌田藤七が「祟り」で身上をつぶしたから。関東大震災が起こる前、飛ぶ鳥を落とす勢いの大工の棟梁であった祖父は百件近い新築家屋の請負をしていたらしい。県南地方のほぼ全域の建造物を受けた、ということだろう。

だが、大正十二（一九二三）年九月一日、関東大震災が起こり、みるみるうちに材木が高騰。契約金内で仕事を完成させねばならぬ請負仕事をしていた祖父は、それにより、仕事を仕上げれば仕上げるほど多大な借財を背負うことになったのだった。

その年の正月、祖父は宣言した。「我が家には年末年始の三ヶ日、正月四日間、家の中に酒を置いても飲んでもいけないというしきたりがある。だが、デモクラシーのこの世の中、こんな理不尽な迷信を後生大事に守っていく必要はない。わしは、この家のしきたりを今日からきっぱりと捨てる。」

こう宣言して、近代主義者の祖父は平安時代の終わりごろから続いてきたという我が家のしきたりを破ったのだった。

そのしきたりの由来はこうである。

——慈円が『愚管抄』で「乱世」とも「武者の世」となったとも嘆いた「保元の乱」（一一五六年）で、わが家の先祖鎌田正清は主君源義朝とともに後白河天皇側に付き、勝利を収めた。しかし、その後の処遇に不満を抱いていたという源義朝は、三年後の平時元年（一一五九）、ライバルの平清盛が熊野詣に出かけている間にクーデターを起こし、二条天皇と三種の神機を拉致し政権を奪取したかに見えたが、その知らせを聞いて急ぎ取って返した平清盛との戦いに破れて敗走。次々とわが子（悪源太源義平、源朝長、源頼朝【ただし行方不明】）を失いながら、最期は鎌田正清の妻の父の平（長田）忠致に騙し討ちにあつて殺された。その際、源義朝は風呂場で、鎌田正清は酒に酔わされて殺されたという。それが年末から正月にかけての出来事だった。

そこで、その子孫の鎌田家は、以来、正月に酒を神棚に供えることも、また飲むことも禁じて今日に至った。その禁を破ると考えられない不幸や災難に見舞われる。——

これが、「酒なし正月」の鎌田家の掟となり、それを後生大事に守り続けてきたのだった。それを大正十二年の正月に祖父が破り、その年の九月一日に関東大震災が起こり、わが家が破産の憂き目にあつたのだった。

それは、母が生まれる一年ほど前のことであった。

母鎌田フミヨは、大正十四（一九二五）年一月十日に父藤七、母キクの五女として生まれた。母は家が破産した貧乏のどん底で生まれたのだった。

尋常小学校を出て、しばらくは家の手伝いをしていたが、昭和十九年（一九四四）に動員さえ、呉の軍需工場で働いた。昭和二十年（一九四五）八月六日の朝、鎌田フミヨは広島に投下された原爆投下後の爆発と火を呉から見たという。

終戦後、一端郷里の徳島県阿南市桑野町に戻って依然と同様、家の手伝いをしてきたが、生活が楽ではなかったのだから、北海道十勝の叔父（父鎌田藤七の弟鎌田幸重）の家に預けられ、叔父の家の手伝いしながら、ごくごくつましい花嫁修業のようなことをしていた。

しかし、戦後、兄の鎌田忍が昭和二十二年（一九四七）一月二十八日に肺結核で急死したために、急ぎ郷里に呼び戻され、家を相続することになり、昭和二十二年七月三日、あこがれの君の田中義美と結婚したのである。その義美が「酔って、転んで、死ぬ。」ことになった昭和四十六年という年の正月元旦、知り合いの人が、わが家のしきたりのことを知らずに、正月に我が家に酒を持ってきた。母はこのことを大変気にかけて。父はそれほどでもなかった。

しかし、母の不安は的中することになる。その年の三月十七日の深夜のオートバイ事故で。

昭和四十七年七月に我が家が徳島県下で一軒だけ集中豪雨のため山崩れに呑み込まれて全壊した出来事が起こった年の正月にも、ある人が正月に我が家に酒を持ってきた。母は大慌てで制止したが、遅かった。気が気でなかった母の不安は的中した。我が家は家もなく、金もない家となった。

私はこの時に、金輪際無心はできないと悟ったのだが、その後も、ことあるごとに母の脛を齧りつづけたのである。無法者、非人情者、どこにも「ケアのこころ」などいっぺんもない。ただの無法無頼無礼な若者にすぎなかった。

ただし、七十三歳の今に至るまで、正月に神棚に酒を備えたことも飲んだこともない。もつとも今では一年中

「酒なし正月」。一滴も酒を飲まない生活がつづいているが。

「たたり」というもののものふかさを私はかんじる。

## 冬の星座

母鎌田フミヨは平成十九（二〇〇七）年二月二十六日午後三時三十五分、徳島県阿南市の共栄病院で死んだ。行年八十二歳。死因は膵臓癌。体調が思わしくないので検査したところ、膵臓癌が見つかり、ちょうど一ヶ月後に死去した。

母が死ぬ一週間前、仕事で徳島に行くことになった。一泊二日の滞在予定で、徳島市内のホテルを取ることになってしたが、それを断って、一夜、母の病室に泊まることにした。

近くの阿南市羽ノ浦町には姉家族が住んでいる。姉の車に乗って、共栄病院を訪ねた。妻（旧姓山岸左紀子）も合流して、その夜母と面会してくれ、ほどなくしてその日の内に埼玉県大宮の実家に帰った。

一人だけ残り、一夜を母と過ごした。母のベッドの近くに仮眠できる簡易ベッドを持ち込み、横になった。荒い息を吐き、黄疸の症状が出て、苦しそうであったが、朝起きると、逆に私を気遣って言葉をかけてくれた。「忙しい時によく来てくれたの。眠れたけ？」

「うん。大丈夫だよ。来れてよかったよ。」

その前の夜、母は、姉や妻や私を前にして、別れの言葉を吐き出すかのように言った。「いよいよじゃ。」

それは、死を覚悟した言葉で、なぜか武士が戦場に出ていく前に言う言葉のような気がした。母はサムライなのか？

晩年の母は、桑野町の山路一七から光源寺四十三に引越して兄家族とともにおだやかに「いんきよ」で暮らしていた。兄家族が住む母屋ではなく、短い橋でつないだ独立した二階建ての家屋だったから、気兼ねせず自分のペースで生活をいとなめただろう。

時に畑を耕して作物をつくり、山に行つて蜜柑や葡萄などを取つてちよくちよく私たちに送つてくれるのだった。

そして、周りに何度か言っていたそうだ。「いまがいちばんしあわせじゃ。」

姉と妻と母と私の四人の病室にいた時、私は心の中で「ありがとうね。」と繰り返し返していたが、姉の前でも妻の前でもなぜか気後れしてしまつて直接母に『ありがとうね。ぼくをうんでくれて。』とすることができなかつた。

大学生のある冬の日、母から荷物が届いた。いつものように、お米や野菜やお菓子のほかに、幼い字の鉛筆書きで書かれた手紙と仕送りのお金が入っていた。

その手紙に、つぎの一文があつた。

「人に笑われない、立派な人間になってください。」

そのことばは、私の肺腑をつらぬいた。

しかし、私は同意できなかった。むりだよ、かあさん、おれには。そして、覚悟した。

「ぼくは、人に笑われるリツパなニンゲンになる！」

以来、そのことばを自分への戒めとして生きてきた。

翌日、仕事を終えて、徳島空港から羽田空港まで飛び、そこから大宮に帰った。東京の夜景が涙ににじんで見えた。飛行機の中で私は「かあさん、ありがとう。ありがとう。ありがとう。」とひたすら呪文のように唱え続けた。

羽田空港について、姉に電話した。「おかあさんに『ありがとう』と言っというて。」と。

自分では言うことができず、姉に言わせた卑怯な自分。カマタトージよ、自分で言えよ、それくらい！

だが、言えなかった。

大宮の妻の実家への家路を辿り、櫛引氷川神社に立ち寄り、祈りを捧げた。

見上げると、冬の星座、オリオンの三ツ星が耀いていた。かあさん、ありがとう。ぼくは、かあさんの子でよかったですよ。

それからちょうど一週間後母が死んだ。桑野町の母と兄たちの家で行なわれた葬儀の最後の親族挨拶で、私は叫ぶように何度も泣きながら、「おかあさん、ありがとう。ありがとう。ありがとう！」と叫んでいた。

最後の最後まで素直でない、世間体をまったく気にしない困らせた息子だったね、かあさん。

とうさん、はじめて手紙を書くよ。ぼくもね、あと一年半であなたのいる世界に往くとおもうよ。だから、この肉体をもって、この世、現世にあるあいだに、手紙で真実を話しておきます。

とうさん、あなたは、一九六六年三月十七日に死にました。オートバイ事故で。桑野川のほとりの大地橋の手前。

翌朝の徳島新聞の記事に、あなたの死はこう書かれました。

「酔って、転んで、死ぬ。」

三行。あなたの人生は、徳島新聞の記事、たった三行でまとめられてしまったんですよ。

ぼくはね、くやしかったよ。そんなもんじゃないよ、父の死は！

と、ずっと、ずっと思いつづけてきました。

もちろん、徳島新聞にも、それを書いた記者にも、何の恨みもつらみもないけど、父の死はそんな簡単なもんじゃない！

と、ぼくは大声で叫びたかったんだ。それを読んだとき。

でも、その時、そんな声を上げなかった。上げても、誰もわかつちやくれない、と思っていたから。

ぼくは泣かなかった。あなたの死が悲しくなかつた。辛くなかつた。

ただただ、悔しかつたんだ。悔しかつたんだ。悔しかつたんだよ。

とうさん、あなたの人生は、「酔って、転んで、死ぬ。」なんてことで、簡単に片づけられるような人生じゃないよ。

すごい人生をあなたは歩んできた。ぼくは、ずっとそう思っているし、いまもそうおもっています。ほんと、です。うそはつけません。ぼくのたましいのこえだから。

あなたの何が凄いかつて？ まずそれは、生まれて間もなく、あなたのおかあさんの田中リキ（ぼくにとって  
は祖母）が、六男の末っ子のあなたを抱いたまま死んでいた、ということから始まります。

乳飲み子だったあなたには、おそらく、幼なすぎて、母を喪った悲しみの感情はなかつたでしょう。

でもね、本能的に母のぬくもりと乳房を求めて吸いつこうとしたあなたの自然の欲求に、冷たくなつた死体で如何なる反応もしなかつた母の遺体と向き合つたあなたは、そのとき、ただただ泣くしかなかつたでしょう。大声で母を求めて泣いたでしょう。母のぬくもりを、お乳を求めて、泣きに泣いたはずだ。

そのことをおもうと、ぼくもいつも泣けてくるんです。あなたの生まれながらのかなしみがぼくのむねをいっぱいにして、かなしくてかなしくて、いつも泣いてしまうんですよ。生まれながらにして、こんな哀しみを背負い込んだあなたとともに、ぼくはいっしょに泣くだけ。

ぼくにできるのは、それしかありません。

だって、あなたのおかあさんを取り返すことはできないんですから。

リキさんの名前を何べん呼んでもリキさんは帰ってこないんですから。

あきらめるほかありません。その運命を、それとして受け入れるほかありません。

あなたの父田中嘉吉（ぼくにとっては祖父）もあなたが子どものころに死んだと聞いています。

とうさん、末っ子のあなたは、実の父母に育てられず、二十歳年上で桑野村村長を務めた長兄の田中正一（ぼくにとっては伯父）を父代わりにして育ったのでした。

その話も、あなたからも、母からも、周りの親戚からも何度も聞きました。

そして、そのことを聞きたびに、何とも言えないあなたの孤独と孤愁をかんじていました。あなたは、とてもかなしかったはずだ。物心ついた頃から。

でも、どうすることもできませんね、とうさん。

だが、天はあなたに優れた能力を与えた。二十歳頃、満州帝国の日本軍の知能テストで最優秀となり、満鉄総裁に一人呼ばれて褒められた、というのですから。

ぼくは断言します。あなたは東京帝国大学にも、京都帝国大学にも、大阪帝国大学にも入ることのできるほどの知的能力を持っていた、と。

でも、あなたの知性がそのような機会を持つことはなかった。

それをぼくはかなしみます。

兄の田中正一は、桑野村の村長であったとしても、自分の実の子を育てなければなりません。彼は長男を一人大学に進学させました。長男の田中勇（ぼくにとっては従兄）は高知大学に進んで伊予銀行の真面目な銀行員になりました。

それが当時の子だくさんの家庭でできる精一杯のことであつたでしょう。

でも、あなたは、その田中勇よりずっと年上。たぶん二十歳以上年上だし、戦前のことであつたから、如何に優秀で、桑野尋常小学校や桑野尋常高等小学校でよく勉強ができたとしても、あなたに旧制富岡中学に進学できる経済的余裕はなかつた。

教育の機会に恵まれず、進みたかつた進路を絶たれたあなたは、次善の策として、日本帝国陸軍に志願兵として入隊し、その中で教育の機会を探したのでした。

そして陸軍の航空兵になるために、宇都宮陸軍飛行学校に入ります。それがどれほど難しいことであつたのか、ぼくにはよくわかりません。

ですが、あなたは必死で学ぶ機会を求め、何とか、宇都宮陸軍飛行学校に潜り込むことができたのです。そして名取の飛行学校で一年間の座学学習と飛行実地訓練を受けて卒業して満州帝国に渡り、そこで兵役につき、さらなる訓練をうけながら、黒龍江省のハルピンの実戦部隊（陸軍第十四師団）に配属された。そして、伍長、曹長、軍曹と、着実に軍位（階位）を上げていった。

その途中で、陸軍の知能テストで一番となり、あなたは満鉄総裁に認められ、褒められたということなのでしよう。

それをあなたの口から直接聞いたことはありません。

なぜそれをあなたはわたしたち四人きょうだいの中で、姉にだけもらしたのでしょうか？ ぼくにも直接言うておいてほしかったな。

それはともかく、あなたは挫折します。病気で。

肺尖カタルにかかり、陸軍病院で治療を受けました。その時の同病であったらう同期生？の若者との写真がぼくの手元にあり、その頃のあなたのすがたを確認することができます。

しかし、最終的に、あなたは軍にとどまることができず、やむなく除隊し、郷里に帰って静かな穏やかな生活に戻ります。

けれども、あなたの心の中は穏やかでも平安でもなかったでしょう。焦り、虚しさ、向学心、国民として務めを果たしたいという単純な義勇心に張り裂けそうだったでしょう。しかし、二度とそのような道に戻ることはあなたにはなかったのです。

あなたは挫折し、道を失って何をすることもなかった頃に、母鎌田フミヨと結婚することになったのでした。母にとってはそれはとても幸せな喜びに満ちたことだったでしょう。

けれども、あなたにとっては、どうだったでしょう？

とうさん、あなたから、そのことを聞く機会はありませんでした。

あなたのよく漏らしていた言葉を何度か母を通して聞きました。

「小さな掘立小屋でもいい、自分の家が欲しい。」

養子であったあなたは、やっぱり、肩身の狭い思いを折に触れて感じていたのでしょうか。よく理解できます。でも、そのあなたのささやかな願いが叶えられることはなかった。

ぼくはいつも思っていました。あなたが郷里の阿南市桑野町で生涯を生きていくならば、あなたはまず阿南市の市議員になって、その実績を踏まえて、徳島県の県議会議員になったらよかった、と。

親分肌の友人思いで、面倒見がよく、情の厚い、しかも知的能力もしっかりあるあなたにはとても向いた仕事になったでしょう。そして地元に貢献でき、戦友にも少しは責務を果たすことができたでしょう。

しかし、その前に、無念にも、「酔って、転んで、死」んだ。

ぼくは、くやしいです。あなたの可能性を思うと。

でもね、とうさん、あなたは、あなたが死んで以来、ずっとぼくの中に生きつづけているのですよ。これは、「霊的眞実」、です。

でも、これを証明する何物もありません。ただぼくが、そのような意識や自覚をもって何十年も「鎌田東二」をしてきたことは事実です。

もちろん表向きは鎌田東二で、奥には父鎌田義美がいて、さらにその奥にはさらに何者かがいた、という層構造になっています。

宮沢賢治なら、こう言うでしょう。

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

(『春と修羅』序)

あなたは死んでぼくの中に住み着いた。「透明な幽霊の複合体」として。

ぼくは半分が田中・鎌田義美で、半分が鎌田東二、でした。あなたが「酔って、転んで、死」んだ日から、ずつとずつとそうおもって、ぼくは七十三歳の今日まで生きてきたんですよ。

なので、ぼくのやっているすべての行為の半分はあなたの責任ですよ！  
と、ここでちよつとだけ肩の荷を下ろして責任転嫁しておきますね。(笑)

あなたは死んでぼくをつきうごかしてきたのです。

ぼくはあなたの「遺志」を生きてきたのです。

間違ありません。あなたの息子がそう言ってるんですから。

でもねえ。このような「霊的真相」は、おなじきようだいでよくわからないとおもいますよ。ぼくに一番親しく理解の深い姉でもよくわからないでしょう、この感覚は。

だからぼくの半分は田中・鎌田義美（義巳）という意味では、間違いなく、あなたが死んで以来、ぼくは二重人格者、です。

それが、ぼくがあなたが死んでいっさい涙も出ず、悲しくもなかった真の理由です。  
あなたは、死んでいないのですから。ぼくの中で生きつづけてきたのですから。今日の今日まで。

さて、とうさん、いきなりですが、ここから、ほぼ誰にも話したことのない（これまで三人にだけ伝えたが、ドン引きされた）ぼくのもう一つ深い層の「霊的真相」を告白します。

ぼくももうあと一年半の余命ですから。さ来年の誕生日の三月二十日に死のうと思っている我が身ですから。思いを遺さず、死んで逝きますね。

ぼくの半分がとうさん、あなたであることは、すでにお話ししました。

では、残る半分のぼくって何なんでしょう？

そのぼくの「氏素性」をこれから話しますね。たぶん、奇想天外すぎてあなたには理解できない世界になるでしょう。ここからの話は「ものがたり」や「仮説」として受け取ってくれた方が違和感がないとおもいます。

さてぼくの「ぼく」の本体は宇宙からやってきました。スターチャイルド（星童）のように。

でもその「星」がどこの星かはわかりません。オリオンとか、リゲルとか、シリウスとかもわかりません。

なので、ぼくはそれを取りあえず「オニの星」と呼んできました。「オニ星」から水の惑星地球へ墜落しました。そしてここで「オニ」から「ニンゲン」になったのです。「ニンゲン」として何度か転生し、生まれ変わりを繰り返した。ケルトの聖地セーヌの近くにいたこともありました。韓国の港町釜山にいたことも、モンゴルの草原にいたことも。

そしてついにこの列島日本に流れ着いたのです。くぐくぐと回り道をせず直截に申せば、じつは、ぼくはヤマトタケルの生まれ変わりです。

誰も信じてくれないけど仕方ありません。

一九九七年頃からそのように思っただけ三十年生きてきました。

ぼくはこれまで「スサノヲの子分」を自称してきましたが、ヤマトタケルこそ「スサノヲの一の子分」だったのです。ですので、暗示的には、一九九七年からずっとそう言いつづけてきた。

だからといって、何も特別のことも、格別なことも、特権ありません。むしろ、それよりも「負債」が大きくなるだけです。なにしろ、ヤマトタケルこそ、剣の力をないがしろにして、国つ神のすがたとちからをあなどり、伊吹山の神の「崇り」を受けて死に至った張本人ですからね。そして最後は「始祖鳥」ではなく「白鳥」になって西の空に飛んでいき、最後に天（宇宙）に帰っていったのですから。

このような神話と自己とを安易に結び付けることは、傲慢きわまりない、あるいは自意識や特権意識丸出しの

愚かしくも危険なふるまいでしょうね。世間体においても、世の常識においても。そうおもうこともしばしばです。かなり抑制をかけてきましたが、もう最期ですので肚を括って素直に言いました。理解してもらいたいとはまったくおもいません。しかたありません。

ぼくは高校三年生の一九六八年に丸山明宏著『紫の履歴書』を読んで、ほんとうに、ほんとうにしんそこ感動し、矢も楯もたまらず、原稿用紙四十枚ほどの「丸山明宏論」を書きました。一九六八年十二月のことです。

その丸山明宏が自分は天草四郎時貞の生まれ変わりと自白していました。それもほんとうのことだと思いました。

そのような丸山（美輪）明宏⇨天草四郎という複霊の生まれ変わりをずっと信じてきました。そして、あるときにはつきりと自分はヤマトタケルの生まれ変わりだと自覚したのです。

一九八六年二月二日、ぼくは天河大辨財天社の特殊神事「鬼の宿」に参列しました。そこで「木の花会」主宰の霊能者の露木幸枝さんと会い、翌日から行動を共にすることになりました。それは露木さんが亡くなるまでつづきました。たぶん、二年間くらい。

一九八六年三月、当時名古屋大学文学部哲学科助教授で、占星術師で、特にプラトンなどの神秘主義研究者で、神秘家でもあった大沼忠弘さんと三人で、岩手県の岩手山や花巻の宮沢賢治のお墓などをめぐりました。その時のことは、鎌田東二・松澤正博対談集『魂のネットワーキング——日本精神史の深域』（泰流社、一九八六年一月一日刊）の中に書いてあります。そのとき、宮沢賢治の花巻農学校の教え子の照井謹次郎さんにも会ったことも話しています。

そんなことをいっしょにやってきた露木幸枝さんからも「あなたはヤマトタケルの生まれ変わりです。」と何度も言われました。でもそのころはとんだ戯言だとまったく信じていませんでしたよ。

けれども、その十年後、猿田彦神社で「おひらきまつり」をやったころ、何度も伊勢に通う中で、一九九七年に伊勢の齋宮跡地に初めて立ったときにはつきりと自覚したのです。ヤマトヒメから天の叢雲のつるぎを手渡されたヤマトタケルだと。

そして、翌一九九八年、喜納昌吉さんからの呼びかけで「神戸からの祈りー満月祭コンサート」を「一九九八年八月八日」に行なった時、連祭「東京おひらきまつり」(平成十【一九九八】年十月十日、鎌倉大仏前で実施)事務局長の大変な役目を背負ってくれた池田喜美子さん(「東京おひらきまつり」実行委員長の池田雅之早稲田大学社会科学部教授のパートナー)にそのことを話してしまったのでした。

神戸から東京に帰る新幹線の中で、富士山のふもとを通過している時に。

たぶん、池田喜美子さんがぼくに強い違和感を感じ、この人とはもう付き合いきれないと思ったのはその時だったのではないのでしょうか? その後、あれほど親しく家族ぐるみの付き合いをしていた池田雅之さんや喜美子さんとどんだん疎遠になっていったから。

今となっては、しようがないよなあ、と思うだけです。むつかしいですね。こういうことを話するとどんな波紋や反応や反感が広がっていくかというのは。常識の、目に見える現実の枠外のじつに不確かな証明不能証拠不十分すぎる情報ですから。

なのでね、とうさん、あなたも息子からこんなことを今さら言われても戸惑うばかりかもしれませぬ。ごめん

なさい。ぼくも後がないので、この際はつきり言うておきます。

ぼくが一九八四年四月四日、初めて天河大辨財神社に行ったたった一つの理由は、霊能者太田千寿さんに降りてきた三島由紀夫の「霊界通信」を審神者（さにわ）するためでした。

三島由紀夫は霊界から強く強く訴えていました。「日本を『まほろば』にしてくれ！」と。それが唯一の日本再生の道だ、と。

そのメッセージをぼくは四十年生きてきました。ぼくは三島文学は嫌いですが（ただし『金閣寺』だけはとても好きです）、この「まほろばメッセージ」は三島からの「霊的真実」と受け止めてこの四十年生きてきました。ではどうやったら日本を「まほろば」の国にできるのか？ 一つの答えは日本を「芸術立国」、歌の国、詩の国、美の国、アートの国にすることです。

こうして、神道ソングライターとしてのファーストアルバム『この星の光に魅かれて』（二〇〇一年リリース）のラスト第十五番目の曲は「やまとはくにのまほろば」となりました。

やまとはくにのまほろば たたなづく青垣 やまごもれるやまとし うるはし

を二回繰り返し、ぼくのギター伴奏だけで素朴に歌っています。

さらにぼくは、たぶん無謀にも、『神道とは何か——自然の霊性を感じて生きる』（PHP新書、二〇〇〇年）の「あとがき」で、ヤマトタケルのこの「国徳びの歌」を国歌にすべきだと主張していますが、賛成してくれた

人は一人もいません。みな反対、でした。

ともかく、ぼくが「霊的真相」（『古事記』も「霊的真相」の書だと思っています）だとおもってきたことは、ほぼ一〇〇%の人に受け入れられることはありません。

三島由紀夫に戻ります。

三島由紀夫は、自分はヤマトタケルの生まれ変わりだと思っていたに違いありません。丸山明宏、美輪明宏さんからそう言われたこともあったんじゃないかしら。

三島はヤマトタケルの生まれ変わりという自覚を持っていたからこそ、あの衝撃作『英霊の聲』を書けたのです。

この問題作の中で、三島は繰り返し昭和天皇に呪詛を投げつけ（戦前であれば間違いなく「不敬罪」で逮捕されましたね）、激しく激しく弾劾します。

などですめろぎは ひととなりたまひし

それは、ヤマトタケルが父景行天皇に放った恨みと哀しみと思慕の思いの混合体と同じ感情です。ヤマトタケルは父を問い詰めた。しかし、父を思慕してもいた。この哀しいアンビバレンツ。

三島は昭和天皇を父として思慕した。しかし、昭和天皇に冷たく突き放された。二二六事件の青年将校たちや

特攻隊の少年兵たちと同じように。

だからこそ、その「父」を激しく弾劾したのです。最後は自衛隊の市ヶ谷駐屯地まで行って。檄文を撒き散らして。誰にも理解されず。それどころか、非難轟轟の中で腹を切った。

ヤマトタケル三島由紀夫よ！ あなたの無念をぼくは受け継いだよ、しっかりと。

しかし、あなたの道とぼくの道はちがう。ぼくが求めているのは、父への弾劾ではありません。父との和解であり、和恩（恩に和む）、です。

なぜなら、わが父田中・鎌田義美（義巳）はぼくの中で半身となって、十四歳の終わりから六十年も息子のぼくとともに生きつづけてきたのですから。

もう一人、ヤマトタケルの生まれ変わりを知っています。梅原猛、です。

三島由紀夫は大正十四（一九二五）一月十四日に東京四谷に生まれました。母鎌田フミヨが生まれて四日後のことです。

そのおよそ二ヶ月後の大正十四年三月二十日に梅原猛は仙台に生まれました。梅原猛と三島由紀夫は同級生で、ともにヤマトタケルの生まれ変わりでした。ちなみにぼくはその梅原猛と誕生日が同じです。ついでに血液型も。B型。

三島由紀夫は『文化防衛論』でヤマトタケルを論じ、日本文化の原型的存在と位置づけています。文武両道の。幼少期祖母に溺愛された虚弱児童であった三島由紀夫は剣道五段を持っていたようですが、実力は初段にも達していないと言われています。

とうさん、あなたは剣道三段。祖父鎌田藤七・東助は剣道五段錬士。そして兄もぼくも剣道三段でした。ぼくは結構強かったんですよ。中学一年の時に阿南市の新人戦で準優勝をしたくらいには。でも、そのあと、生意氣だと剣道部の主将に桑野中学校裏の桑野川沿いの神社に呼び出されて殴られたので、殴り返したら、即退部となりました。

短気でしたねえ、若い頃のぼくは。

ぼくは三島由紀夫の剣道の腕前はまったく信用しないけど、彼がヤマトタケルの生まれ変わりであったことは確信しています。そして同様に、梅原猛も。

梅原猛には、市川猿之助の当たり役スーパー歌舞伎の『ヤマトタケル』（新潮社、一九八六年）があります。晩年梅原猛は「人類の哲学」を主張し、アニミズムや「山川草木悉皆成仏」思想を称揚しましたが、それこそ梅原猛の「まほろば」論でした。

二人とも、ヤマトタケルの生まれ変わりとして、まほろばメッセージをつらぬこうとしたのです。彼らなりに。ぼくもそうなんですよ。その意味では、先行する同学生三島由紀夫と梅原猛二人の衣鉢を受け継いでいると言えます。

でもね、彼らにはこわいこわい「オニ」がいません。深淵で不可解な「オニ星」がありません。中世の殺人鬼

や古代の怨霊はいても。「オニ」は排外者、異星者だったのです。

じつに長い手紙となりました。もうこれ以上話しておきたいことは残っていません。

とうさん、ありがとう。六十年間もぼくとともにいてくれて。

今日はあなたとの別れの日になります。今日からぼくは鎌田義美＋鎌田東二ではなく、鎌田東二・鎌田東二、「ぼくのぼく」を生きていきます。死ぬまで。そしてそのあとも。

言い残したことはありません。とうさん、全部言っちゃったよ。あとは肉体の死までたんたんとして生きてできることをするだけ。

それがぼくの『文化防衛論』ならぬ『文化創造論』であり、「災害学・災害社会支援者研修センター」の最期の仕事です。

これまでどこか自分の元星の「極星」を探して生きてきたけど、それは夜空の星でもよだかの星でもありませんでした。

いやちよつとだけ、「よだかの星」に近いかな？

じつは、よくよくその根っこをひもといてみれば、ひとりひとり、ひとつひとつ、それぞれがみな「極星」だ

ったのです。灯台下暗し。

それが『この星の光に魅かれて』この水の惑星にやってきたオニっ子・カマタトージの結論、「ぼくのまほろば」論、です。

白馬に跨ったその人は異様におそろしかった。上から厳しい視線でまなざされると、震えあがるようなこわさがあった。

後年、宗教哲学や民俗学を専攻するようになって、友人たちが「憑き物」論や「異人」論などの刺激的な話題作をつぎつぎと出した。

だが、それらを読んでも、いつかそこらほうごかなかった。おもしろくなく、ふしぎでもなく、解明にもなっていないとおもわれた。そこにあつたのは、流行の理論にのっとつた著者の学術的に見える解釈と理論化にすぎなかった。そこには、「憑き物」や「異人」の神秘も威厳も畏怖もなかった。

落胆した私は民俗学や人類学に対する興味を失いかけた。

というのも、わが家は犬神憑きの金藤と呼ばれる家と親戚だったので、「犬神筋」のことを子どもころから聞いて知っていたし、そこにおける畏怖と神秘をまざまざと感じたことがあつたからだ。

金藤が神社の当屋を担う独自の資格と伝承と呪法を持っていることも聞いて知っていた。その金藤の当主は大柄な赤ら顔の太った人だった。

普段は温厚そうに、祭りや法事や集会の折にはニコニコと陽気な笑みを絶やさなかつたように記憶するが、し

かし、祭りの当日、特別の白馬を仕立てて跨って、こちらを見通す眼差しは錐のように鋭く深く深遠なものを感じさせた。

生半可な他者を絶対受け付けない厳しきと排他性。絶対隔絶。

そんな深遠な距離を感じさせる眼差しと威厳のある振舞いで我々を睥睨し、突き放していた。

犬神筋が不思議な呪法を心得ている、という怖れを伴う噂はみな知るころだった。が、それを詮索する者は誰もいなかった。近づけば、「崇り」や「触り」があり、神罰が下ると思っていたからだ。

迷信と片付けるなら、それで終わりかもしれないが、不思議なことが五万とあり、多種多様に起こる吾らの世界であってみれば、そのマジカルなカリスマ的ヌミのーゼ（畏怖と魅惑）は絶対的な支配力を持って人びとを行動制限させた。遠慮というか、奉るというか、近づきすぎない（「触らぬ神に祟りなし」というか。

白馬の人は、蒼穹を背景に、どこまでも雪をいただいたヒマラヤの絶対孤峰のような孤高の威厳を発し、他を圧していた。

その姿をちらちらと垣間見ながら、私はその呪力を知りたい、身に付けたい、盗みたい、としんそこおもったものだ。それを身に付けると、天下無敵になるような気がした。じっさい、身に付けたところで、なんてことはないだろうが。

しかし、子どもの私には「神秘」であり、その神秘のリアリティ、実在のプレゼンスは圧倒的だった。

けれども、自称民俗学者たちの書いた「憑き物」論や「異人」論や「マージナル」理論には、その畏怖し魅惑

するヌミノーゼの神秘をいっさい感じることがなかった。ぼくが知りたいのは、そんな中途半端で大雑把な分類や整理や理論的解釈や説明ではないんだよ。ぼくが知りたいのは「神秘」の出処、その根源、由緒、起り、なんだよ。

だが、書かれた書物にその手がかりはなかった。

こうして、「犬神筋」の問いは、私の中で、何一つ解決するものも、深化するものもなかった。

\*

\*

\*

四十歳になってまもなくのある日、法要で徳島県阿南市桑野町の郷里に戻った。これを絶好の機会と、二十一番札所の鶴林寺から二十二番番札所の太龍寺まで、山の遍路道一人で歩くことにした。

阿南市羽ノ浦町に住む姉に車で鶴林寺まで送ってもらい、一緒に参拝した。般若心経と真言を唱え、石笛と龍笛と法螺貝のわが三種の神器を奉奏し、ご詠歌を詠った。

そして、姉に作ってもらったおにぎり一個をリュックに入れて、出発した、

秋も深まった山中は紅葉と紅葉と緑でハレーションを起こすかのような眩暈的な道行きを用意してくれた。

その風景が異様に鮮やかで、美しく、吸い込まれるように足早になって、ときどき、実際に走るように歩いていた。

だいぶ歩いたと思ったが、時計を見ると時間はそれほど経っていない。一時間もかからないで峠を越えた。

ふと横を見ると、谷があつて、水のせせらぎが聴こえた。

冷たい谷川の水で顔でも洗おうと細い谷道をけっこう下りた。そして、清らかな谷川の河原に屈んで水を汲もうとした時、目の前数メートルのところに、私と同じように谷川に足を入れて水を汲もうとしている男の後ろ姿が見えた。

こんなところに人がいたんだ。お遍路さんだろうか？

よく見ると、腰に獣皮の腰巻のようなものを巻いていた。修験者なのか？ とふと思った瞬間、その男が振り返った。

それを見て動揺した私は思わず、よろけそうになり、谷川で両足を踏ん張った。

その顔は犬、頭髮はザンバラ、首には不思議なエナメルのような襟のようなものをきっちり付けていて鋭く反射する光沢を放っていた。

その犬の眼は金色で、こちらを見ている眼付は威厳に満ち、「近づくな！ 危ないぞ！ 気を付けろ！」と警告を発しているように思えた。

私はその眼に釘付けになりながら、後ずさりして河原に戻り、崖の山道を走って駆け上がり、いっさんに進行方向に向かって走りに走った。

走っているうちに、自分はどこを走っているか、どこに向かっているかもわからなくなった。おれは、弘法大師空海が修業した太龍寺に行くんだ、と心の中で言い聞かせたが、その道が太龍寺に通じる道かどうかもわからなかった。

やみくもに、そこにある道を走っていたのだ。何時間走りつづけたか、とつぷりと日が暮れていた。

その夜、山中で、私はもう一度、洞窟の中で犬顔男と出会うことになるのだが、そして、そのひとつというべきか、いぬというべきか、いふというべきか、その人・犬・畏怖の混然となった存在から巻物一巻を授かった。

だが、その内容を今後三十三年絶対に人に漏らしてはいけない、と固く警告された。漏らせば命はない、と。

けれども、今、三十三年が経ち、私は七十三歳となり、「主治医に余命二年」と宣告された、脳に複数の多発性転移を持つステージⅣのがん患者で、毎日京都大学附属病院で全脳放射線照射の治療を受けている身となった。

死ぬ前に、その内容を公開する決意をした。

## 犬神星傳

犬の人は、蠟燭を点した洞窟の中で巻物を披き、朗々とした声で唱えた。

「神道しんじやくに書籍無し。天地をもつて書籍とし、日月をもつて証明となす。」

「それ神道は、天地未だ分かれざる時、日月星辰未だ顕れず、木火土金水の五行も未だ備はらず、ゆえに虚空界の相尽き、善悪の法量涉らず、寂然無為円満虚無靈性を以つて神道の玄旨と為す。

円満虚無靈性は国常立ちの尊の名なり。かの円満虚無靈性は、一切の衆生の色心不二の妙体を顕す。それ神道は混沌の始めを守り、万法の当体を悟る。仏法は万法の当体を守り、本来の理を悟る。

それ神道は、円満虚無靈性を守り、生死の二法に涉らず。ゆえに、神道の二字を釈きて、神は神に超ゆる神なり、道は道を超ゆる道なり。それ神は神を超ゆる神にして道は自性の神光なり。

ただ円満虚無靈性を神と云ひ、言語道断の道を道と云ふ。これすなはち神道の眼目なり。」

繰り返し朗唱される言葉、「書籍」と「円満虚無靈性」が脳裏に残った。

蠟燭の灯がゆらゆらとゆらぎ、犬の人のシルエットが影絵のように洞内にたゆたった。

落ちて着いてきた私は、これらの言葉が吉田神道の創始者の『神代上下抄』やその先祖の卜部兼友の『神道秘録』の中の一節であることを思い出した。犬の人は、吉田（卜部）神道と関係があるのだろうか？ どのような？

不審に思いながらも、つぎの言葉を待った。

「心は即ち神明の舎、形は天地と同根たり。」

これも、吉田兼俱の『神道大意』の中の一節であることはすぐわかった。じつは、私は恩師に命じられて、「大元」思想という神道思想の系譜を神社本庁関連の神道神学や神道倫理の研究会で発表させられたことがあるのだが、その時に掻き集めて来て読んだ資料の一節にこの言葉があり、たいへん印象に残っていたのだ。

私の恩師は、戦後「神道神学」を最初に提唱し打ち建てた國學院大學教授で、京都府大江山町の元伊勢皇大神社内宮の宮司を務めていた。この人に主査をお願いし、宗教学者の戸田義雄元國學院大學教授に副査をお願いして、私は言霊思想を核とする「宗教言語の研究」と題する修士論文を書き上げ、その後博士課程に進んだが、母校では私の言霊研究は評判が悪く、『言霊思想の比較宗教学的的研究』と題して、二〇〇〇年、四十九歳の時に、筑波大学に学位請求論文（博士論文）を提出し、「博士（文学）」の学位を得た。少し前までは「文学博士」という称号だったものだ。

自分の知識の中で、犬の人の言っていることが理解されてきて、次第に落ち着いて、その人の様子を観察することができた。

確かに、髪はザンバラ髪、腰に獣皮を巻いているから、修験者に間違いないかった。徳島県内には剣山と呼ばれる四国山脈の真ん中より少し東側に、西の石鎚山と並び称される修験の山があるので、修験者が遍路道を歩いている、山中の谷川で水を飲んでいてもおかしくはなかったのだ。

修験道では、山岳跋涉の際の座具ともなるこの獣皮のことを「引敷（ひっしき）」と呼ぶ。奈良県吉野山中の天  
河大辨財天社でよく吉野熊野修験者のそんな姿や山伏問答の儀礼を毎年のように見てきたので、落ち着いてその  
人の様子を見れば、滑稽なほど普通の修験者に見えたのだった。

驚愕して、動顛し、山中をひた走りに走って逃走する必要などなかったのだ。

私は後から追いかけてきたその人に声をかけられて、太龍寺の近くの洞窟に招き入れられたのだった。

だが、その後につづく言葉に私は驚愕と畏怖を感じてしまったのだった。

その人は言った。

「わしはおまえを子どものころからずっと見守ってきた。おまえは熱に浮かされたように、よく『鬼がいる！』  
とか『鬼が見える！』とか『怖い！』とかと泣き叫んで、両親をてこずらせていたのう。」

笑いながら、その人は言った。

なぜこの男は、わが家の者しか知らないはずのこのことを知っているのだろうか？

「おまえの父も母も、そんなおまえを心配しとった。この子はちよつとおかしいんじゃないか、と。

たしかに、へその緒を三巻き首に巻いて生まれてきたからのう。脳に損傷があってもおかしくはない。おまえ  
の脳は傷ついているのかもしれない。

だかのう。

それゆえに、おまえには違う世界の、異次元のモノを観たり、聴いたりする能力が芽生えたのじゃ。まったく、『捨てる神あれば、拾う神あり』じゃのう。」

さらに不審感を強めながら、つぎのことばを黙って待っていた。

「これから言うことは、他言無用じゃ。絶対、他人に言うてはならん。巻物も絶対見せてはいかん。それは、おまえだけのものとして、しまっておけ。三十三年間は。

わかるな、その意味が。」

「三十三」が観音菩薩の化身の数であることは『法華経』観世音菩薩普門品第二十五を読んで知っていた私は頷いた。

この人は私が観音様を深く尊崇してきたことを知っているのだろうか？

よく聴け！ 三十三年後、世界は滅びる。人類は絶滅する。

一挙にはないが、大破局が訪れる。

その時、おまえは観音菩薩の使いとしてなすべき使命がある。一人でも多くの人といのちを救い、生きる活力を与えるのだ。

西暦二〇二五年、「五六七（みろく）」の「み・五」の年の暮れに世界は大破局に見舞われる。その前に備えを

するのだ。破局はまず世界規模の災害となって表れる。ハリケーン、サイクロン、台風、氷河の溶解、大洪水、大地震、土砂崩れ、大崩落、大噴火の同時多発で世界中が大混乱する。大戦争と地域紛争が各地で起こり、人々は疑心暗鬼になり、混乱の極みに陥る。

まさに、日本神話の「天岩戸籠り（隠れ）」となった時に、よろずの「わざわい」がつきからつきへと出て来て、神々がパニックとなったものがたりの二の舞じゃ。

この原因を作ったのは、『古事記』では、スサノヲとされるが、これからこの子孫が、天剣のシリウス剣と、人剣のプロキオン剣と、地剣のペテルギウス剣の三種のつるぎを見出して、その混乱を鎮めねばならん。

おまえは共にその手伝いをするのじゃ。

おまえの生まれ育った阿波の国は、じつは古代の邪馬台国じゃった。そこに三種の剣が隠されているのじゃ。劍山の三方向にな。

東の天剣は伊島に、西の地剣は土柱に、人剣は日和佐に。

おまえはそれを探し出して、シリウスとプロキオンとペテルギウスのエネルギーとメッセージを受け取らねばならん。

それを受け取れなければ、おまえはおまえの使命を果たすことはできん。これまでの苦労も水の泡じゃ。

まあ、阿波の男じゃけん、泡のように消えてもしょうがないがのう。」

その人は、何がそんなにかおしいのかと思うほど激しく呵々大笑して、忽然と消えた。

呆気にとられたのは、洞内に一人取り残された私である。

なに？

なに？

なんだったんだ、いまのは？

私がシリウスやらプロキオンやらベテルギウスやらの剣を探さなければならぬって？

理解を拒む混乱と無秩序の中で、私の思考回路は停止した。

最初は、神道や仏教や修験道を研究し、滝行や山岳跋涉などのいくらかの修業も重ねてきた私に理解できる文脈だった。

だが、最後の方は、どのような根拠で、どのようなメッセージの文脈で告げられているのかが見えなかった。そして、私に与えられた使命なるものも。

私は自分でも統合失調症かと疑うほど、支離滅裂なところがある。放っておくと、自然のままにしておくと、私の思考にも行動にもまったく論理も理性もなくなる。

子どものころから、そうだった。

それがある時突然の「オニがいる！」とか、「ぼくにはスがあるんじゃない！」という叫びになった。

それを自分なりに解釈し散らしながらこの年までなんとかやってきたが、元の木阿弥に引き戻されたような気がした。

私は自分を信じたことがない。自分がいつもどこか疑わしいと感じてきた。ずれているのだ、すべてが。私には母があれほど気にした「世間」や「世間体」というものがまったく見えない。感じられない。

私の前にあるのは、ただ「宇宙」だけだった。子どものころから。そして、そこからやってきた、というおもいだけが強烈にあった。

私は「宇宙」からやってきた。それが私の処女作『水神傳説』（泰流社、一九八四年一月一日刊）となった。これは創作であり、自己の出自を虚実皮膜に描いたものだと思自負してきた。

だがそれも含めて、一切合切、何が何だかわからなくなった。

孔子は『論語』の中で、「四十にして惑わず」と言っている。私の四十は、「不惑」どころか、「不明」であり「不審」であり「不通」であり「不義」であり「負債」で始まった。

どうしてよいかわからず、宇宙の中で独り児の孤独なぼっち。見捨てられたような、投げ出されたような。道は見えず、目の前には暗黒しかなかった。

金の布地で麗々しく仕立てられていた巻物の題字は、『**天元地元人元犬神星傳**』と達筆の筆書きで書かれていた。呆然とその題字を眺めながら、どこへいくのだ？ おれはおかしいぞ、おかしいぞ、おかしいぞ、凍り付くような不安に襲われた。

## 編集後記

鶴岡賀雄 今号も編集作業は鎌田さんがひとりで行ってくれました。この楽しくも稀有な場所、類い希な文集に、鎌田さんのパワーに呑まれるようにして連なっていられることがうれしいです。寄稿者のみなさんも同じ思いでしょう。鎌田さんの尽きせぬパワーの出所が、若年時からつづく私の大きな関心事なのですが、この「あごら」に、その出所がますます純粹に姿を顕してきていると感じます。日がずいぶん短くなって、暮れるのが早い。今年の冬至（トージ）はいつかしら。一陽来復もまた遠からず。

津城寛文・匡徹（日守麟伍） この第2号も、編集作業は鎌田編集長がすべて行ない、鶴岡さんと津城は、校正で少しお手伝いしたくらいで、ほぼ名前ばかりとなった。内容でやや驚いたのは、勝又さん、野々宮さん、鎌田さん、そして私も、親族や親しい人の死をテーマにして、シンクロしていたことである。柳田国男が『先祖の話』について、先祖が気になる人のために書いた、という意味のことをいつているのを、思い出した。慕わしい人々に、思いが届きますよう祈ります。

鎌田東二 ヘルダーリンの「カミナリ」に撃たれて以来、わが脳髄にも放射線という「カミナリ」が「全脳放射線照射」という治療法で当てられている。それにより、65キロあった体重が、今日測ったら、51・1キロまで落ちていた。55キロを切ったのは、國學院大學の学生であった時以来だから、50年以上前に戻ったということになる。ただし、

体力は激衰。階段を数段登っただけで息切れするし、お風呂から上がった時点でさえ息が上がる。まったく食欲がなく、日々、自然に断食死に近づいているような感じ。学生時分、正味8日間の水も飲まない完全断食したことがあったが、その時にも似ている。

だが、そんな中で、わが脳内は異様に高速回転し、ことばはあふれ出ている。17歳の時の「火山弾」か「反吐」のよう。いよいよ、カマタトージも「最終噴火」して、「死火山」になるのだ！

執筆者紹介

小泉友美（カトリック神学者、作家、フランス・アンジエ在住）

藤守創（ソルボンヌ大学医学哲学博士PhD）藤守式整体施療院院長）

江潔（詩人、足利市立美術館学芸次長）

日守麟伍（歌人、本名：津城寛文・筑波大学名誉教授）

深澤英隆（一橋大学名誉教授・宗教学者）

鶴岡賀雄（東京大学名誉教授・宗教学者）

鎌田東二（京都大学名誉教授・ガン遊詩人）

野々日月泉（僧侶・日本臨床宗教師会理事）

勝又公仁彦（京都芸術大学教授・写真家）

谷口真理子（聖心女子大学大学院文学研究科博士後期課程）

# 超少子・超高齢

医療と宗教のパラダイムシフト

# 社会の日本が

長谷川敏彦 / 鎌田東二

# 未来を開く

日本の総人口は数十年後に一億人を割り、五十歳未満が四〇%にまで

減少し、多死時代を迎える。二十一世紀医療のコアは人口遷移とケアサイクルを支援できる医療システムになる。

医療と宗教の両泰斗が提唱する  
超少子・超高齢社会の新モデル!

発売：集英社 発行：ホーム社

宗教文化に基づいた自然倫理と自然生態意識こそが日本が果たす役割だ。



(任意団体)

# 「災害学・災害社会支援者研修センター」 概要と第Ⅰ期研修受講案内

## < 設立の背景と目的 >

「災害学・災害社会支援者研修センター」は、すでに始まっている激甚災害多発時代を創造的に生き抜いてゆく活力と構想力のある社会支援者・コーディネーターを育成していくための研修およびそのための教育研究ネットワーク機関である。

すでに到来している超少子超高齢社会日本において、本年2024年1月1日に起こった能登地震と、9月21日に起こった能登豪雨被害のダブルパンチは、能登半島の地域社会に大きな打撃を与えた。家を失い、生業も成り立たず、復興に向かう気力を萎えさせ、将来の暮らしのありように多大な先行き不安を与えたために、集落を離れる人が増大している。

この出来事は、日本列島の各地で進行してきた『地方消滅』（増田寛也、中公新書、2014年）が、地震と豪雨の二重被害で加速したことであり、日本国中に同様の傾向と危機がある。

そうした中で、わたしたちは、激甚化する自然災害の中で地域社会を存続させ、その地域特性に沿った形で暮らしの再建と維持を図り、次世代につないでいかなければならない。

そのためにさまざまな試行が必要である。

本センターは、そうした超少子超高齢超激甚災害社会日本において、次の世代にリレーしていくための力強く豊かな智慧と技法をあらゆる組織や権力に縛られずに自由かつ臨機応変に研鑽・研修する機関としてここに設立を発起する。

本センターは目的を達成するために、次の事業を行なう。

- ・ 激甚災害社会の調査研究に基づく対策研究立案（研究部門）～調査研究については「能登学プロジェクト」（小西賢吾京都大学人と社会の未来研究院特定准教授・井川裕賢東北大学災害人文学特定助教・桑野萌金沢星稜大学准教授たち）と連携し、地道で息の長い研究調査に基づく対策立案を検討していく。
- ・ そこで、自主的に活動する人材を育成する（教育部門）～本センターの主要部門となる。
- ・ 諸種の機関や団体・個人と連携しながら災害支援を実施する（実践部門）～受講修了生たちの自主的な実践活動が中心となるが、受講修了生同士の交流とネットワークを絶やさず、年に1回は京都市左京区の「関西セミナーハウス」で合宿交流研修会などフォローアップ研修を定期的におこなう。

## < 役員 >

センター長（代表理事）：鎌田東二（京都大学名誉教授・京都伝統文化の森推進協議会会長）  
副センター長（副代表理事）：今村達弥（精神科医・医療法人ささえあいよろずクリニック院長）  
理事：加藤眞三（慶應義塾大学名誉教授・MOA高輪クリニック院長・内科医）  
長谷川敏彦（元日本医科大学教授・一般社団法人未来医療研究機構代表理事・医師）  
佐藤伸彦（ものがたりの街理事長・医師）  
降矢英成（赤阪溜池クリニック院長・元日本ホリスティック医学協会会長・心療内科医）  
今井洋介（長岡西病院ヒアラー病棟部長・日本仏教看護ヒアラー学会会長・医師）  
稲葉俊輔（慶應義塾大学特任教授・医師、元軽井沢病院院長）  
石野真輔（十条武田リハビリテーション病院リハビリテーション科部長・上智大学グリーンケア研究所非常勤講師・医師）  
宮地尚子（一橋大学教授・精神科医・トラウマ研究）  
三澤史明（九州大学附属病院心療内科・医師）  
事務局長：大野邦久  
事務局：大野珠希  
非常勤スタッフ：野々目月泉（僧侶、一般社団法人日本臨床宗教師会理事）  
監事：島蓮進（東京大学名誉教授・前上智大学グリーンケア研究所所長・日本スピリチュアルケア学会理事長）  
藤井満（元朝日新聞記者、輪島支局長4年）



災害学・災害社会支援者研修センター  
お問い合わせ  
saigaigaku@gmail.com（事務局）

第1期研修期間：2025年2月～4月  
オンライン講義日程

- 1, 2025年2月6日「災害学原論～災害の捉え方と向き合い方」  
鎌田東二（京都伝統文化の森推進協議会会長・京都大学名誉教授）
- 2, 2月13日「災害学各論①発災急性期から慢性期の移行と課題」  
諫山憲司（明治国際医療大学教授・救急救命士・僧侶）
- 3, 2月20日「災害学各論②阪神淡路大震災の経験から問ひかけ学んだこと」  
草島進一（鶴岡市議会議員・元神戸元氣村副代表）
- 4, 2月27日「災害学各論③能登地震の経験から問ひかけ学ぶこと」  
森本敬一（NPO法人能登くいしん坊理事長）
- 5, 3月6日「災害自然学～地球科学・地質学の視点から」 原田憲一（元山形大学・京都造形芸術大学教授・元至誠館大学学長・京都伝統文化の森推進協議会副会長、地球科学者・地質学者）
- 6, 3月13日「防災フロンティア～防災工学の課題」  
里深好文（立命館大学防災フロンティアセンター長・教授）
- 7, 3月20日「災害宗教学」島田進（東京大学名誉教授・前上智大学グリーンケア研究所所長・日本スピリチュアルケア学会理事長）
- 8, 3月27日（木）「災害医療学：災害医療と未来医療～山岳医療と救急救命の経験から」  
稲葉俊郎（慶應義塾大学特任教授・元経井沢病院院長・循環器内科医）
- 9, 4月3日（木）「災害精神医学①～災害とトラウマ」  
宮地尚子（一橋大学教授・精神科医・トラウマ研究）
- 10, 4月10日（木）「災害人文学」  
井川裕寛（東北大学災害人文学特任助教）
- 11, 4月17日（木）「災害精神医学②フランクを読み直す」 降矢英成（心療内科・精神科医、  
赤阪溜池クリニック院長・元日本ホリスティック医学協会会長）
- 12, 4月25日（金）19時30分～21時30分「災害精神医学③災害と依存症」  
今村達弥（精神科医・ささえまよろずクリニック院長）

第1期合宿研修（実習と座学）2025年3月21日（金）11時30分～23日（日）13時

- 3月21日（金）11時30分 関西セミナーハウス集合・受付・12時昼食。13時より、関西セミナーハウスを出発し、山中に入り、瓜生山、大文字山を経て山科の庭師・佐野文憲氏（一松道園代表）のアトリエに到り、レクチャーを受ける（対面座学第1講、司会進行：鎌田東二）引率は鎌田東二と佐野文憲、夕食・懇親会は佐野氏のアトリエで行なう。懇親会后、関西セミナーハウスに戻り、宿泊。
- 3月22日（土）8時朝食。9時～12時「比叡山実習」（音羽川・砂防ダム・崩落現場・根がえり倒木現場見学&レクチャー）。セミナーハウスで昼食。13時～15時：レクチャーと遊び 諫山憲司「防災すごろく」鎌田東二「いきものあそび」、15時30分～18時30分 座学講義：藤井満「災害ジャーナリズム」、石野真輔「災害リハビリテーション」、18時30分～夕食。20時～21時：自由討議（参加予定者；受講生の他、鎌田東二・今村達也・宮地尚子・諫山憲司ほか）
- 3月23日（日）8時朝食後すぐに茶室に移動し、茶席実習（亭主：叡山東室、半東：野々目月泉）10時～12時：受講生研各自発表（1人20分）・総括、12時昼食。13時解散。

受講の仕方

1) 受講資格

- ・本センターの設立趣旨とプログラム内容をよく理解し、激甚災害社会において、支援者および社会コーディネーターの役割を果たしていく強い意志を持つ人。
- ・応募に学歴は問わない。が、経歴・活動歴・将来への意志は重視する。

2) 受講手続き

- ・経歴・活動歴・受講動機・将来計画・ビジョン（書式は自由だが、顔写真添付のこと）をワードA42枚程度にまとめてメール添付で以下にお送りください。  
saigaigaku@gmail.com
- ・書類提出締め切り 2024年11月30日（土）

書類選考

- ・書類選考の後、12月初旬に受講の許可を応募者宛メールで伝えます。
- ・受講許可通知が届いたら、指定の京都信用金庫の口座にオンライン+合宿時の対面座学授業料5万円を振り込んでください。
- ・2月中旬までに関西セミナーハウスでの3月21日から23日までの2泊3日の実習研修合宿の費用4万円（関西セミナーハウスのシングル部屋【各個室トイレ・バス付】2泊宿泊費、7食分の食事代、会議室・茶室などの施設使用料などを含む。ただし、関西セミナーハウスへの/からの往復旅費については各自負担してください）指定口座に振り込んでください。

\*不明のことがあれば、「災害学・災害社会支援者研修センター」のメールアドレス：saigaigaku@gmail.com に問い合わせください。

公益財団法人 日本心霊科学協会 協会100周年に向けて〇心霊芸術イベント

# 歌謡詩劇

作・演出 鎌田東二

神道ソングライター、京都大学名誉教授  
日本心霊科学協会顧問

# 口ツク、口ール

# 神話考II

# 末法篇2024

2025/1/26 Sun

13:30より(13:00受付開始)

Japan Psychic Science Association, Inc

劇中歌 鎌田東二(楽器…ギター・石笛・法螺貝・横笛・神楽鈴)・S.O.M(ギター・コーラス)  
出演 天空一座、東京自由大学メンバー、江原啓之、長谷川敏彦、中村恵子ほか

入場料 三千円(事前予約) 会場 日本心霊科学会館二階

お申し込みは、十一月二十二日(金)十四時より 受付開始

2025/1/26 sun

13:30 より (13:00 受付開始)

入場料 3,000円 (事前予約)  
お申込みは、11月22日(金)14時より  
会場 日本心霊科学会館2階  
新宿区上落合1-12-12  
西武新宿線下落合駅徒歩3分  
電話03-3362-7111

## 「ロックンロール神話考II末法篇2024」 観劇のお誘い

18歳の時、1本の芝居の台本を書いた。1970年の5月から7月にかけて、2か月間、それを私が演出して年上の友人たちと大塚の心霊橋で上演した。「ロックンロール神話考」というタイトルで。

話の筋立ては、神代から時を経て、イザナギ・イザナミの神がわが子を見失い、子ども探しの旅に出る。一方、現代では少年少女探偵団の子どもたちが頼を見失い、ほんとうの頼を探しに出かける。この二つの旅が時空を交差し、さまざまなハプニングに遭遇し、またいろいろなお事故を引き起こしながら出会うとするのだが、子どもたちは目的を達成できず、全員死に絶えてしまう。だが最後に、ある神秘的な超越的力が働いて蘇るという暗示で芝居は終わるという話である。なぜか、安保闘争の最後の臨り上りの時にこんな芝居をやっていたのである。

そして、ステージⅣの大塚がんを患い、脳に転移があることがわかり、本年1月1日に能登地震が起きて、俄然、スイッチが入った。どうしても、「ロックンロール神話考II末法篇2024」を上演したい。

「みなさん、天気は死にました!」という天気予報官の「天気予報?」から始まるこの芝居を、元の原稿を思い出しながら、書き直した。それを、来年の1月に、歌謡詩劇という群衆歌謡劇として日本心霊科学道会で上演させていただくことになった。その最重要の狂言回し役の天気予報官には、心霊科学協会の評議員の江原啓之さんをお願いした。すでにみな、大張り切りで、10名以上の群衆出演者たちが通し稽古などを行なっている。

ぜひこの機会に、みなさんに観ていただきたい。1970年の原作が55年後の時空を串刺しにして「死んだ天気」を蘇らせることができるか? 劇中には、命天罰な「異界遊歴」も組み込まれているので、協会関係のみなさんにも楽しんでもらえるだろう。悲劇と喜劇、滑稽と悲憤と祈りがないうまに合ったこのへんでこな心霊詩劇に、乞うご期待!



2024年10月25日  
鎌田東二記

公益財団法人 日本心霊科学協会 協会100周年に向けて〇心霊芸術イベント  
歌謡詩劇 作・演出 鎌田東二 神道ソングライター、京都大学名誉教授、日本心霊科学協会顧問

# ロックンロール神話考II 末法篇2024

《出演者》天空二座(石毛敏子、松倉福子、島崎美和子、井上喜行、池野直宏)、  
東京自由大学メンバ(辻信行、津田智子、山口卓史、山口祐二)、  
中村風子(O.K.N.O.V.A.K.)、長谷川敏彦(一般社団法人未来医療研究機構代表理事)、  
江原啓之(日本心霊科学協会評議員)、遠原純代(事務局)

《劇中歌》鎌田東二(炎傷・ギター)・石田 法徳(尺八)・横濱 神楽部(KON-KITA)・コーラス



# 人生の記憶 死後の証言

慕わしき人々の記念に

津城匡徹

Tsushiro Mase-takita, Memories of the Lifetime, Testimonies of the Postmortem: In Remembrance of Intimate People